

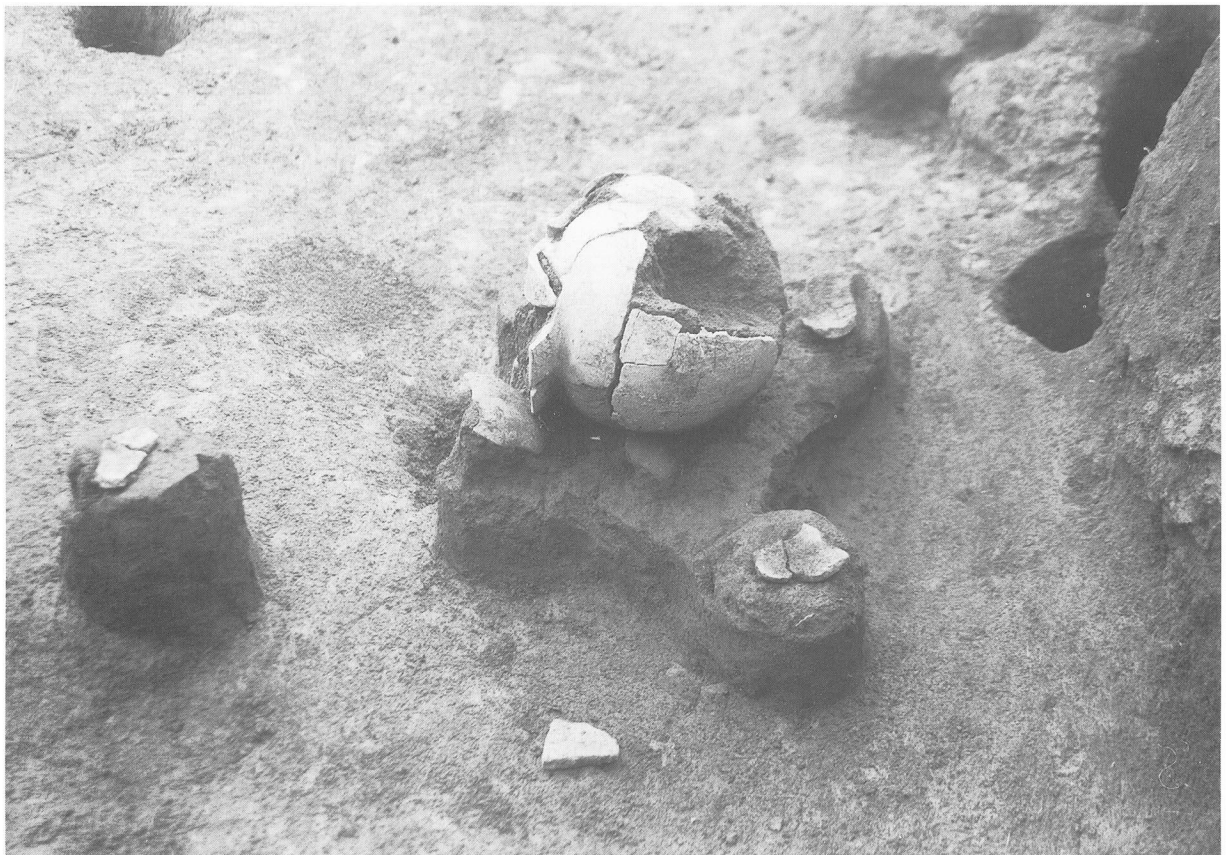
SA 2
検出状況

SA 2 検出状況 (南より)

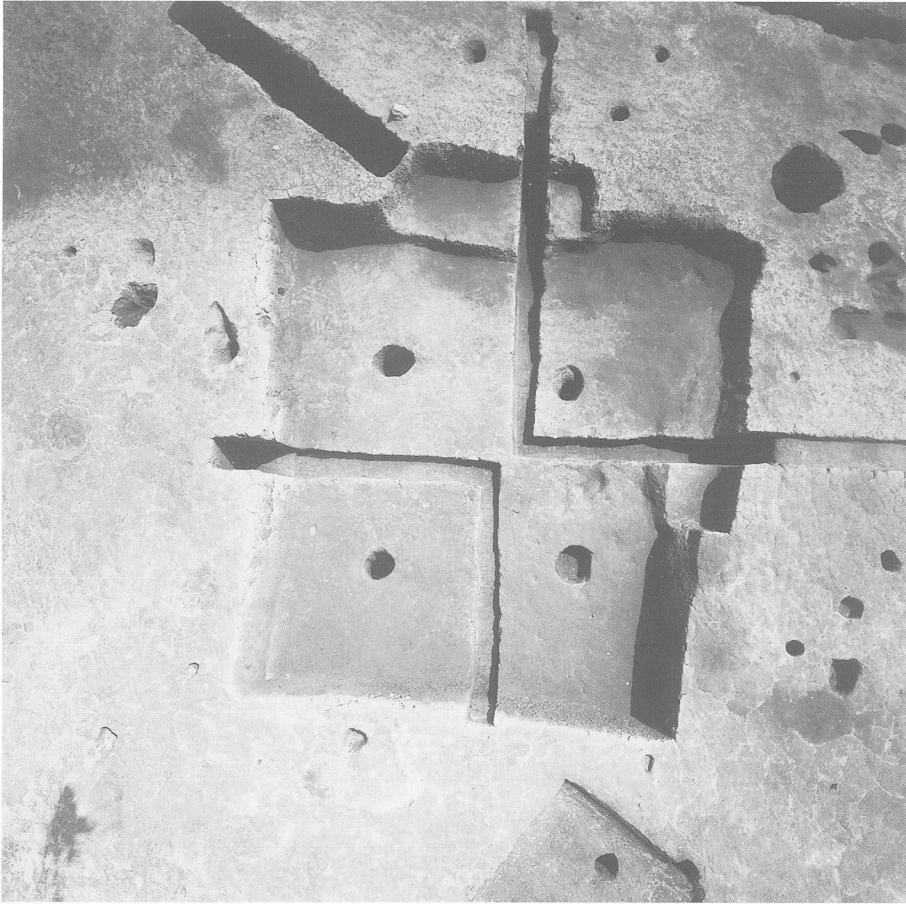




S A 2 遺物検出状況

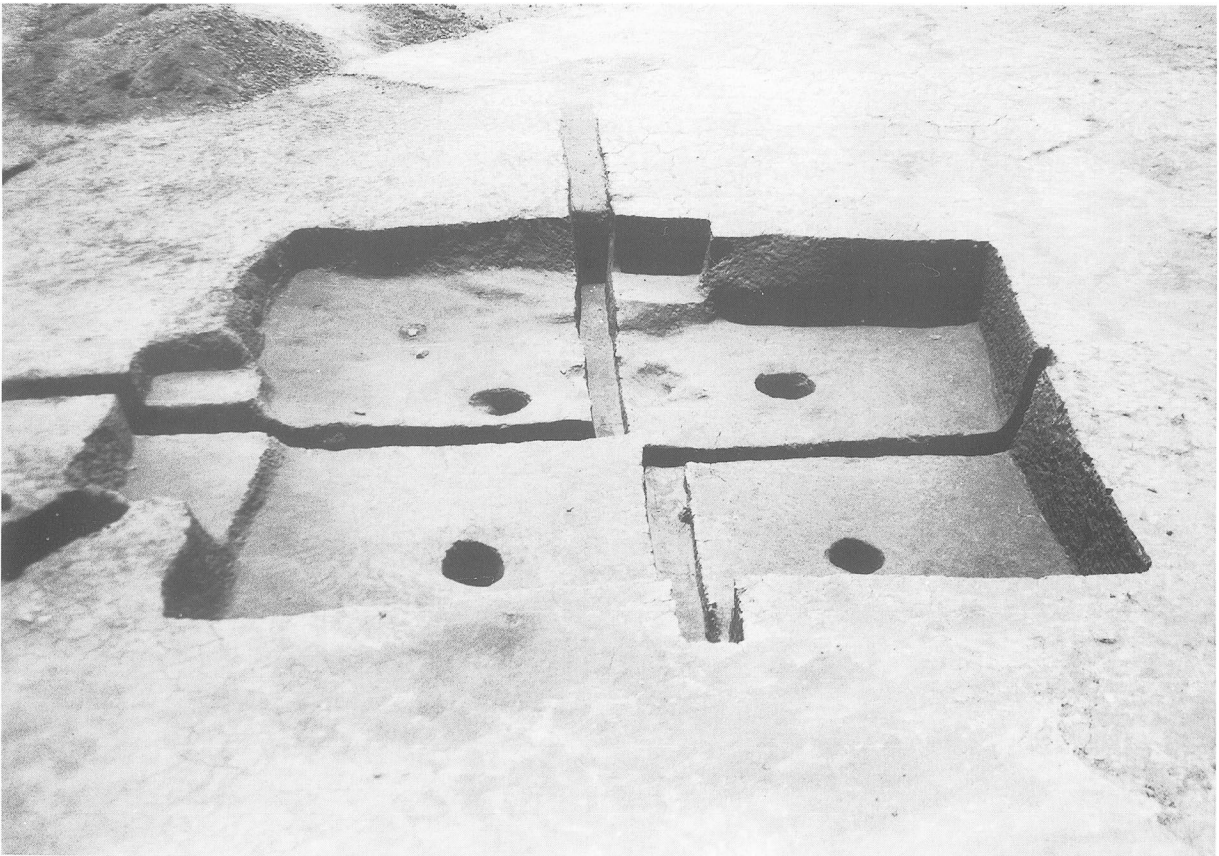


S A 2 布留系甕(16)出土状況



SA 3
検出状況

SA 3 検出状況 (南より)

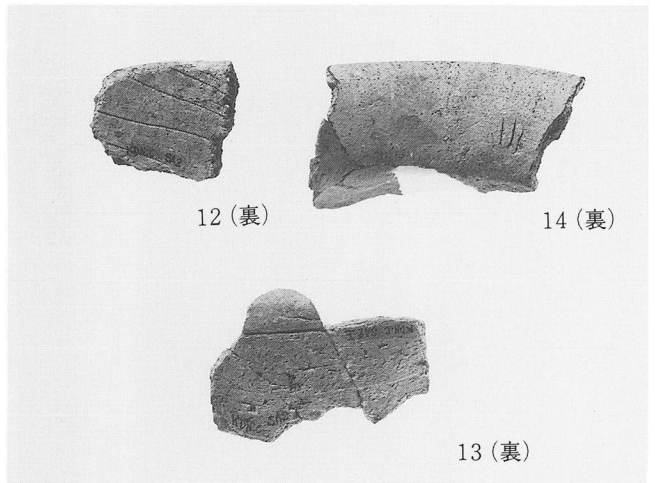
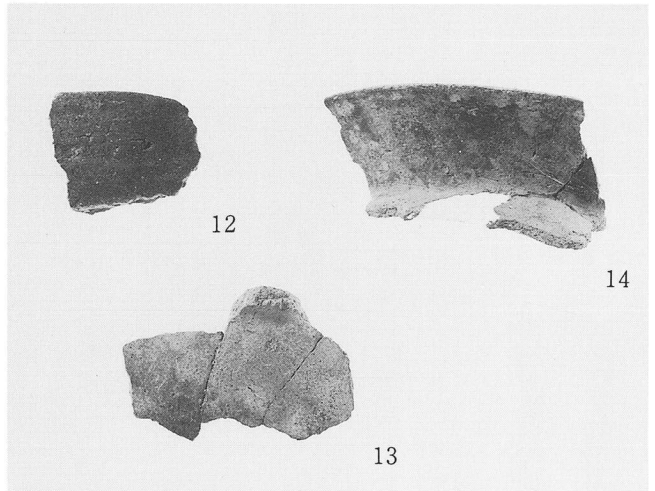
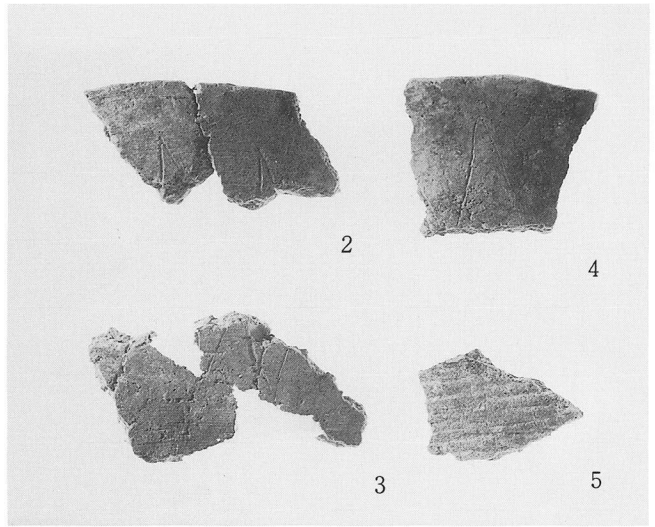
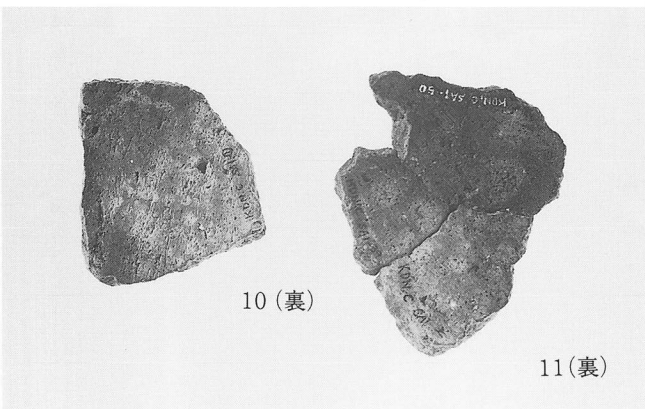
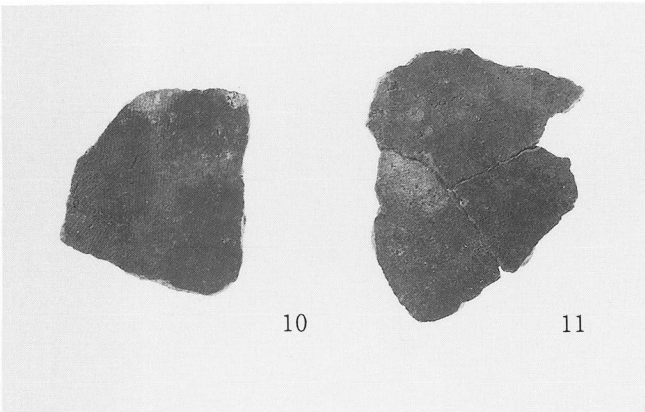
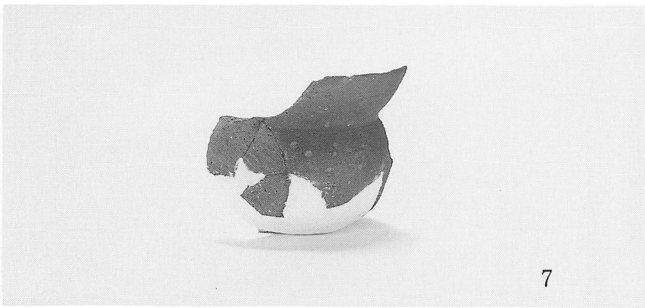


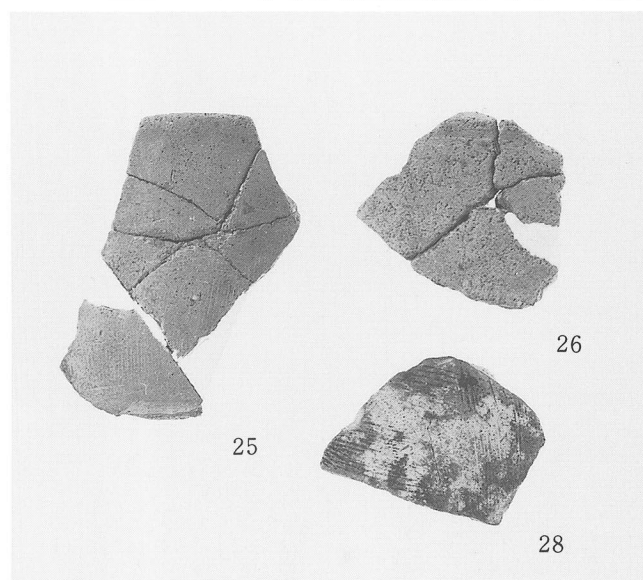
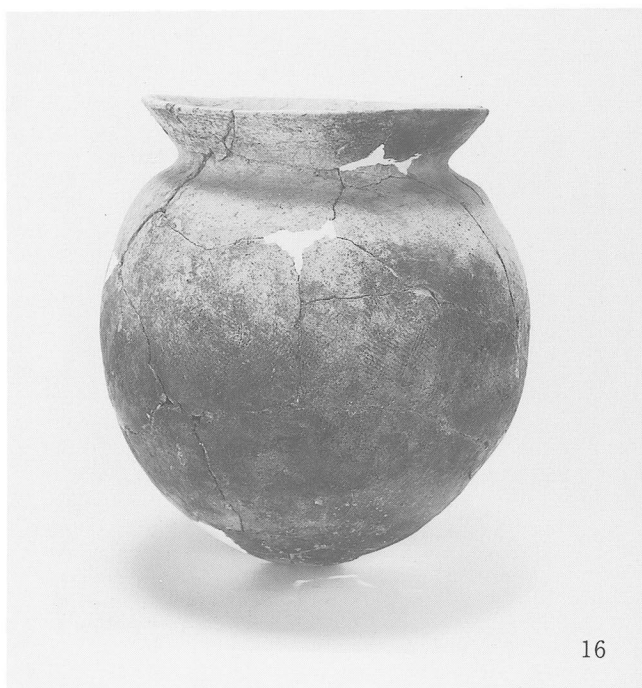
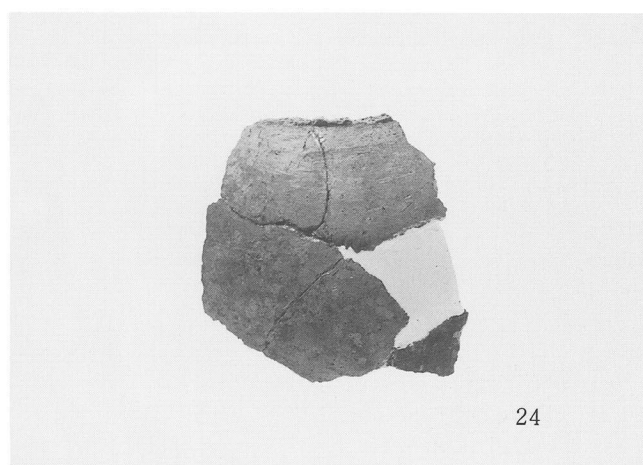
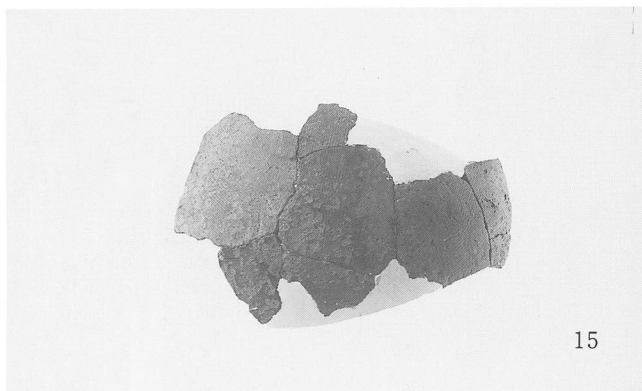
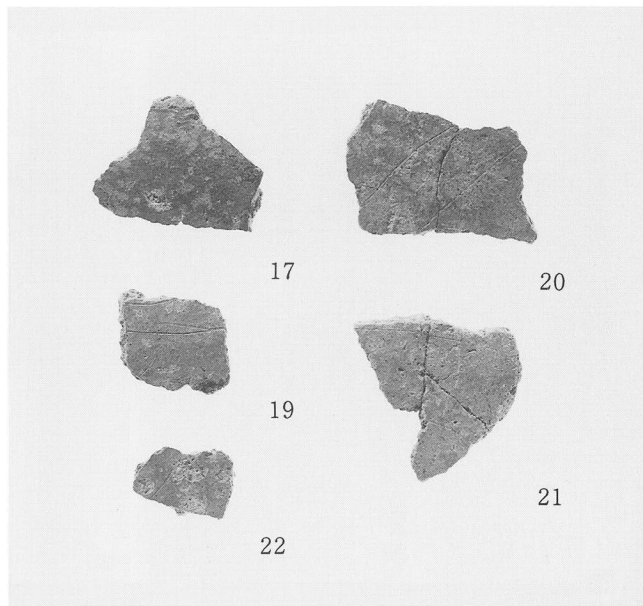


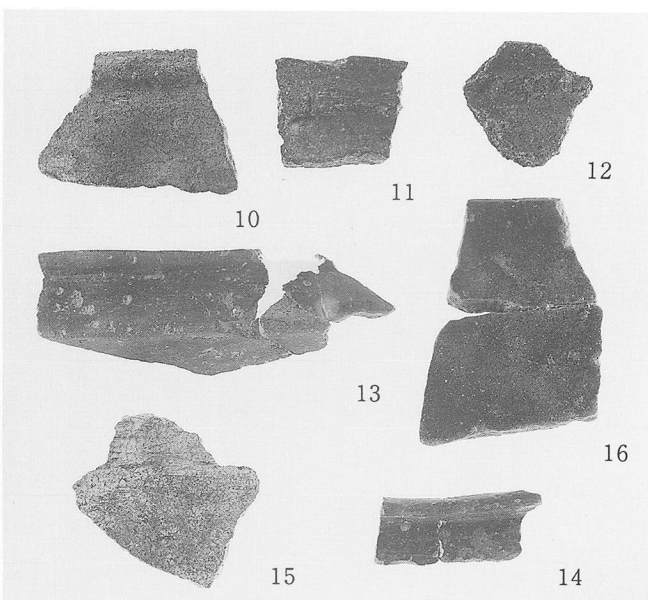
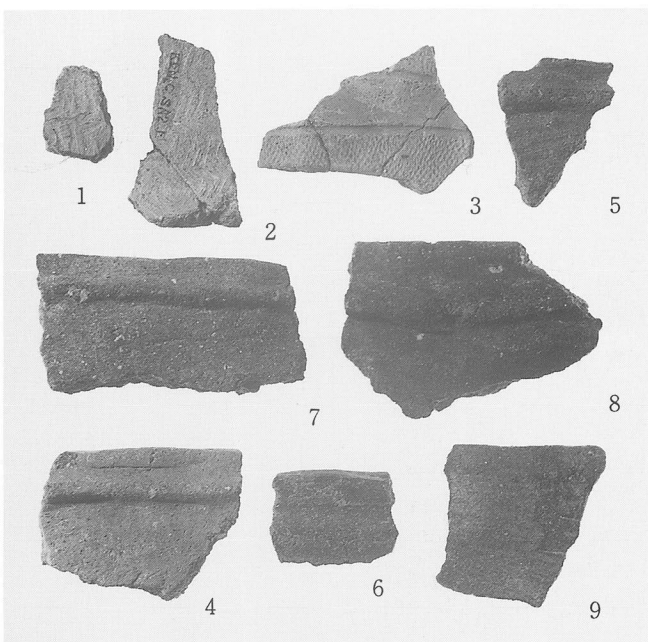
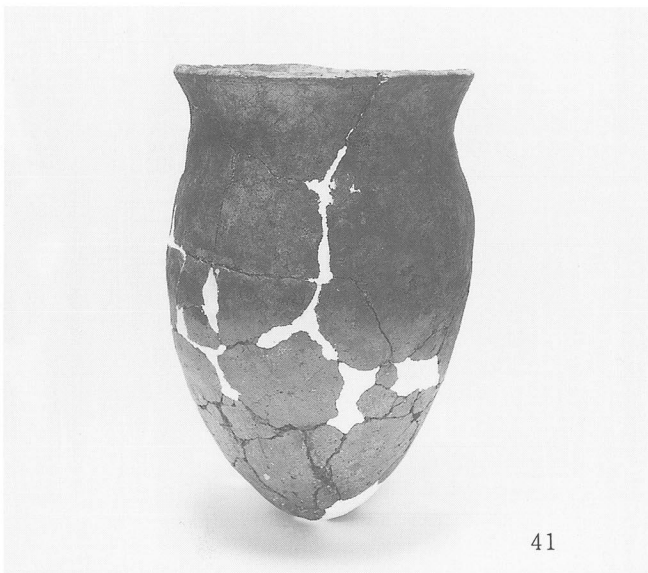
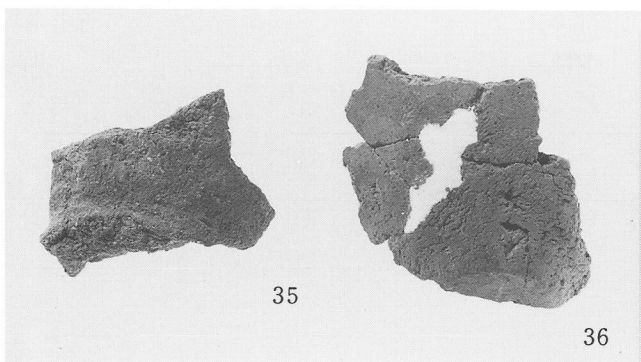
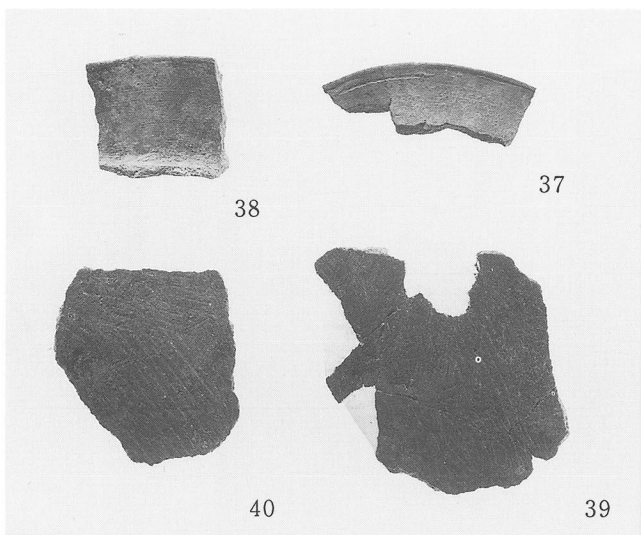
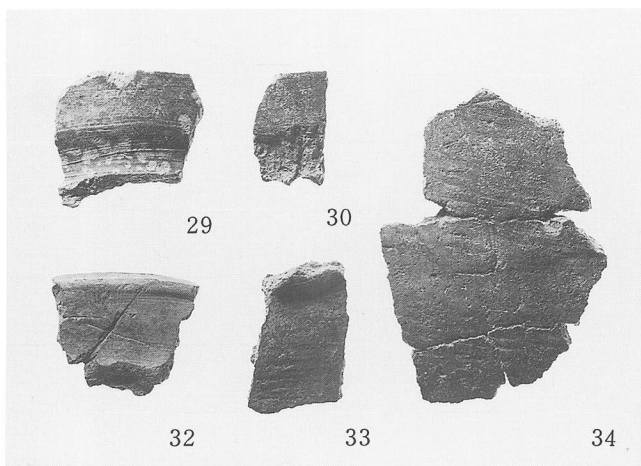
S A 3 鐵器出土狀況

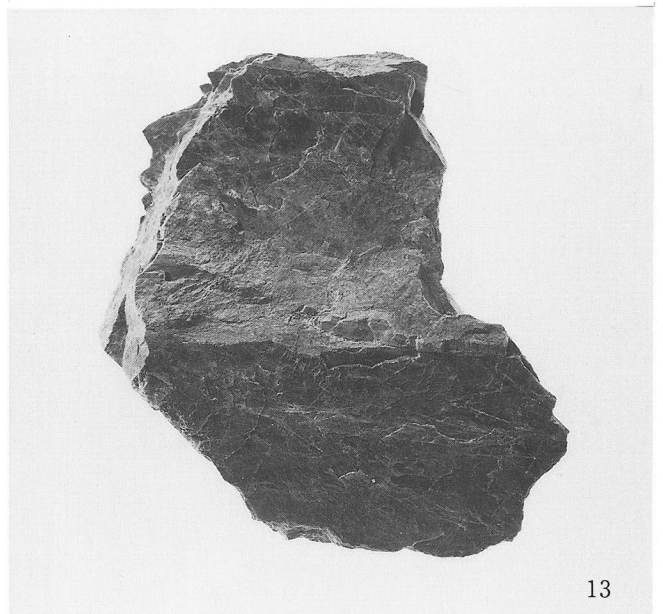
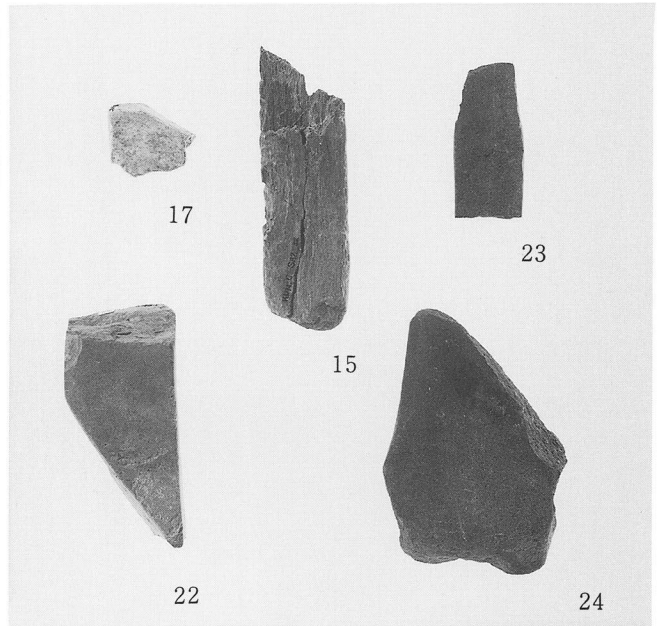
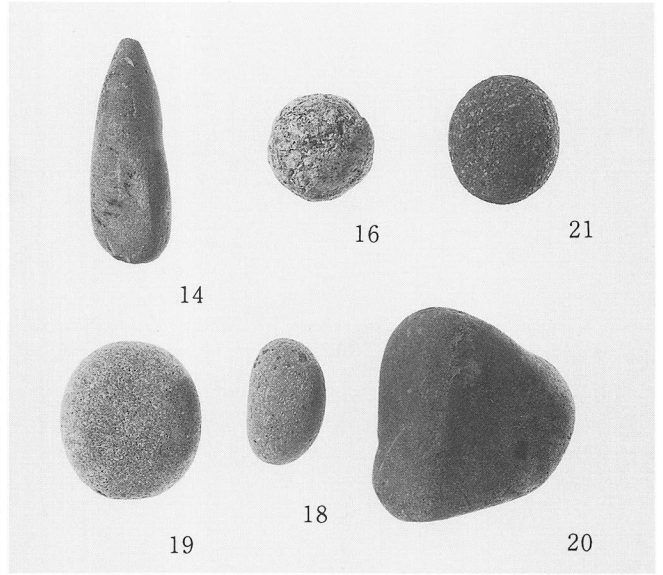
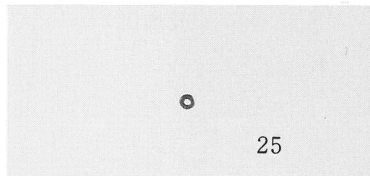
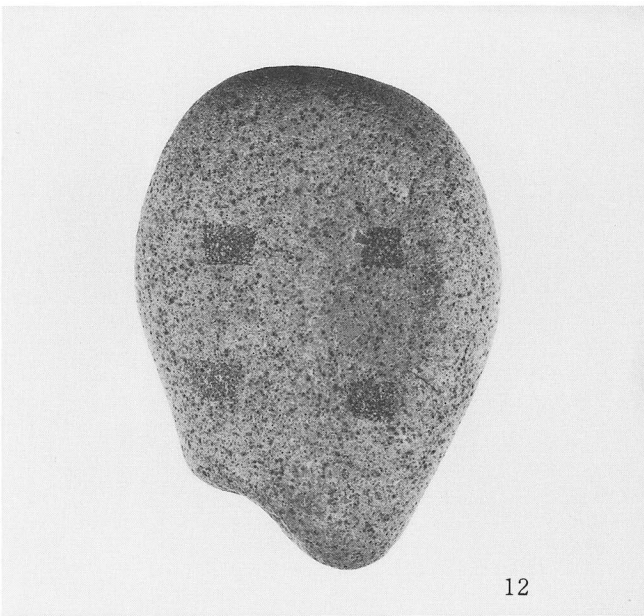
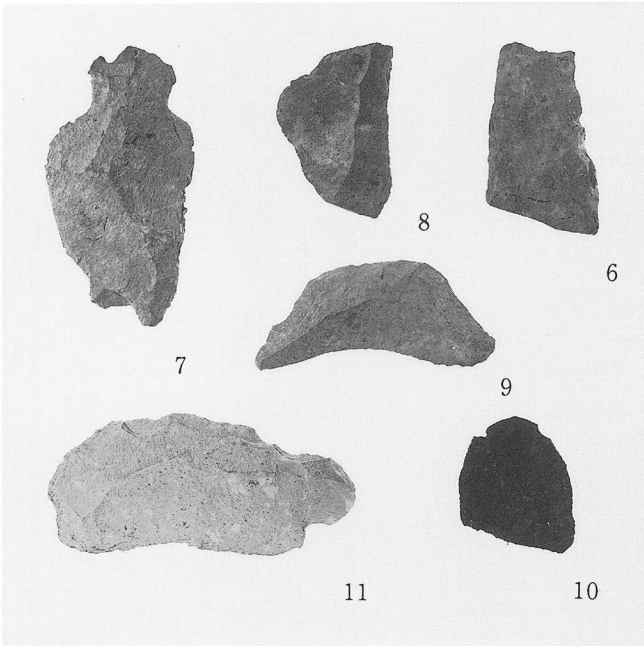
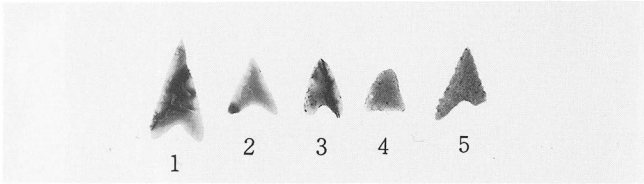


S A 1 遺物出土狀況









みなみ ひら
南平第3遺跡

第IV章 南平第3遺跡

第1節 遺跡の立地

南平第3遺跡は高千穂町大字押方字南平に所在する。高千穂町は観光地として有名であるが、その観光地のひとつである五ヶ瀬川溪谷（高千穂峡）の西方約400mに位置し、標高約300m程の南向き斜面上に立地する。

遺跡が所在する大字押方には多くの遺跡の存在が知られているが、南平地区だけでみても調査区の北に近接して南平第1遺跡（縄文～古墳時代）、国道218号線挟んで南側には南平第2遺跡（縄文～弥生時代）がある。また、南平第1遺跡のさらに北側の丘陵高位には数基で構成される押方横穴墓群も立地している。

第2節 調査の概要

本遺跡の調査は、原因が道路新設であったために、幅20m・長さ100mの非常に細長い調査範囲が対象となった。調査以前の現況は水田や畑として利用されており、棚田状に地形が改変されていた。この耕作土およびその下の造成土を重機によって除去した後、遺構・遺物の検出作業を行った。

調査の結果、縄文時代から近世に及ぶ遺構・遺物が検出されたが、弥生時代のものがその大半を占める。各時期の状況は以下のとおり。

縄文時代

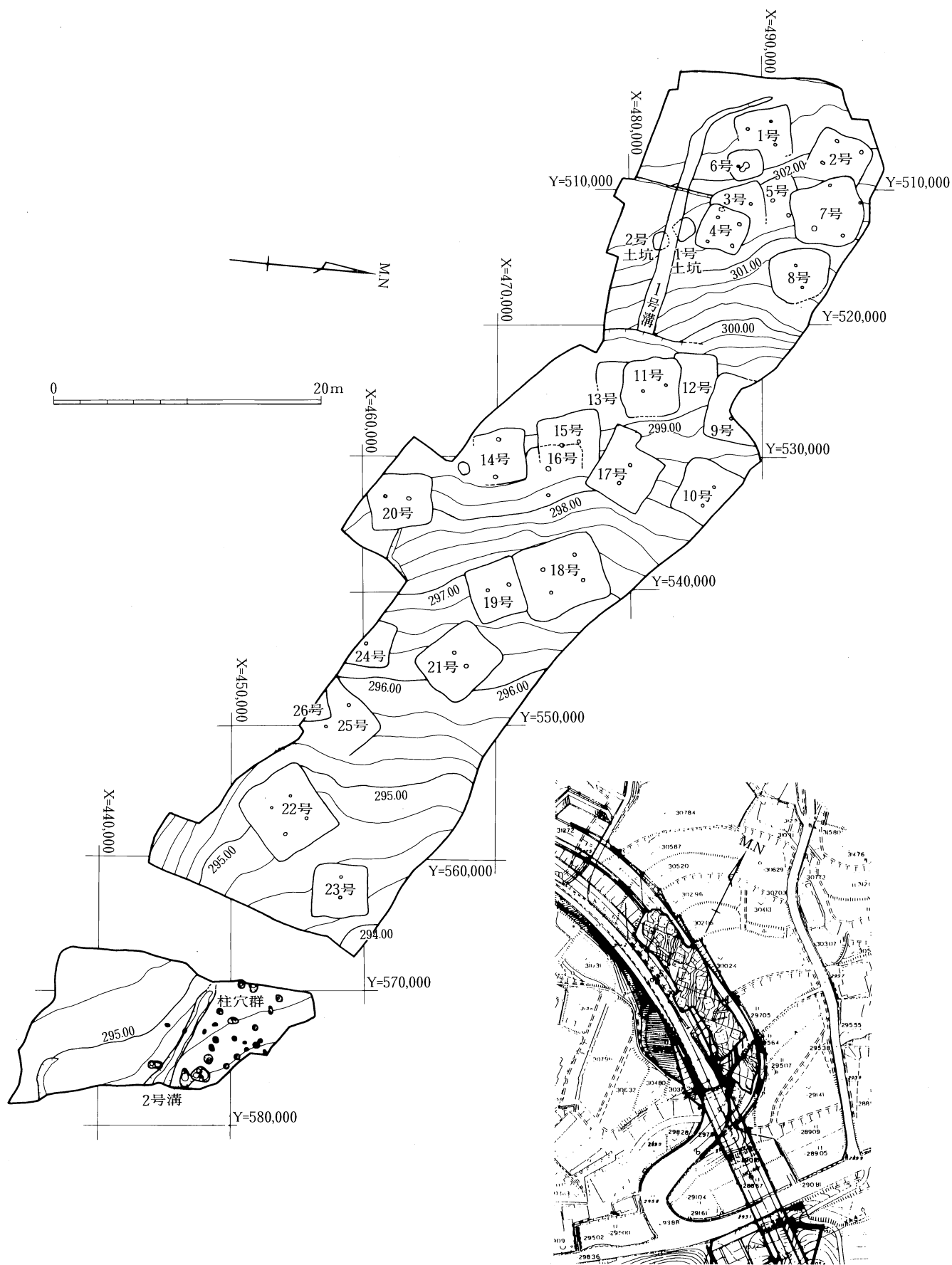
柱穴状遺構1基以外に遺構は確認されなかったが、後期から晩期に及ぶ土器および石器が包含層中から出土している。出土した土器の点数は少ないが、様々な形式の土器がみられる。

弥生時代

弥生時代では、方形を基調とした平面プランで2本または4本の支柱穴を持つ住居址26軒とともに中期～後期の遺物が出土している。現地調査の段階で数軒の住居には切り合い関係が認められた。また、調査区外に遺構が続くものが数件あり、地形からみても周辺には多くの住居址が存在する可能性が高く、かなり大規模な集落であったとみられる。土器には肥後・豊後の影響を受けたものが多くみられ、本遺跡の地理的特質が反映されている。また、磨製石鎌がかなり多く出土しており、特に2号住居址ではこの原材料とみられる偏平で細長い石材がまとまって出土しており注目される。

その他

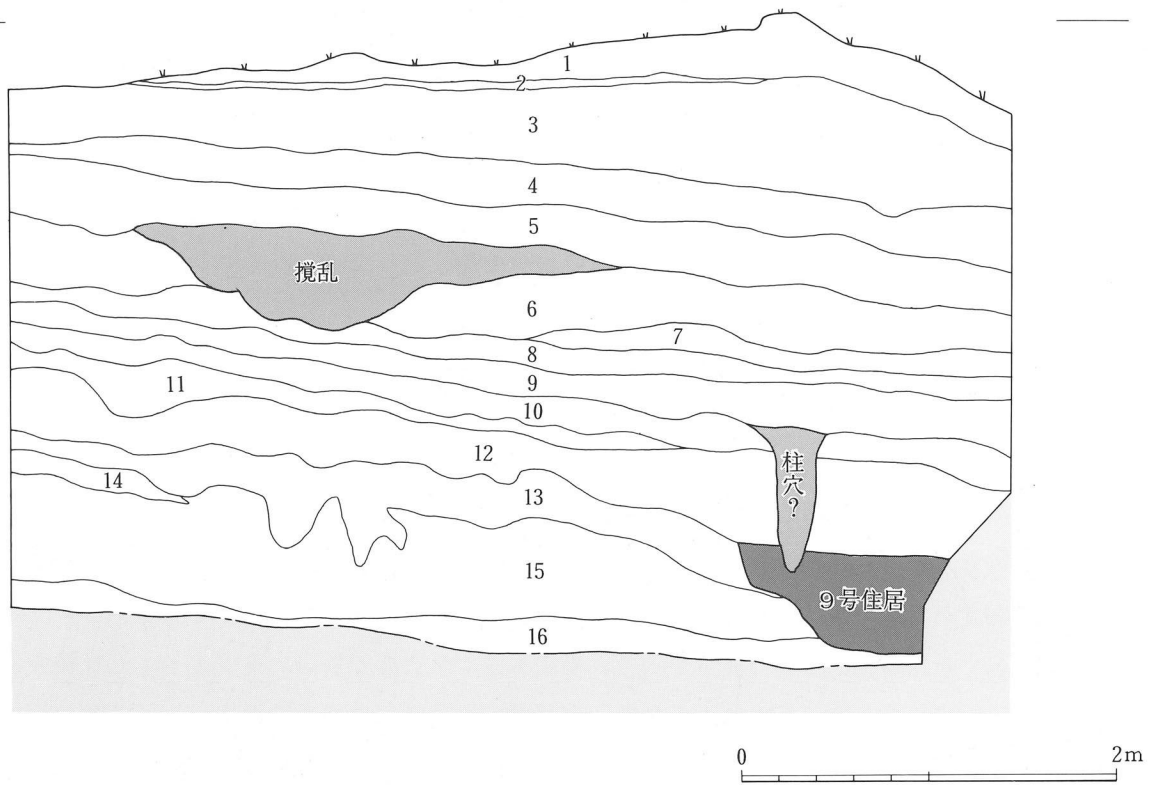
弥生時代以降の遺物では、古墳時代の須恵器や近世の陶磁器などがわずかながら出土しているが、遺構は確認されなかった。また、時期不明の遺構として柱穴群や溝状遺構、土坑が検出されている。



第1図 遺跡位置図および遺構分布図

第3節 層 序

遺構は主に第15層もしくは第16層上面で検出した。また、遺構の埋土と地山の土の色調が非常に類似しており、遺構検出は非常に困難であった。このため、トレンチによる断面観察を多用して遺構の認定を行い調査をすすめた。縄文時代～弥生時代の遺物包含層は第10～13層で、あまり良好な状態ではなかった。



第2図 土層図

- | | | |
|------|----------|---------------------------------------|
| 第1層 | 水田耕作土 | |
| 第2層 | 水田床土 | |
| 第3層 | 造成土 | |
| 第4層 | 褐灰色土 | (10YR4/1) 小礫を少量含む。造成土の可能性ある。 |
| 第5層 | 灰黄褐色土 | (10YR4/2) 粘性を帯び、炭化物、小礫をわずかに含む。 |
| 第6層 | にぶい黄褐色土 | (10YR5/3) 5層よりもしまりがあり、小礫の混入も少ない。 |
| 第7層 | にぶい黄褐色土 | (10YR4/3) 6層よりもさらにしまりがあり、小礫・炭化物を微量含む。 |
| 第8層 | 暗灰黄色土 | (25Y4/2) 赤橙色の微粒子、小礫をわずかに含む。 |
| 第9層 | 黒褐色土 | (10YR3/1) しまりがなく、調査区内でもみられない部分がある。 |
| 第10層 | オリーブ褐色土 | (25Y4/4) 10層ブロックを含み、炭化物粒を少量含む。 |
| 第11層 | オリーブ褐色土 | (25Y4/3) 10層ブロック・炭化物粒を少量含む。 |
| 第12層 | 暗オリーブ褐色土 | (25Y3/3) しまりがあり、やや粘性を帯びる。炭化物粒を含む。 |
| 第13層 | 暗オリーブ褐色土 | (25Y3/3) 12層と同様だが、やや明るい。 |
| 第14層 | 黄灰色土 | (25Y4/1) 炭化物を多く含む。調査区内でもみられない部分がある。 |
| 第15層 | オリーブ褐色土 | (25Y4/6) しまりが強く、粘性も強い。炭化物等はみられない。 |
| 第16層 | 黄橙色火山灰 | いわゆるアカホヤ火山灰である。 |

第4節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺 構

柱穴状遺構（第3図）

調査区中央やや西よりに位置する10号住居址の床面下から長径60cm・短径45cm楕円形状で深さ約50cmの柱穴状の遺構が検出された。埋土中からはやや浮いた状態で偏平な石が出土している。また、この遺構を中心に半径1mほどの範囲は硬化しており、住居址の床面であった可能性も考えられる。

出土遺物（第3図 1）

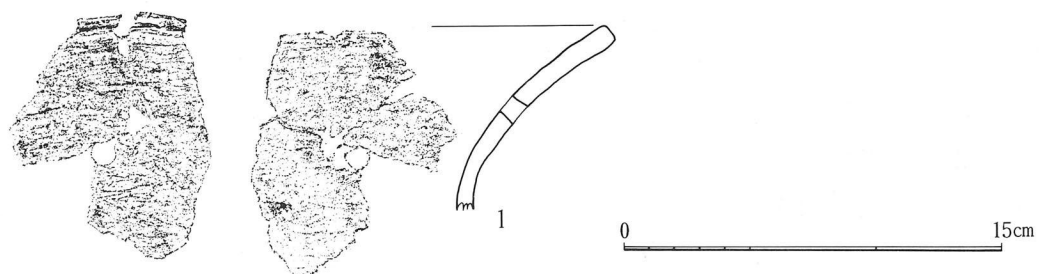
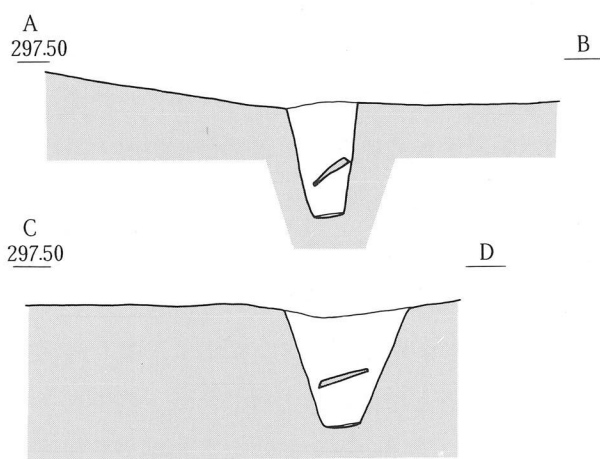
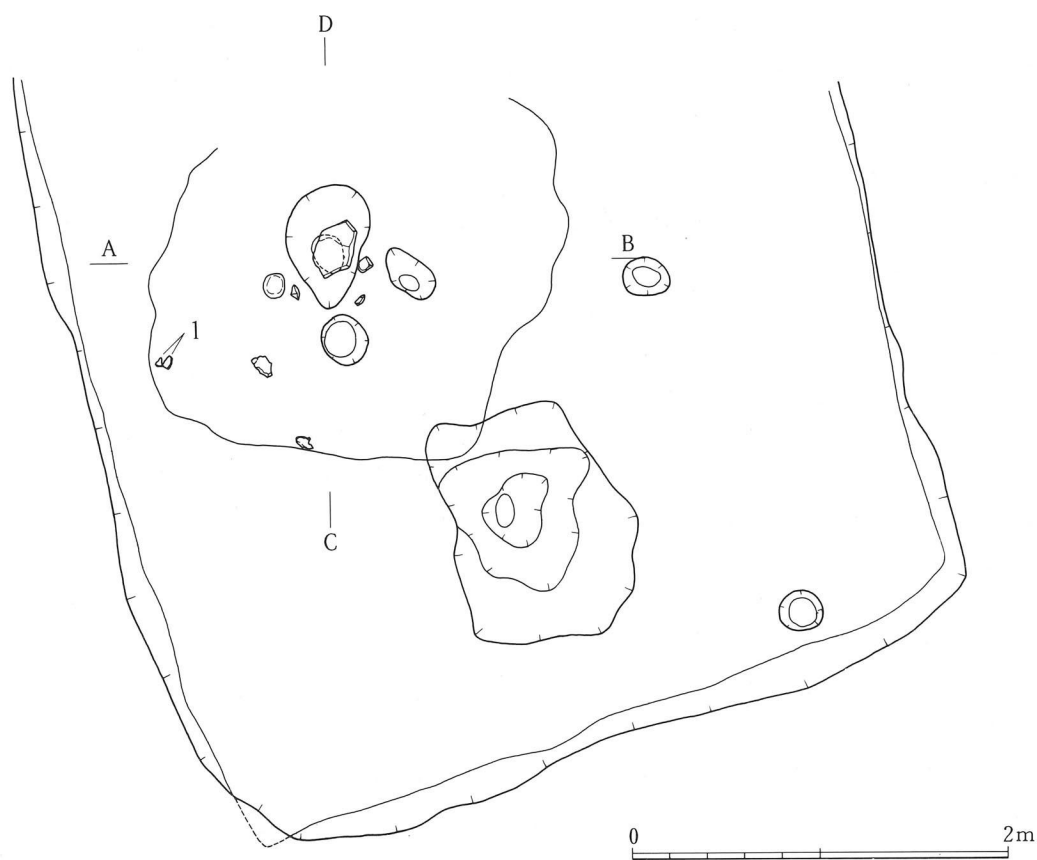
硬化面上からわずかに遺物が出土している。礫がほとんどであるが1点土器がみられた。1は深鉢形土器の口縁部で外面は黒色、内面はやや黒褐色を呈し、ともに横方向の丁寧なミガキがみられる。屈曲部から大きく外反しながら開き口唇部は平坦で径1cmほどの穿孔がみられる。

2 遺 物

土器（第4・5図）

出土点数は多くないが後期から晩期にかけての多彩な土器がみられた。主に第12・13層を中心に出土し、前述の柱穴状遺構が存在した10号住居址周辺を中心として出土している。2・3・5・6・8・9～11は10号住居址からの出土である。

2～14は内湾するくの字状の口縁部をもつ磨消縄文系の深鉢形土器である。2は直線的な胴部から明瞭な稜を持たず外反しながら屈曲し、くの字状の口縁部への続くもので、口縁部外面には縄文を地文として2条の平行沈線が巡り、その間に山形の沈線を連続させて繋ぐ鋸歯状（角張った波状と言うべきか？）の沈線が施されている。口縁部はやや波状を呈し、口唇部は平坦に仕上げられている。また、胴部上位には施文がみられない。3は口縁部の施文帯に3条の平行沈線文と刺突文がみられ、その沈線文の上下には縄文がみられる。口縁部はやや波状を呈し、口唇部は平坦に仕上げられている。4は3と類似した口縁部であるが平口縁の可能性があり、刺突も3より大きく長い。5は2～4と比較すると器壁が薄く、8に類似した小型のものとみられる。口縁部の施文帯には縄文を地文として2条の平行沈線がみられ、これを切るかたちで2つの段違いの刺突文がみられる。沈線間は縄文が磨消され、口縁部は若干波状を呈する。6は口縁部の施文帯には地文の縄文を磨消した後3条の沈線文を施し、2本目の沈線の上に横並びに2つの刺突文がみられる。7は口縁部の施文は5に類似するが、平行沈線の数が3本であり器壁も厚い。8は丸みを帯びた胴部から明瞭に屈曲してわずかに外反しながらくの字状の口縁部に続く小型のものである。口縁部は波状を呈し、口唇部は平坦に仕上げられている。口縁部の施文は5とほぼ同じだが、刺突文の上下が左右逆である点で異なる。胴部上半には頸部下に連続刺突文、その下に上下2組の2条の平行沈線によって区画された施文帯がみられる。この施文帯には2本の平行沈線による上下逆の連続三角文を構成し、三角形の両端に円形の刺突文、その上または下に左に開いた弧文とそれに垂下するかたちで2組の対向弧文が施されている。また、地文の縄文は磨消されている。9は深鉢の胴部上半で頸部は明瞭に屈曲する。外面の施文は8と近似しているが器壁が厚く、大形であるとみられる。また、対向弧文の数も少なくとも3組以上は存在する点や、地文の縄文は平行沈線間以外磨消されていない点で異なる。10は頸部下に半円形の刺突、その下に2条の平行沈線が巡る。さらにその下

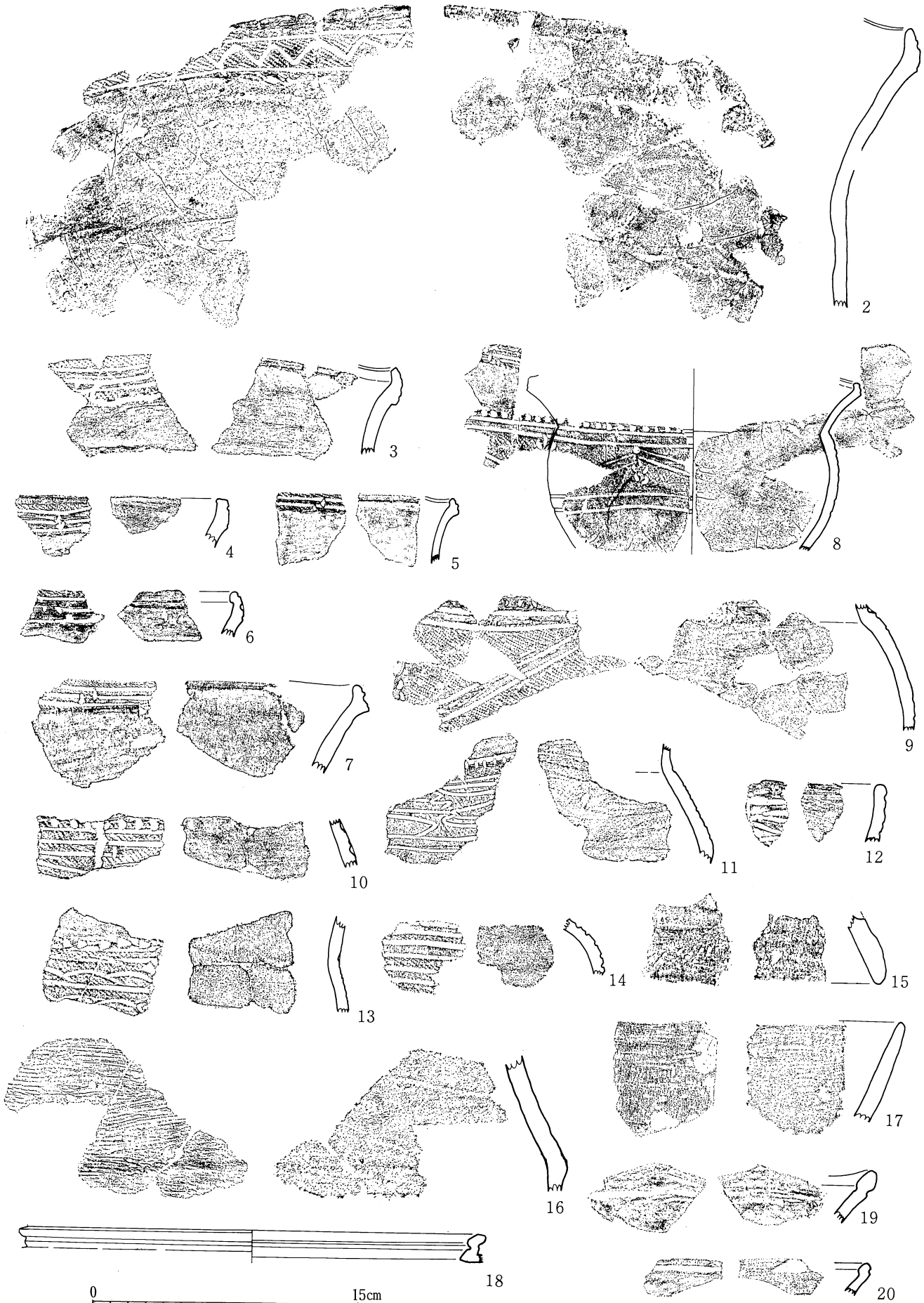


第3図 柱穴状遺構及び出土遺物実測図

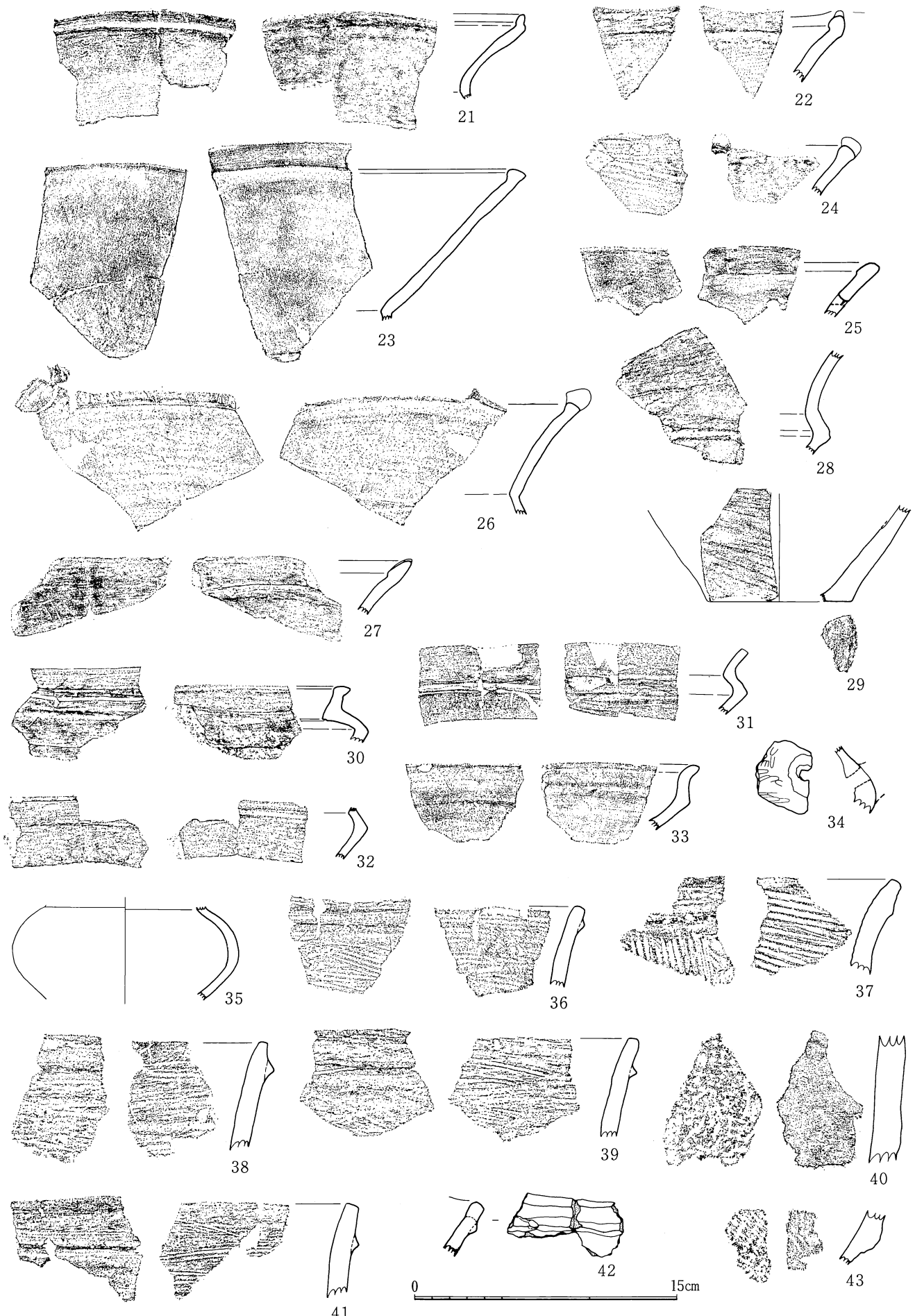
に横と斜めの沈線がみられ、横方向の沈線の端部は縦の刺突文によって切られている。地文に縄文がみられる。11は胴部中位の最大径を計る部分で屈曲し、頸部でやや外上方に屈曲するもので、頸部に1条の沈線文が巡り、その下に刺突文、複雑な沈線文を挟んで2条の平行沈線文がみられる。また、地文に縄文は磨消されていない。12は外面には11の胴部と類似した複雑な沈線文がみられる。13は頸部に連続刺突文その下に間隔をおいた平行沈線が巡りその間に弧状沈線による連続文がみられる。14は内湾する口縁部もしくは胴部で多条の平行沈線文がみられる。また、沈線間は1つおきに磨消されている。15は脚台付き皿の脚の裾部とみられる。端部付近が幅広く肥厚し、その部分に太い櫛歯状の工具による刺突文がみられる。16は胴部中位で屈曲する深鉢の胴部で、外面には粗い条痕がみられる。17は無文の深鉢の口縁部とみられる。18～28・30～33・35の精製の浅鉢である。18は頸部が短く、口縁部と胴部が著しく接近したもので、口縁部内外面に1条の凹線がみられる。19は口縁部が山形を呈し、内外面に1条の凹線がみられる。20も19と同様だが器壁が薄い。21は胴部の屈曲部から大きく外反しながら立上がり短く直立する口縁部をもち、口縁部内外面に1条の凹線がみられる。22は口縁部にいわゆるヒレ状（またはリボン状）を呈する突出部をもち、内面の凹線は明瞭だが外面は稜がみられるのみである。23は大形で屈曲部から直線的に外方に大きく開き、丸く肥厚した口縁部をもつ。口縁部内面には凹線がみられ、明瞭な段を形成している。24は22と同様の特徴をもつが口縁部内面に凹線はみられない。25は23に類似した特徴をもつが口縁部内面の段が低い。また、内面からの穿孔がみられる。26は屈曲部からやや外反しながら口縁部に至るもので、口縁部にはヒレ状の突出がみられ、その内面と屈曲部外面に1条の凹線がみられる。27は外反しながら大きく開くもので稜をもってわずかに内折し、内面に凹線がみられる。また口縁部の一部にヒレ状の突出がみられる。28は胴部の屈曲部外面に1条の凹線がみられる。29は精製深鉢の底部である。底の部分は非常に器壁が薄く、外面には斜め方向の丁寧なミガキが施されている。30は明瞭な稜をもって強く屈曲した胴部から頸部で斜め上方に直線的に立上がり短く水平方向に張り出した口縁部をもつ。口縁部の内外面に細くて浅い凹線がみられる。31・32は28に近い形状とみられるが、胴部屈曲部の外面に凹線はみられない。33は胴部の屈曲部から外反しながら口縁部に続くもので31などと比較するとかなり屈曲が緩慢になっている印象を受ける。34は注口土器の注口部分とみられる。35は胴部が稜をもった屈曲ではなく、強く内湾する形状となっている。36～39・41・42はいわゆる無刻目突帯文をもつ深鉢形土器である。内外面ともに条痕がみられるが、突帯の位置や調整に若干の相違がみられる。また、42では突帯の粘土を繋げた部分が明瞭に残っている。40・43はいわゆる組織痕土器であるが繊維の圧痕の形状が異なる。いずれも器形は不明である。

石器（第6・7図）

縄文時代のものとみられる石器は100点ほど出土している。諸般の事情により36点についてのみ図化しているが、未掲載のものほとんどは石鏃である。また、石鏃については簡単な形態分類を行い、そのなかで未掲載のものについても若干ふれるので参照されたい。



第4図 縄文土器実測図(1)



第5図 縄文土器実測図(2)

第1表 南平第3遺跡出土土器観察表

遺物 番号	種別	器種	部位	出土 地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	縄文土器	深鉢	口縁~胴部	10号住居				ミガキ	ミガキ	黒	黒褐 灰黄褐	7mm大のふい赤褐色の石及び2mm以下の灰白・褐灰の砂粒を含む	穿孔あり
2	縄文土器	深鉢	口縁~胴部	10号住居				縄文・沈線文・ナデ	ナデ (風化ざみ)	褐灰	褐灰 灰黄褐	2mm程度の黄・灰白色の砂粒及び2mm以下の無色透明・柱状に黒く光る砂粒を含む	
3	縄文土器	深鉢	口縁	10号住居				磨消縄文・沈線文 刺突文・ミガキ	ミガキ	にぶい褐	明赤褐	2mm以下の灰・黄灰・褐色砂粒及び2mm以下の灰・黄灰・褐色の砂粒を含む	
4	縄文土器	深鉢	口縁	8号住居				磨消縄文・沈線文 刺突文・ミガキ	ミガキ	黒褐	黒褐	3mm以下の白色の砂粒及び1mm以下の無色透明の砂粒を含む	
5	縄文土器	深鉢	口縁	10号住居				磨消縄文・沈線文 刺突文・ミガキ	ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の灰白・灰色の砂粒及び0.5mm以下の無色透明の砂粒を含む	
6	縄文土器	深鉢	口縁	10号住居				磨消縄文・沈線文 刺突文・ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰・灰白色の砂粒及び1mm以下の無色透明の砂粒を含む	
7	縄文土器	深鉢	口縁	2号住居				磨消縄文・沈線文 刺突文・ミガキ	ミガキ	にぶい赤褐	にぶい褐	2~35mm以下の淡黄・褐色の砂粒及び2mm以下の透明光沢・黒色光沢の砂粒を含む	
8	縄文土器	深鉢	口縁~胴部	10号住居 18号住居	(18.6)			磨消縄文・沈線文 刺突文・ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	2mm以下の黒・乳白・褐色及び透明・半透明・黒色光沢の砂粒を含む	
9	縄文土器	深鉢	胴部	10号住居 18号住居				磨消縄文・沈線文 刺突文・ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙 黒褐	にぶい黄	微細な3mmの灰白・灰褐及び透明・黒の光沢の砂粒を含む	
10	縄文土器	深鉢	胴部	10号住居 12層				磨消縄文・沈線文 刺突文・ミガキ	ミガキ	黄灰	暗灰黄	1mm以下の無色透明・柱状に黒く光る砂粒を含む	
11	縄文土器	深鉢	頸部~胴部	10号住居				磨消縄文・沈線文 刺突文・ミガキ	ミガキ	灰黄褐	暗灰黄	微細な1.5mmの灰白・淡黄・灰褐・明赤褐・金や透明の光沢の砂粒を含む	
12	縄文土器	深鉢	口縁	3号住居				沈線文・ナデ	ナデ	橙	橙	2mm以下の灰白・灰色の砂粒を含む	
13	縄文土器	深鉢	胴部	8号住居				磨消縄文・沈線文 刺突文・ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい橙 灰黄褐	2mm以下の灰白・灰・無色透明の砂粒を含む	
14	縄文土器	深鉢	胴部	25号住居				磨消縄文・沈線文	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の淡黄・灰白色の砂粒及び1mm以下の無色透明の砂粒を含む	
15	縄文土器	脚台付皿	脚部	25号住居				刺突文・ナデ	ナデ	黄灰	黄灰	1mm以下の黒褐色の砂粒及び0.5mm以下の透明に光る砂粒を含む	
16	縄文土器	深鉢	胴部	20号住居 12・13層				条痕	粗いナデ	暗赤褐	にぶい赤褐	7mm以下の灰色の石及び2mm以下の黒・褐色の砂粒及び黒い微細な光沢の砂粒を含む	
17	縄文土器	深鉢	口縁	12・13層				粗いナデ	粗いナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	5mm以下の乳白色の砂粒及び1mm以下の金色に光る砂粒を含む	
18	縄文土器	浅鉢	口縁	12・13層	(26.4)			ミガキ	ミガキ	明赤褐 灰褐	にぶい赤褐	微細な黄灰・灰褐色の砂粒及び透明・半透明の光沢の砂粒を含む	
19	縄文土器	浅鉢	口縁	12・13層				ミガキ	ミガキ	灰黄褐	灰褐	2.5mm以下の浅黄色の砂粒及び1mm以下の無色透明光沢の砂粒を含む	
20	縄文土器	浅鉢	口縁	11・12層				ミガキ	ミガキ	にぶい褐	にぶい褐 灰褐	2mm以下の黄褐色の砂粒を含む 精良	
21	縄文土器	浅鉢	口縁	18号住居				ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	浅黄	1mm以下の灰白・黒の砂粒及び微細な透明・半透明・黒色光沢の砂粒を含む	
22	縄文土器	浅鉢	口縁	12層				ミガキ	ミガキ	にぶい褐	にぶい褐	微細な光沢の砂粒を含む	ヒレ又は リボン状 の突起
23	縄文土器	浅鉢	口縁	19号住居				ミガキ	ミガキ	暗赤褐	暗赤褐	1mm以下の黒褐色・茶褐色の砂粒を含む	
24	縄文土器	浅鉢	口縁	20号住居				ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	褐灰	光る微粒子を含む	ヒレ又は リボン状 の突起
25	縄文土器	浅鉢	口縁	9層				ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄褐 暗灰黄	1mm以下の黒・灰白色の砂粒を含む	穿孔あり
26	縄文土器	浅鉢	口縁	11号住居 18号				ミガキ	ミガキ	明赤褐 黒褐	明赤褐 灰褐	2mm以下の赤褐色・橙色・白色・灰白色の砂粒を含む	ヒレ又は リボン状 の突起
27	縄文土器	浅鉢	口縁	10・11層 12・13層				ミガキ	ミガキ	明赤褐 にぶい橙	にぶい赤褐 褐灰	1mm以下の黒褐・淡橙・褐色及び透明・黒色光沢の砂粒を含む	ヒレ又は リボン状 の突起
28	縄文土器	浅鉢	口縁付近	12・13層				ミガキ・凹線	ミガキ	にぶい赤褐 褐灰	にぶい褐 黄灰	1.5mm以下の灰褐・淡黄・褐色の砂粒及び透明光沢の砂粒を含む	
29	縄文土器	深鉢	底部	23号住居	(8.3)			ミガキ	ナデ・ハケ目?	灰黄褐 褐灰	灰黄褐	3mm以下の灰白・灰褐・褐色及び透明光沢の砂粒を含む	
30	縄文土器	浅鉢	口縁	10号住居				ミガキ	ミガキ	にぶい褐 黒	にぶい橙 褐	2mm以下の灰色・無色透明の砂粒を含む	
31	縄文土器	浅鉢	口縁	13層				ミガキ	ミガキ	暗赤褐	にぶい黄褐 褐	0.5mm以下の黒色及び黒色光沢の砂粒を含む	
32	縄文土器	浅鉢	肩部	18号住居 20号住居				ミガキ	ミガキ	にぶい褐 にぶい黄橙	褐灰 暗灰黄	1mm以下の黄橙・黒色の砂粒を含む	
33	縄文土器	浅鉢	口縁	10・11層				ミガキ	ミガキ	橙	明赤褐	微細な乳白・黄灰・黒色及び透明・半透明・黒色光沢の砂粒を含む	
34	縄文土器	注口土器	注口部付近	4層				ミガキ	ナデ (風化著しい)	灰黄	浅黄	3mm以下灰白・灰黄・灰白及び黒色・透明光沢の砂粒を含む	
35	縄文土器	浅鉢	頸部~胴部	12・13層				ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐 黄褐	暗灰黄 にぶい黄褐	1mm以下の淡黄橙・灰白・褐色及び黒色光沢の砂粒を含む	
36	縄文土器	深鉢	口縁	12・13層				条痕・突帯	条痕	褐灰	にぶい黄褐	3mm以下のにぶい褐・灰黄・灰白・橙・透明光沢・黒色光沢の砂粒を含む	
37	縄文土器	深鉢	口縁	12・13層				粗い条痕・突帯	粗い条痕	にぶい橙	黒	1mm以下の白・褐色及び透明光沢・黒色光沢の砂粒を含む	
38	縄文土器	深鉢	口縁	12・13層				条痕・突帯	条痕	にぶい黄橙 灰黄	にぶい黄橙 灰黄	1mm以下の灰黄褐・黒・にぶい黄橙及び2.5mm以下の黒色光沢の砂粒を含む	
39	縄文土器	深鉢	口縁	12・13層				ナデ・突帯	条痕	にぶい黄褐	黄褐	1mmの灰黄・灰白及び1mm以下の黄・灰黄・橙・透明光沢・黒色光沢の砂粒を含む	
40	縄文土器	深鉢?	胴部	12・13層				組織痕	ミガキ	灰黄	黒褐 にぶい褐	5mm以下の灰白色及び1mm以下の無色透明に光る砂粒及び柱状に黒く光る砂粒を含む	
41	縄文土器	深鉢	口縁	18号住居				ナデ・突帯	条痕・ナデ	灰黄褐 黒褐	黒	2mm以下の灰白・黒・灰黄色及び黒色光沢の砂粒を含む	
42	縄文土器	深鉢	口縁	6号住居 10・11層				ナデ・突帯	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	3mmの灰白色及び1mm以下の黒・赤褐・黒褐色・透明光沢・金色光沢の砂粒を含む	突帯の核 部あり
43	縄文土器		胴部	12・13層				組織痕	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	1mm以下の柱状に黒く光る砂粒及び無色透明に光る砂粒を含む	

石鏃

44～66・69・70はここでは石鏃として扱い、分類にあたって対象とする要素を平面形態、大きさ、基部の形状とする。

平面形態では縦長の二等辺三角形形状のものをⅠ類、正三角形に近いものをⅡ類、五角形状のものをⅢ類とする。大きさでは全長3cm以上をL類、全長2cm以上3cm未満をM類、全長1cm以上2cm未満をS類とする。基部の形状では抉りが深いものをa類、抉りが浅いものをb類、窪む程度のものをc類、平坦なものをd類とする。以上の3要素を組み合わせると36種に分類できるが、実際の遺物が当てはまったのは17種である。対象としたのは本遺跡から出土した打製石鏃の内、形状が把握できる66点で内容は以下の表のとおりである。

分類	遺物番号	未掲載	石 材				合計	備 考
			チャート	流紋岩	黒曜石	姫島産		
I L a		2	2				2	
I L d	63, 65	3	3	2			5	
I M a	44, 46, 47, 50	11	13	1	1		15	
I M b	46	5	4	2			6	
I M c		2		2			2	
I M d	64, 66	2	2	2			4	
I S a	48, 62	2	3		1		4	
I S c	49	4	3	1	1		5	
I S d		1		1			1	
Ⅱ M b		1	1				1	
Ⅱ M d	69	1	2				2	
Ⅱ S a	51, 52, 53	1	4				4	
Ⅱ S b	55, 56, 57	2	4	1			5	
Ⅱ S c	54, 70	2	2	1	1		4	
Ⅱ S d		1		1			1	
Ⅲ L a		1	3	1			1	
Ⅲ M a	58, 59, 60, 61	0					4	

平面形態の傾向としてはⅠ類が67%、Ⅱ類が26%、Ⅲ類が7%を占め、Ⅰ類が圧倒的に多い。大きさの傾向ではL類が12%、M類が58%、S類が30%で、M類が多い。抉りの傾向ではa類が46%、b類が18%、c類が16%、d類が20%とa類が群を抜いている。各要素ごとの状況を反映して最も多いのはI M a類で全体の22%を占める。また、平面形態と大きさの関係としてⅠ類の中では大きさがM類のものが61%、Ⅱ類の中では大きさがS類のものが82%である。石材ではチャート製が約7割を占めるが、抉りの分類がd類のものには流紋岩製のものが多い。

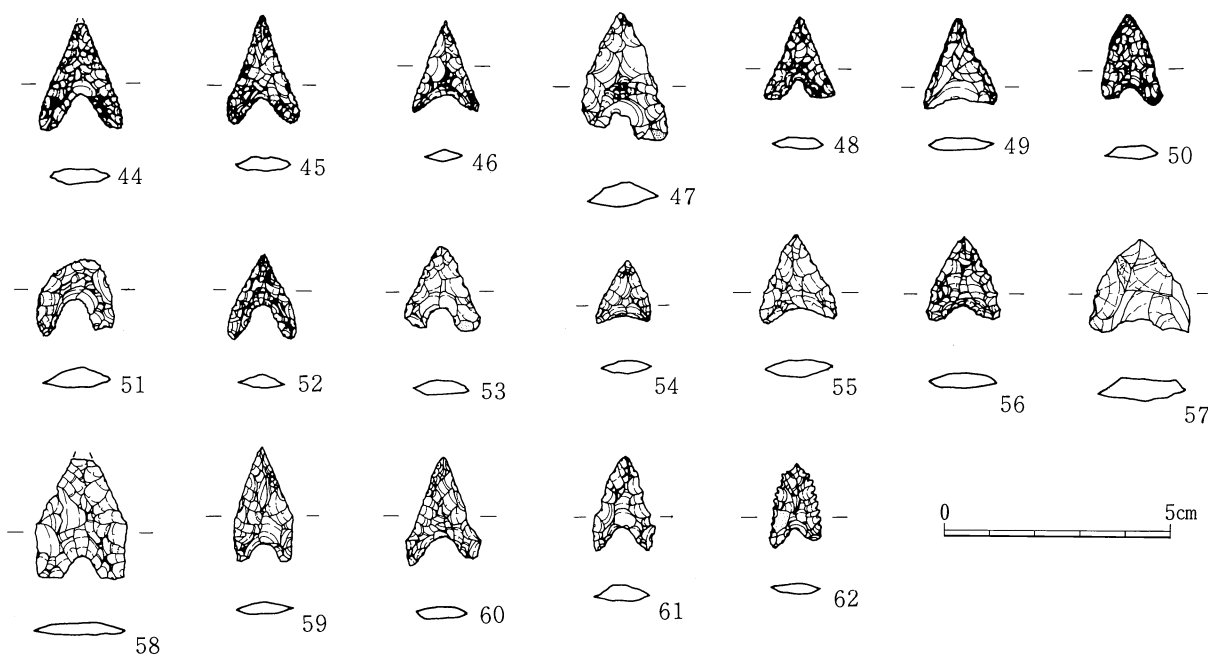
その他の石器

67は縦長の石匙とみられる。68は尖頭状石器である。71は全ての側面に加工が施されたもので用途は不明である。72は横長の石匙とみられるが、両側が欠損している。73は図の下の部分が未調整

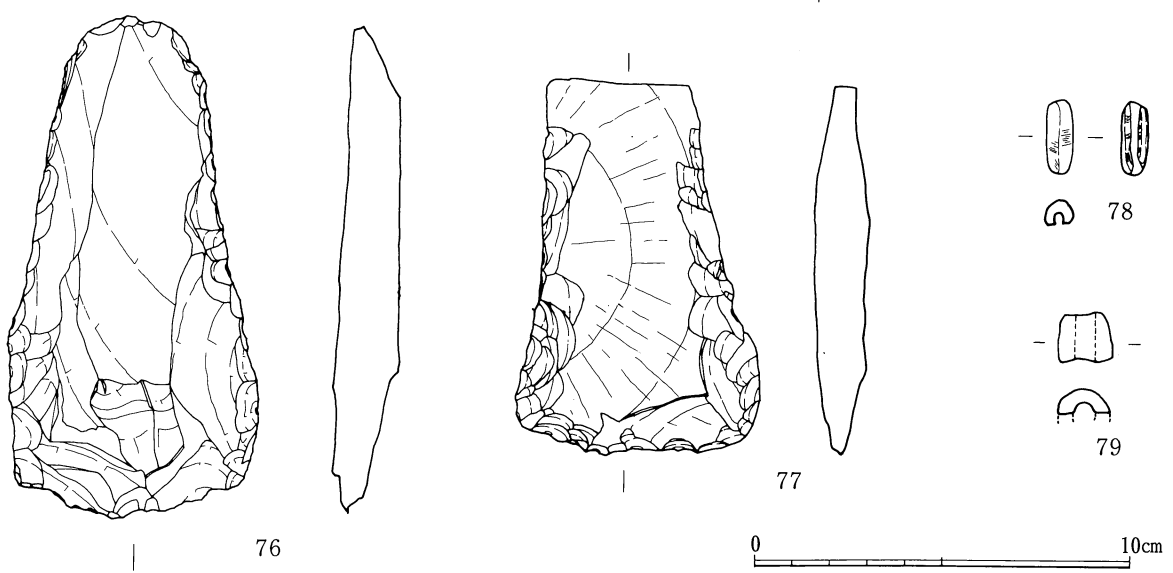
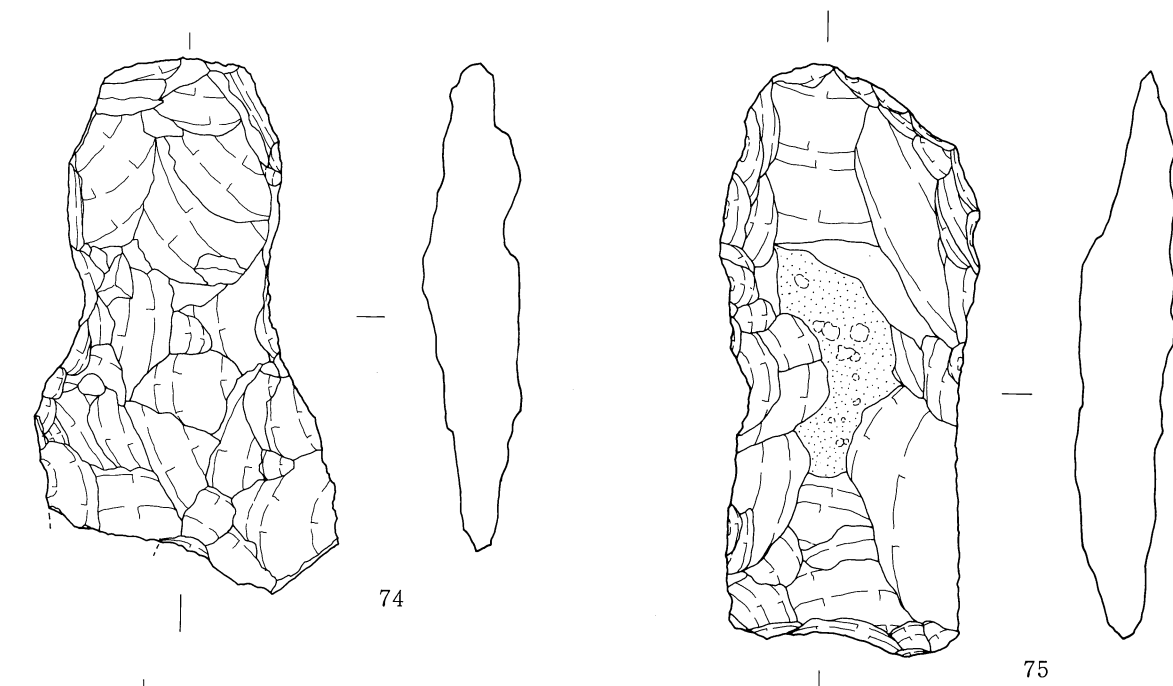
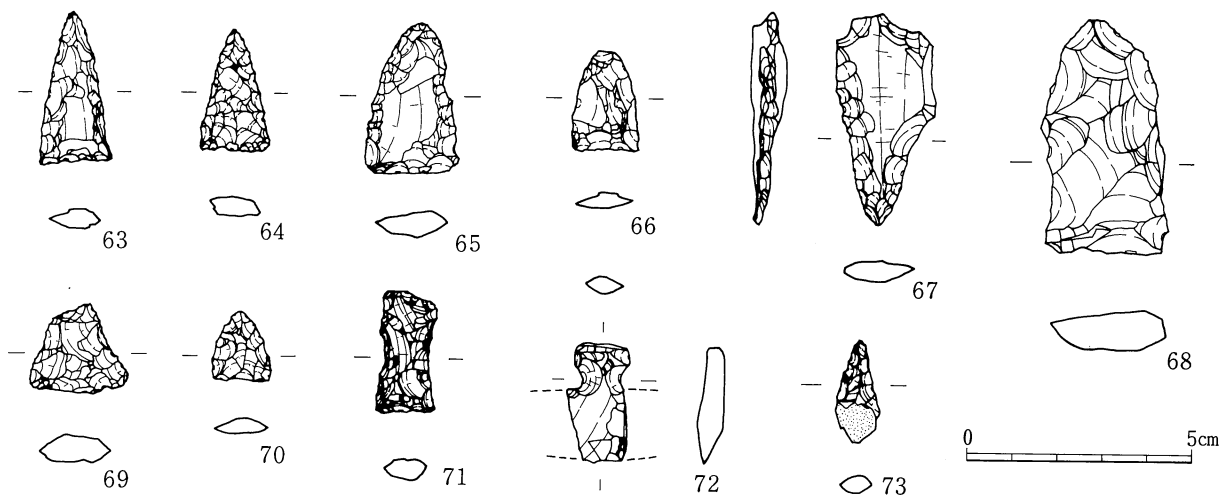
であることから石錐の可能性が高い。74～77は石斧である。74は刃部が二股にわかれるものである。78・79は管玉である。

第2表 石器観察表

遺物番号	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
44	22号住居	石 鏃	(2.4)	1.9	0.3	1.0	チャート	
45	10、11層	石 鏃	2.4	1.6	0.3	0.7	チャート	
46	18号住居	石 鏃	2.0	1.5	0.2	0.5	チャート	
47	23号住居	石 鏃	2.8	1.9	0.5	2.1	チャート	
48	12、13層	石 鏃	1.9	1.6	0.3	0.5	チャート	
49	4 層	石 鏃	2.1	1.7	0.3	0.6	流紋岩	
50	11号住居	石 鏃	2.1	1.4	0.3	0.6	黒曜石	
51	18号住居	石 鏃	(1.7)	1.8	0.4	0.9	チャート	
52	25号住居	石 鏃	1.9	1.5	0.3	0.7	チャート	
53	7号住居	石 鏃	1.9	1.7	0.3	0.8	砂岩	
54	12、13層	石 鏃	1.4	1.2	0.3	0.4	チャート	
55	12、13層	石 鏃	2.0	1.8	0.4	1.0	流紋岩	
56	17号住居	石 鏃	1.9	1.7	0.3	0.9	チャート	
57	10 層	石 鏃	2.0	2.3	0.5	1.8	砂岩	
58	4 層	石 鏃	(2.7)	2.0	0.3	1.3	チャート	
59	25号住居	石 鏃	2.5	1.4	0.3	0.8	チャート	
60	10、11層	石 鏃	2.4	1.7	0.3	0.8	チャート	
61	18号住居	石 鏃	2.1	1.4	0.4	0.7	黒曜石(姫島)	
62	23号住居	石 鏃	1.8	1.2	0.2	0.5	黒曜石	
63	9 層	尖頭状石器	3.4	1.6	0.5	2.2	砂岩	
64	20号住居	尖頭状石器	2.7	1.6	0.5	1.9	チャート	
65	18号住居	尖頭状石器	3.4	2.1	0.6	4.6	チャート	
66	6号住居	石 鏃	(2.3)	1.5	0.4	1.4	流紋岩	
67	12、13層	石 匙	4.7	2.2	0.5	6.9	シルト岩	
68	12、13層	尖頭状石器	5.2	2.8	0.9	15.3	ホルンフェルス	
69	2号住居	尖頭状石器	2.0	2.2	0.7	3.1	チャート	白色の二次鉍微粒
70	4 層	石 鏃	1.6	1.3	0.3	0.7	チャート	
71	4 層	スクレイパー?	2.8	1.3	0.5	1.8	黒曜石	
72	9 層	石匙か	2.7	1.4	0.5	2.4	チャート	
73	8号住居	石錐か	2.3	1.0	0.4	0.8	チャート	
74	21号住居	石 斧	14.3	8.3	2.7	284.7	凝灰岩	
75	15号住居	石 斧	15.8	6.9	2.7	312.8	凝灰岩	
76		石 斧	13.4	6.8	1.8	183.0	流紋岩	
77	10、11層	石 斧	10.0	6.5	1.5	102.0	流紋岩	
78	9 層	管 玉	2.0	0.8	0.7	1.2	滑 石	
79		管 玉	1.4	1.5	0.7	1.7	蛇文岩	



第6図 石器実測図 (1)



第7图 石器实测图(2)

第5節 弥生時代の遺構と遺物

1 遺 構

1号住居址（第8図）

調査区の西端に位置し、6号住居によって切られていた可能性がある。16層上面で検出したが調査以前まで行われていた水田耕作などの影響でかなり削平を受けており、東から南側にかけては検出時点で既に失われていた。残存部分から、おそらく1辺4mほどの不整形な方形プランで支柱穴は4本（1本は不明）であったとみられる。

遺物（第8図）

出土した遺物は少なく、ほとんどが細片であった。

80は粗製甕の口縁部で口唇部に凹線状のくぼみがみられる。81は壺の口縁部、83は壺の頸部である。82は粗製甕の胴部とみられ、外面にハケ状の工具によって横方向の沈線とそれに垂下する重弧文風の施文がみられる。

2号住居址（第9図）

調査区の西端、1号住居址の北側に位置し、7号住居址により切られる。15層上面で検出したが1号同様に削平を受けており、東側の壁面が失われていた。残存部分の状況から1辺4mほどの方形プランで支柱穴は4本であったとみられる。また、支柱穴とみられる東南の柱穴の東側に長軸50cm、短軸40cmほどの焼土が、床面近くで検出された。

遺物（第9図）

出土遺物は少なく、1号と同様に細片である。84は甕の口縁部で内側に張り出す。85は壺の胴部で刻目突帯をもつ。86は甕の脚台部で内面には成形時に付着したとみられる砂粒がみられる。87は若干鋏先状を成し斜め上方に延びる壺の口縁部で、内面に直径8mmほどの薄い円形浮文がみられる。

3号住居址（第10図）

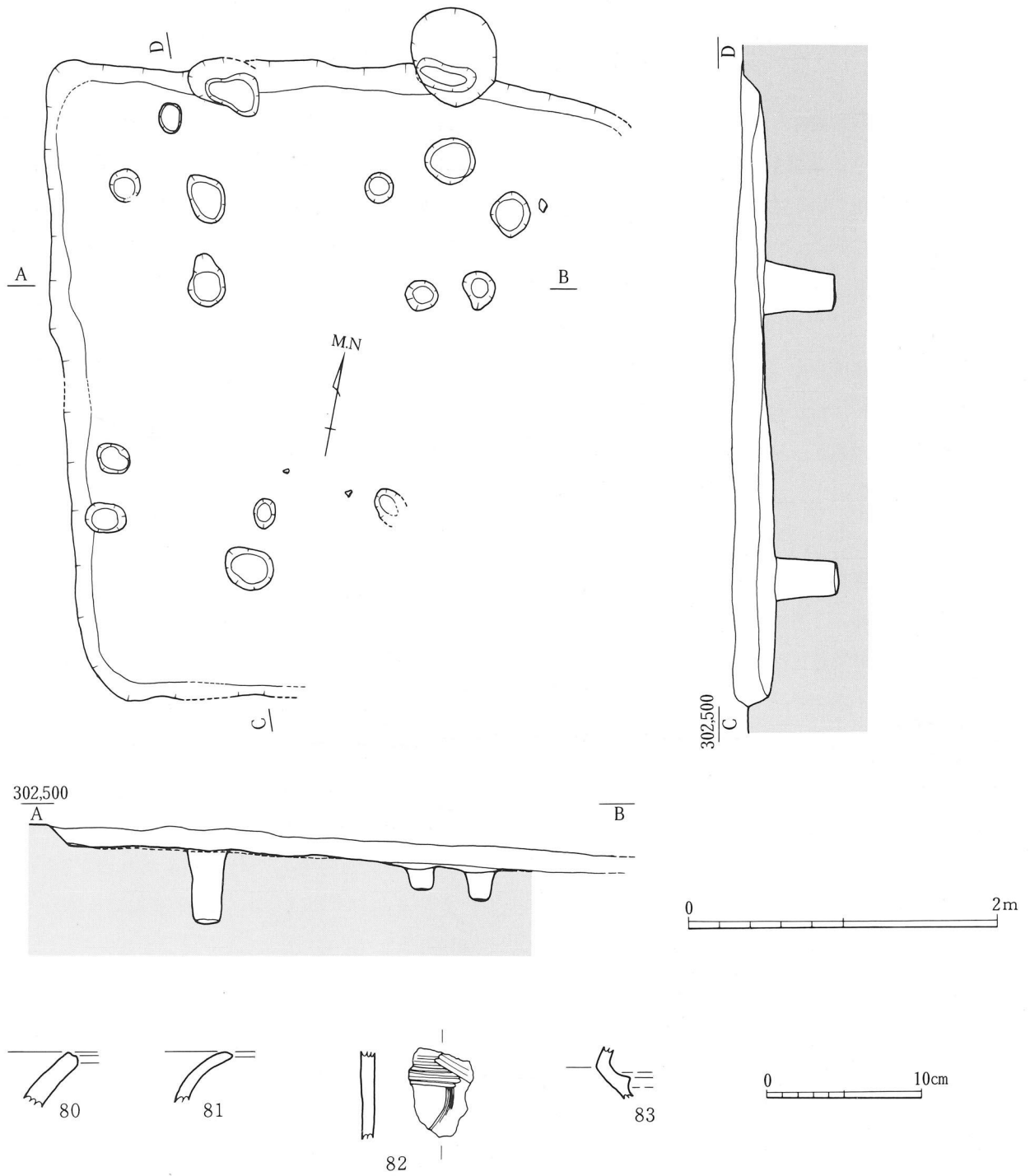
6号住居の東に位置し、5号を切り、4号に切られる。15層上面で検出したが削平の影響で平面プランの規模等は不明で支柱穴も判然としない。遺構の残存状況から方形プラン、2本支柱であった可能性も考えられる。また、北側の柱穴の東側で床よりも若干浮いた状態で厚さ1～3cmの焼土がみられた。

遺物（第11図 88～98）

遺物はさほど多くはないが、遺構の切り合いが多いため他の住居址出土遺物と接合しているものもみられる。88はくの字形に屈曲する甕の口縁部で、内面には明瞭な稜がみられる。89はくの字形に屈曲し、内面が下方に張り出す甕の口縁部である。この土器は接合状況から5号に伴う可能性がある。

90は外傾し直線的な体部を持つ甕で、口縁部下に2条の刻目突帯を有する。91はL字状を呈する甕の口縁部で、1条の三角突帯がみられる。92は壺の口縁部である。93は壺の肩部で1条の三角突帯がみられる。94は壺の胴部で最大径となる部分に細い刻目突帯を有する。95は外面に縦方向のミガキが施され、内面に絞り痕跡などが明瞭に残ることから脚部とみられるが、上部の器形は不明である。

96は若干丸みを帯びた平底の壺の底部である。97は磨製石鏃、98は石包丁である。



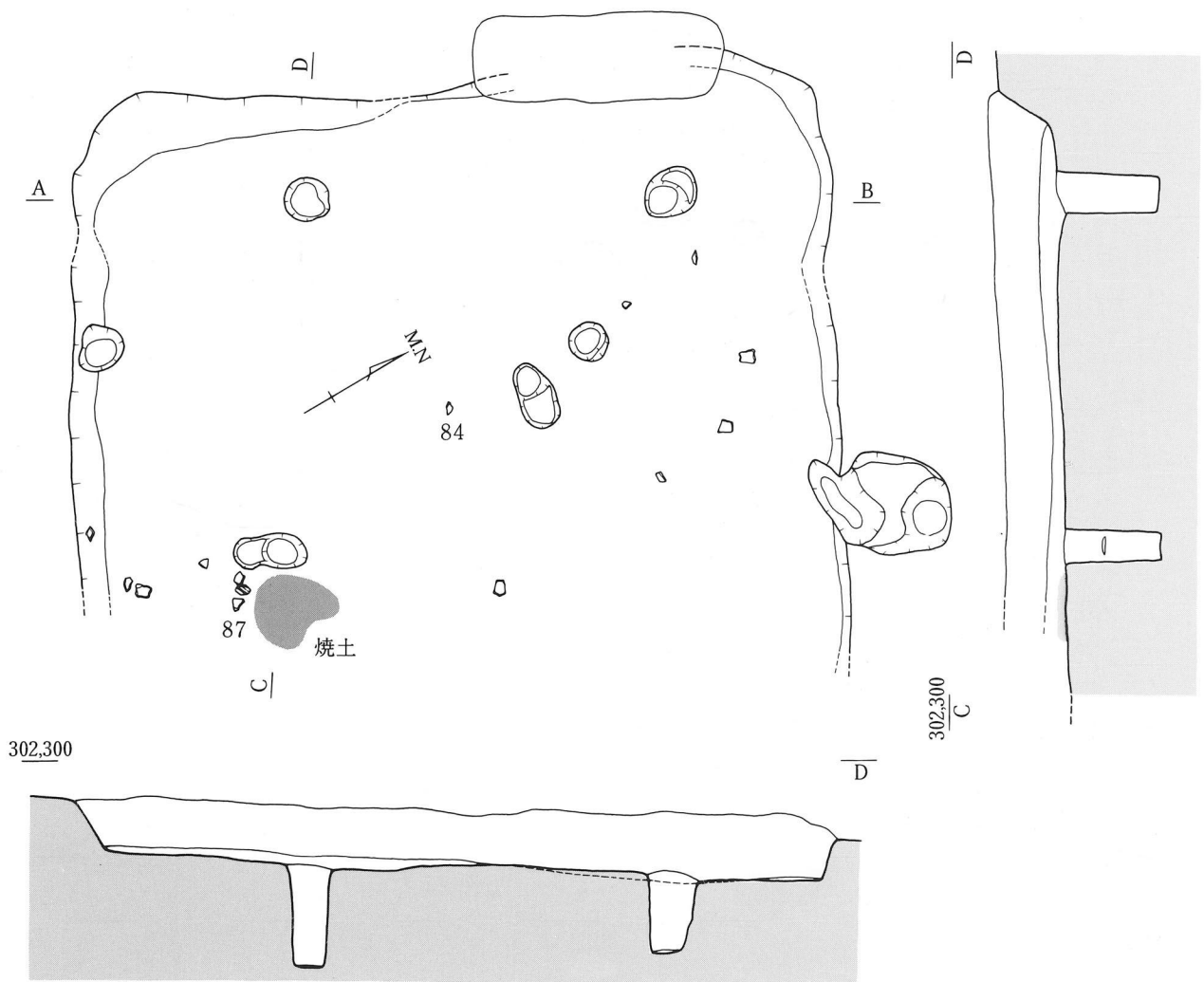
第8図 1号住居および出土遺物実測図

5号住居址 (第10図)

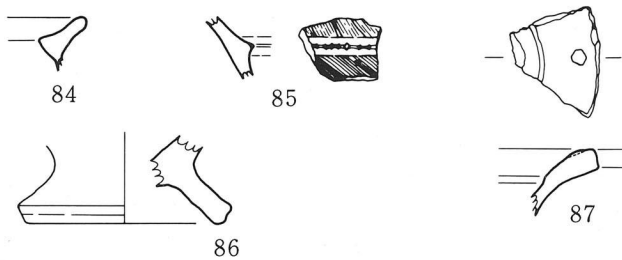
6号住居の北東に位置し、3号・7号により切られる。15層上面で検出したが3号同様削平の影響で平面プランの規模や主柱穴は不明である。遺構の残存状況から方形プラン、2本主柱であった可能性も考えられる。

遺物 (第11図 99~102)

出土遺物は少ない。99は外傾しながら直線的に立上がる甕の口縁部で2条の刻目突帯を有する。



0 2m



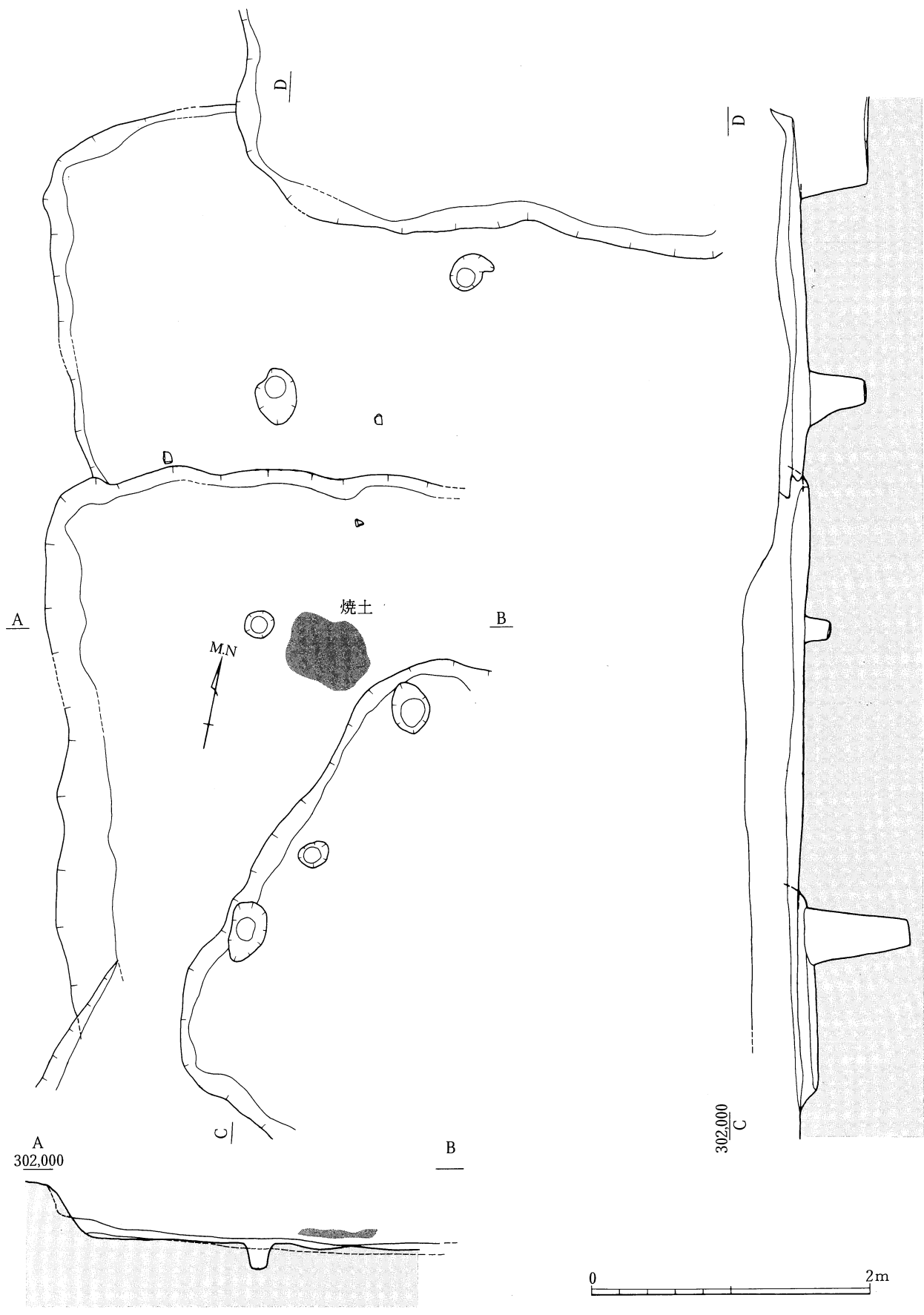
0 10cm

第9図 2号住居および出土遺物実測図

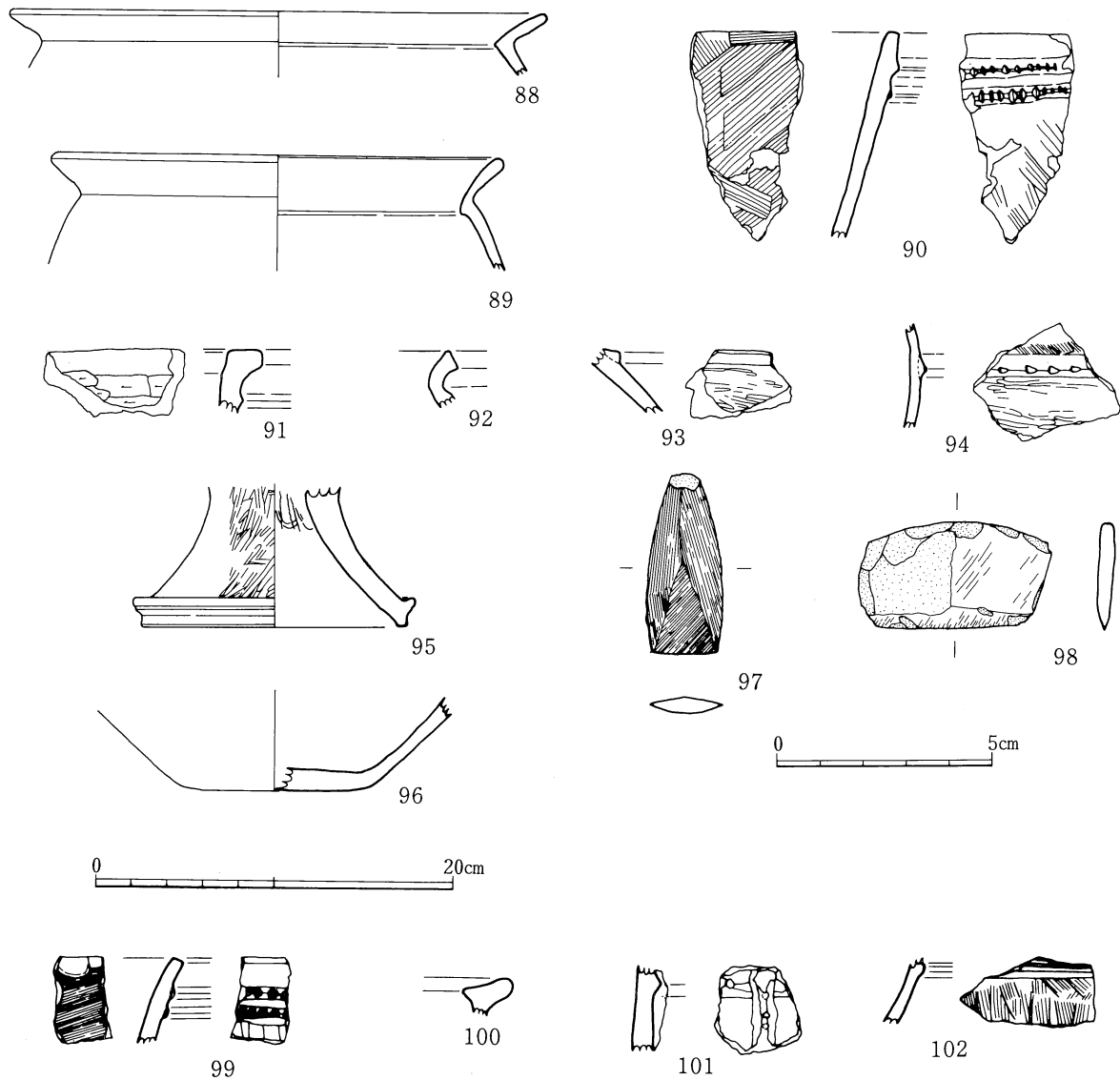
90と類似するが、やや外反気味である。100は甕の口縁部で内側に張り出す。101は粗製甕の胴部で縦横に太い刻目突帯を有する。102は扁平で細い台形状の突帯を有する壺の胴部である。

4号住居址 (第12図)

8号住居の南西に位置し、3号住居を切る。15層上面で検出され、1辺3.5mほどのややいびつな方形プランを呈する。主柱穴は4本とみられ、南西の主柱穴東側に長軸70cm・短軸40cm・厚さ10cmほどの焼土が床面よりやや浮いた状態で検出された。



第10图 3·5号住居实测图



第11図 3・5号住居出土遺物実測図

遺物 (第12図)

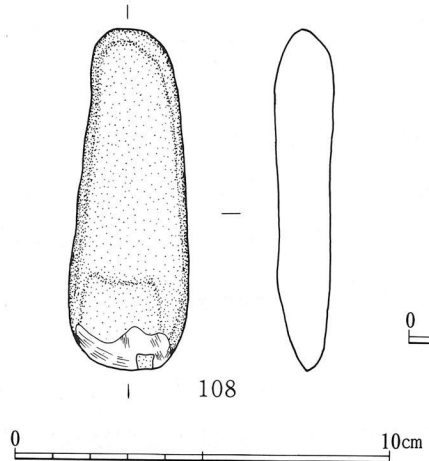
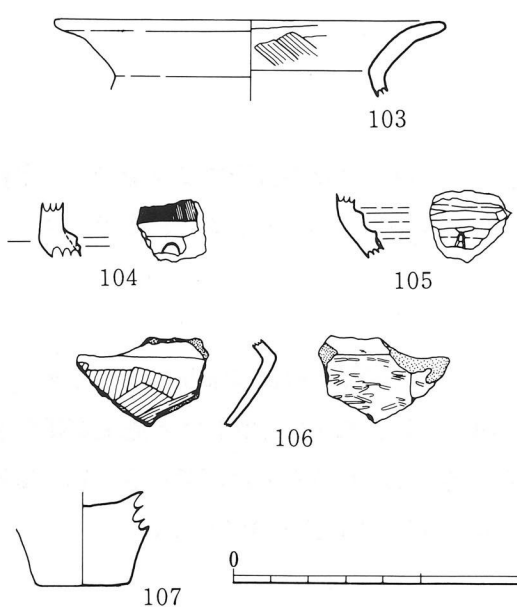
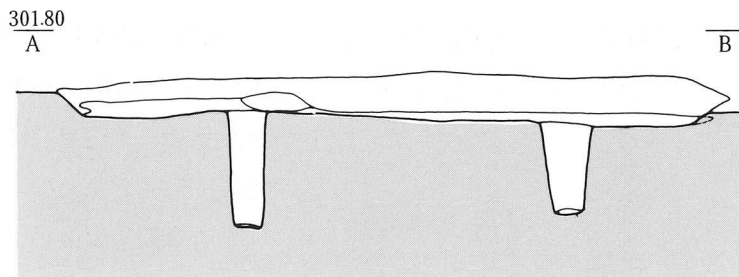
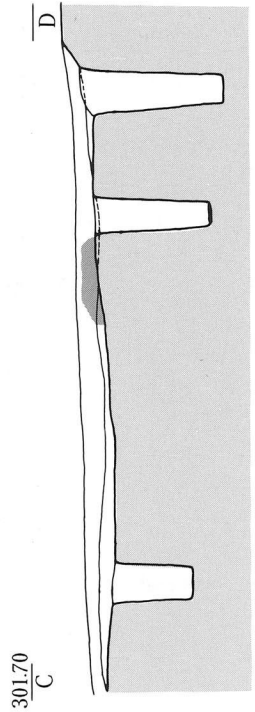
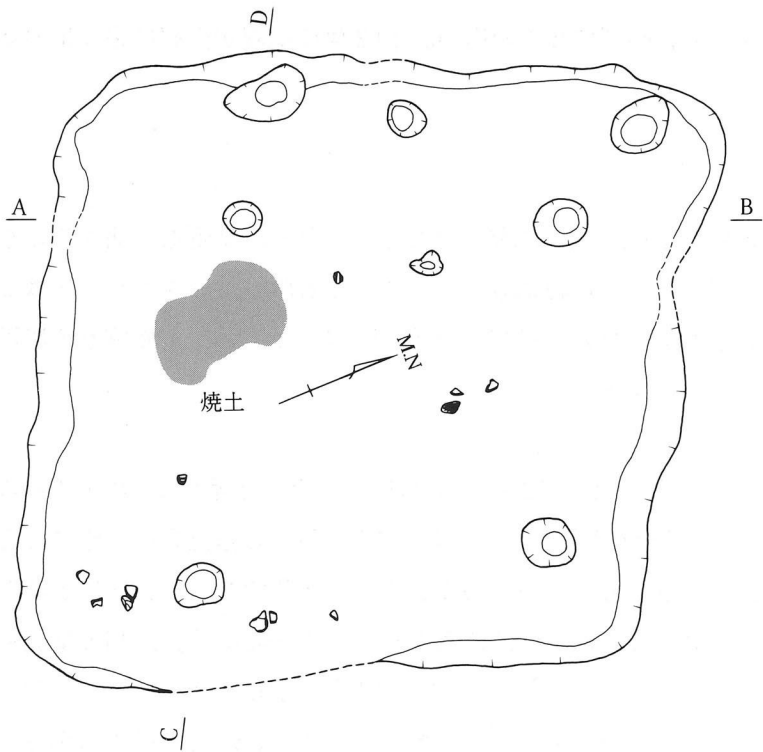
遺物は少ない。103はくの字状に屈曲した壺の口縁部で中程よりやや上位でさらに開く。104・105はともに壺の頸部付近で三角突帯と貼付浮文がみられる。106は長頸壺の胴部で算盤形を呈し、外面は丹塗りである。107は径の小さな平底の底部で恐らく粗製甕のものとみられる。108は刃部付近のみ研磨が施された小型の石斧である。109は磨製石鏃で矢柄との接続部分が明瞭に窪んでいる。

6号住居址 (第13図)

3・5号住居の西側に位置し、1号住居を切っていた可能性が高い。15層上面で検出された1辺2.5mの方形を基調とした小型の住居で支柱穴は2本とみられる。ほぼ中央にある柱穴と北東コーナーの間に長軸30cm・短軸20cmほどの焼土面がみられた。また、床には一部硬化した部分が確認された。

遺物 (第13図)

遺物は少ないが、110および113の土器はほぼ床面直上からの出土である。110はやや内湾気味に外傾する胴部から直線的に口縁部へ立上がる甕で、口縁部下に1条の刻目突帯が巡る。111も110と類



第12図 4号住居および出土遺物実測図

似した甕の口縁部であるがやや外傾が強く、突帯の高さが高い。112は口縁部が内側に張り出す甕である。113は甕の底部とみられる。

7号住居址（第14図）

8号住居の西側に位置し、2号・5号を切る。14・15層上面で検出された不整形な平面プランを呈するもので、長辺（西側）約5m・短辺（北東側）約2.3mを計る。住居内で確認された柱穴は4つだが、遺構の平面プランとかなり不整合であるため、主柱穴は不明である。また、南側壁寄りの床面から約15cmほど浮いた位置で焼土が検出されている。

遺物（第15・16図）

遺物は比較的多く、120・122・123・125・126・130・135は床面に近い位置からの出土である。114は短く外反する口縁部下に4条の低い三角突帯を有し、最下位の突帯から垂直方向に伸びる三角突帯を持つ粗製甕である。115も114と同様の甕とみられるが、突帯が3条である。116は甕の口縁部とみられ、1条三角突帯が確認できる。117は甕の口縁部で内側に若干張り出す。118は甕もしくは壺の口縁部である。119・120は甕の脚台部でともに外底に砂粒の付着がみられる。また、120は内面には炭化物の付着が多くみられる。121は粗製甕の底部である。122・125・126はくの字形に屈曲した口縁部が中位から水平方向にさらに外反する壺である。122は口唇部に密な刻目が施されている。123は鋏先状を呈し水平方向に開く壺の口縁部で肥厚した口唇部に刺突列点文、口縁部内面に円形浮文がみられる。124は壺の頸部で口縁部を欠くが、鋏先状を呈し斜め上方に外反しながら開くものとみられる。127・128は刻目突帯をもつ壺の胴部である。129・133は壺の頸部付近で三角突帯が巡る。129には貼付浮文がみられる。130は形態的には127・128と類似するが、突帯に刻目を持たない。131・132は口縁部が内側に張り出す甕である。134は甕もしくは壺の頸部付近で屈曲部に櫛歯状工具による横方向の3条の沈線とその下位に同様の工具によって施された波状文がみられる。135～138は平底の底部である。139は磨石で表面の一部に滑らかな部分がみられる。また、側面の先端部分には赤色の顔料が付着している。140～143は磨製石鏃である。

8号住居址（第17図）

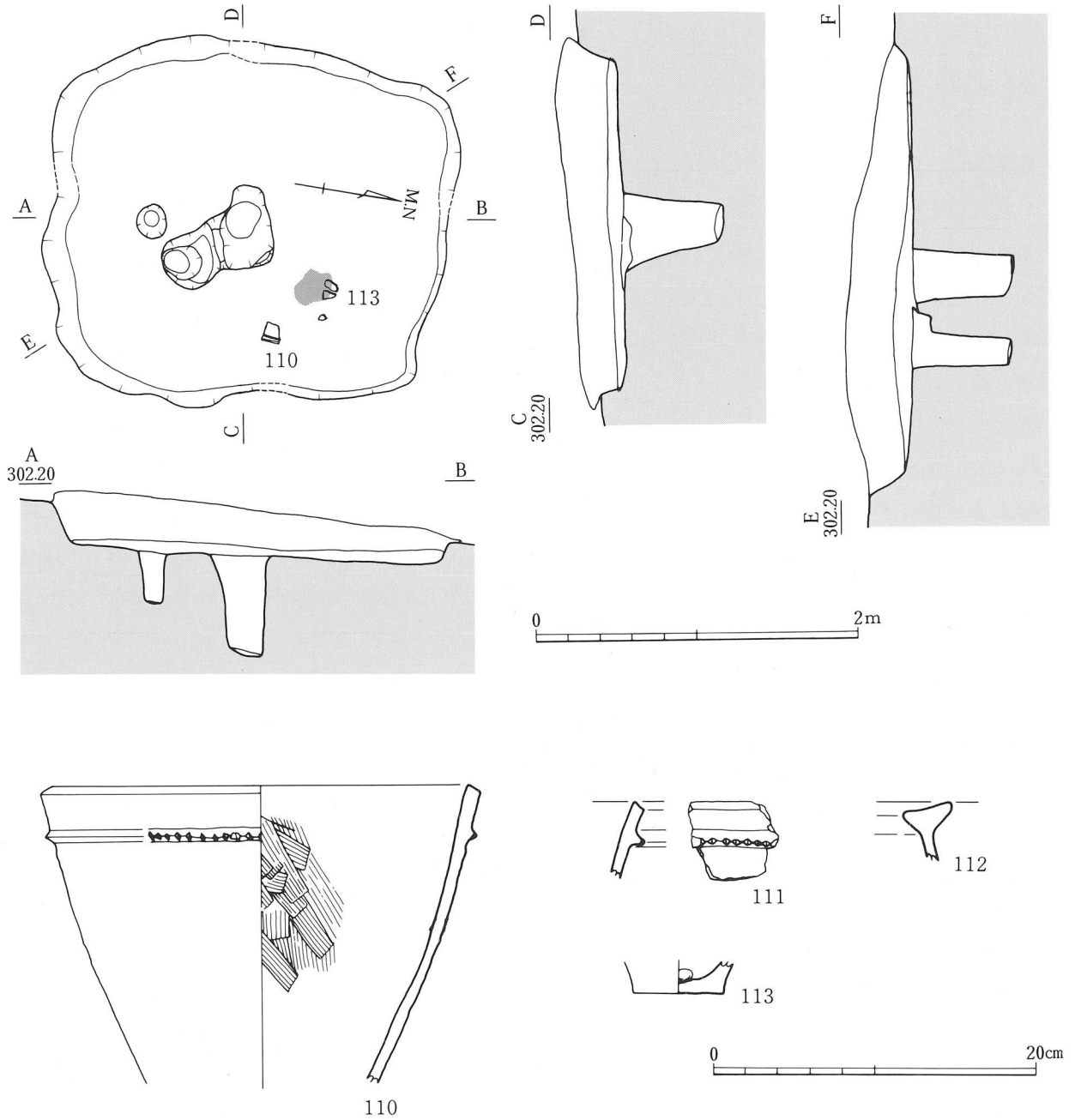
7号の東側に位置し、14層上面で検出された。長軸4.5m・短軸3.9mの方形プランを呈し、主柱穴は2本とみられる。床面の東側壁面の中央寄りには炭化物粒の集中がみられた。また、床面には一部硬化した部分が確認された。

遺物（第17図）

遺物は少ない。147・148は床面付近での出土である。144は口縁部が内面に張り出す甕である。145は器形は不明だがくの字状に屈曲する口縁部である。146は7号住居出土の134と施文が類似する胴部である。147は壺の頸部付近で1条の三角突帯がみられる。148は平底の底部である。149は外面に丁寧なヘラミガキが施された裾部片で高坏の可能性はある。150は磨製石鏃である。

9号住居址（第18図）

10号住居の西側に位置し、12号を切る。14層上面で検出したが、調査区の範囲外にまで及ぶため

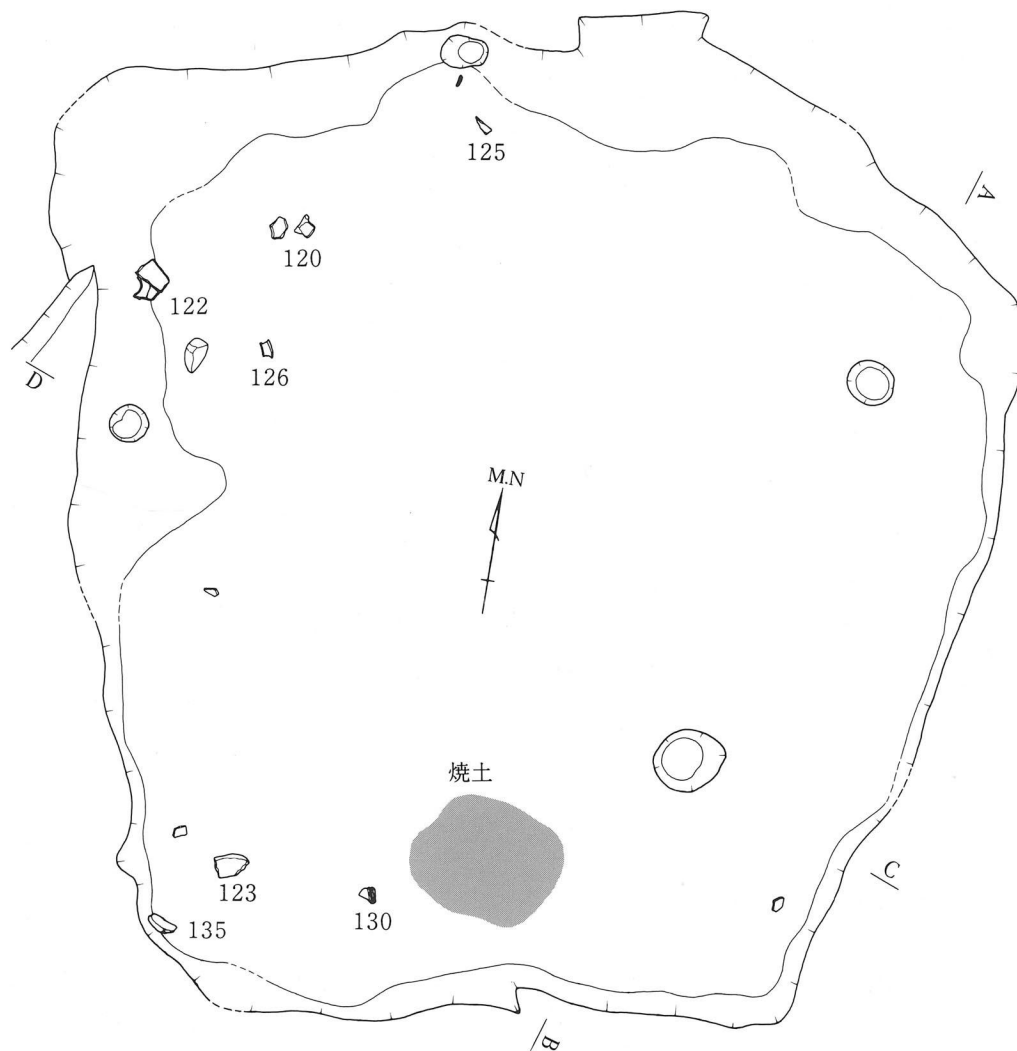


第13図 6号住居および出土遺物実測図

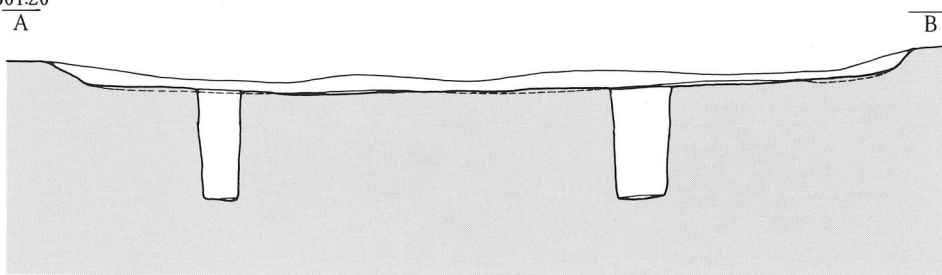
全体像は不明である。確認できた南側の1辺は4.7mを計り、方形基調の平面プランとみられる。また、住居の中央付近には浅い土坑が伴い、これを挟んで支柱穴が存在する可能性がある。

遺物 (第18図)

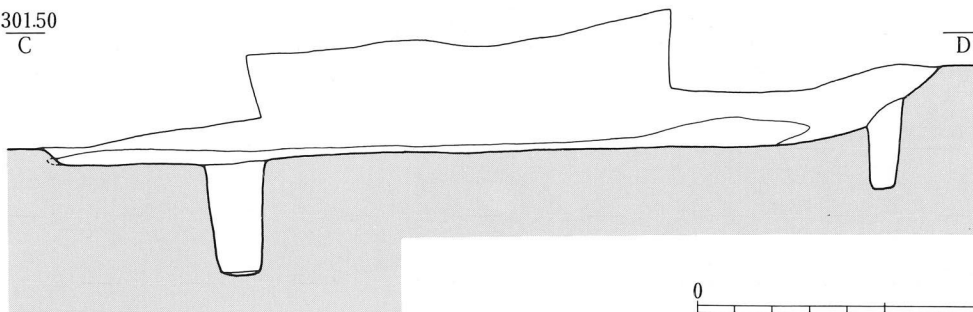
遺物は少ない。151は口縁部が内側に張り出す甕である。152は壺の肩部付近で器壁が非常に薄く、低い突帯を有する。153・154は7号住居出土のそれぞれ124・123に類似する壺である。155は甕の脚台部で脚台内面に砂粒、内面に炭化物の付着がみられる。156は若干レンズ状を呈する壺の底部で、底部外面にハケメがみられる。157・158は磨製石鏃であるが、157は大型で基部に近い中央付近に穿孔がみられる。



301.20
A

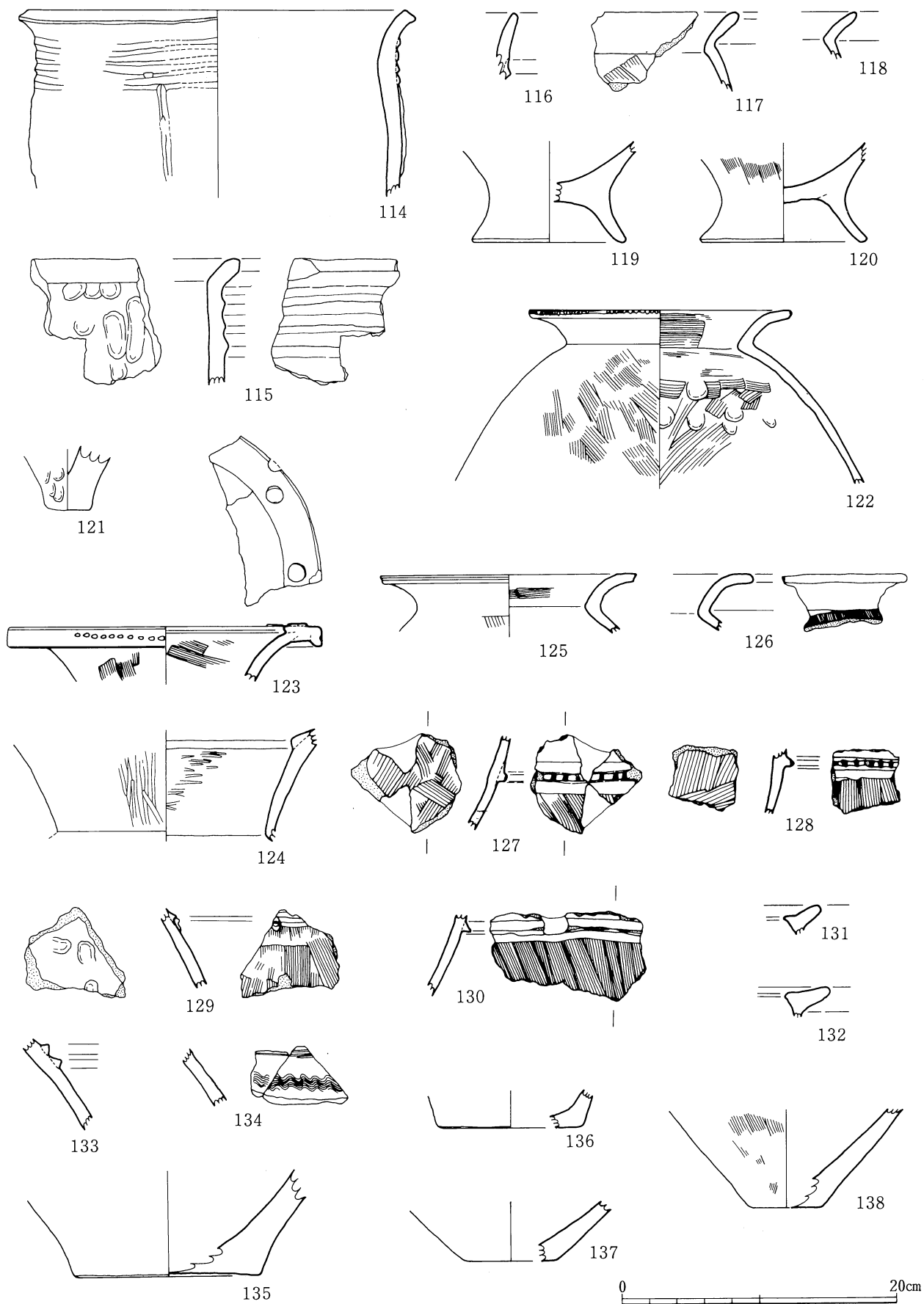


301.50
C

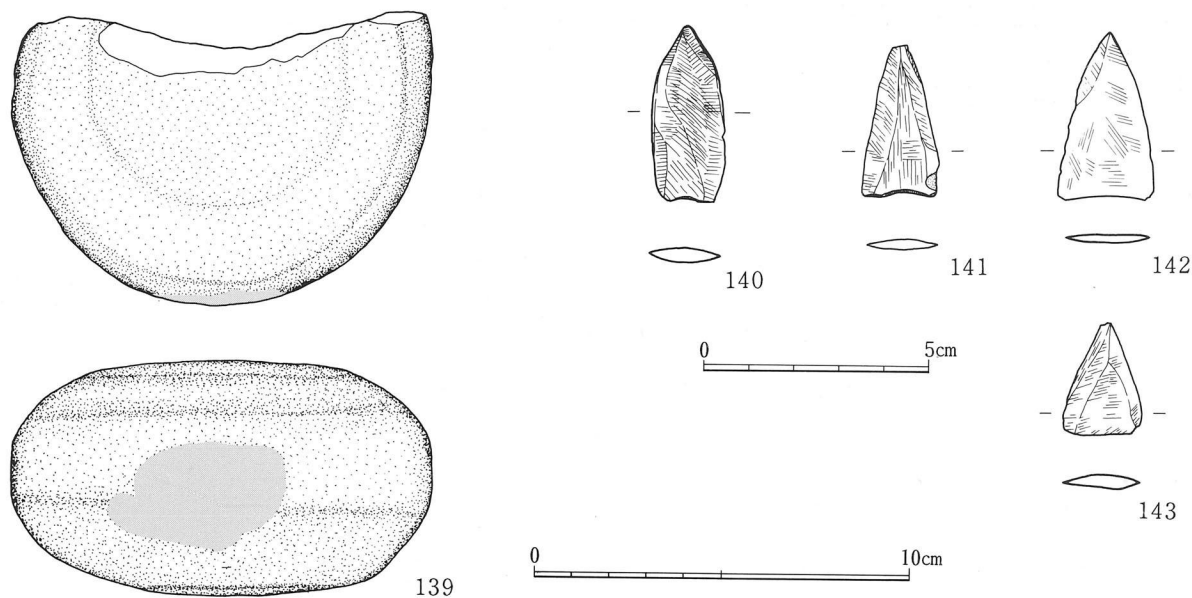


0 2m

第14图 7号住居实测图



第15图 7号住居出土遺物実測図(1)



第16図 7号住居出土遺物実測図(2)

10号住居址(第19図)

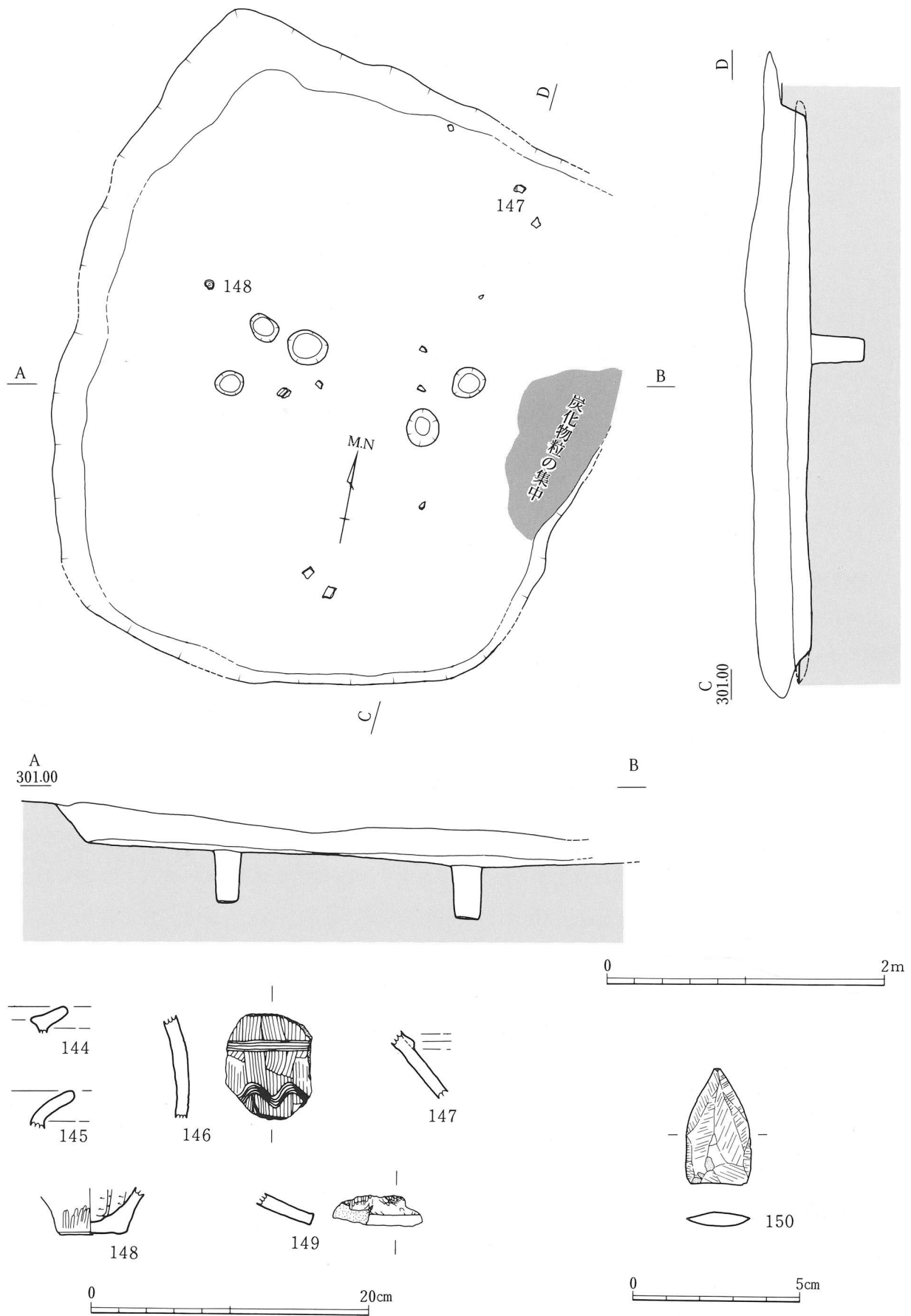
9号住居の東側に位置し、15層上面で検出された。ほとんど削平を受けておらず残存状況も良好で、検出面から床面までの比高差は最深部で1.1mを計る。10号同様調査区の範囲外にまで及ぶため全体像は不明であるが、確認できた南側の1辺は約4.3mを計り、方形基調の平面プランとみられる。主柱穴は長軸方向に直行する2本とみられ、その南側に浅い土坑を検出している。この住居の直下には第2節で取り上げた縄文時代の柱穴状遺構が検出されている。

遺物(第20図)

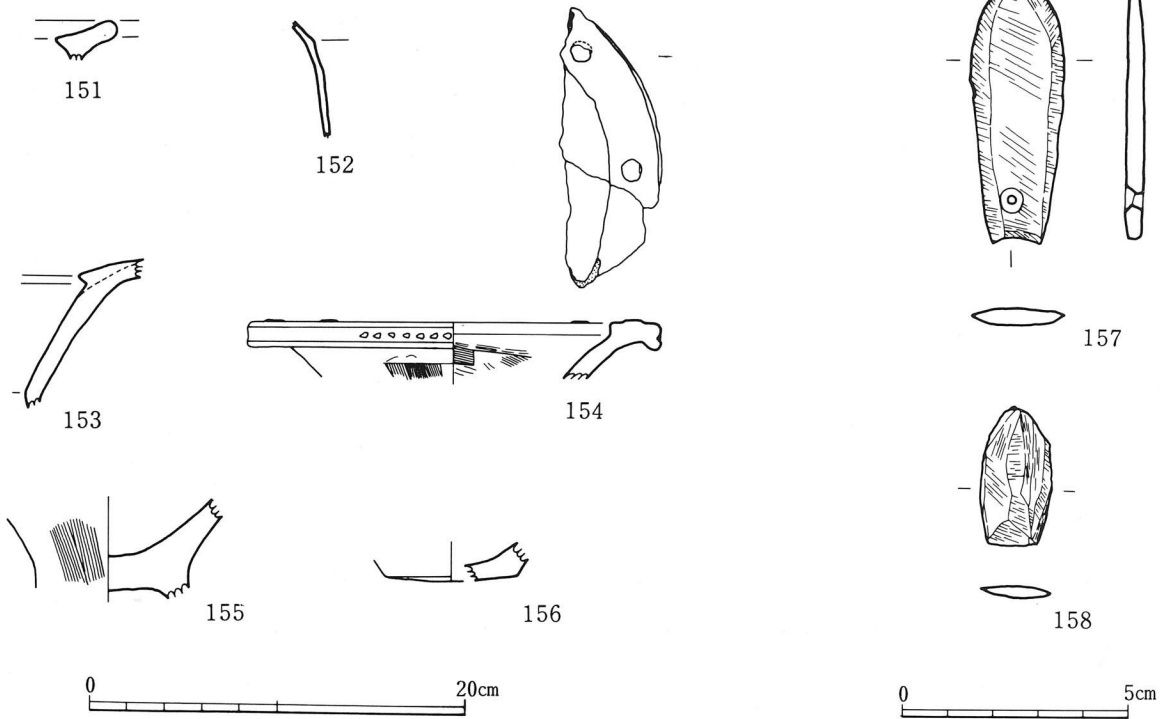
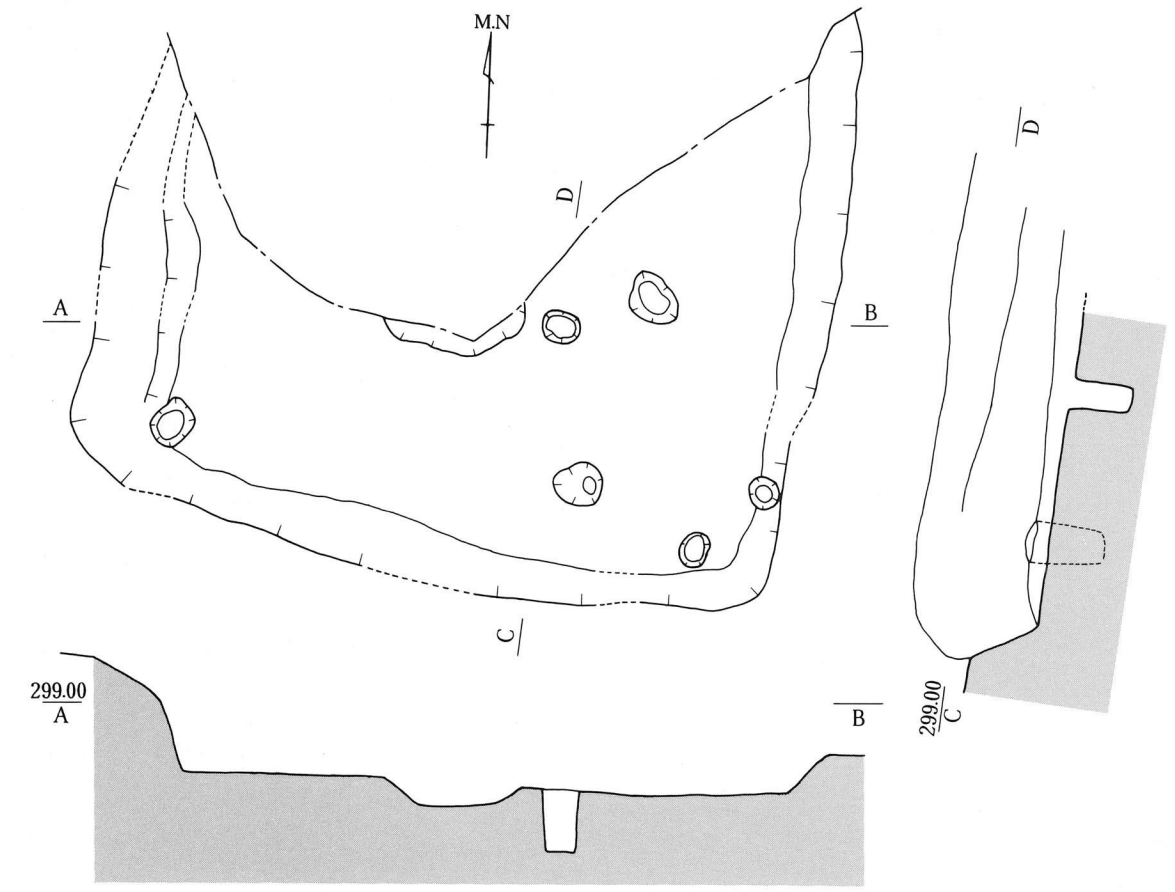
遺物は少ないが、第2節で述べた柱穴状遺構との切り合いのためか床面付近において縄文土器が出土している。159・162～166は床面付近からの出土である。159は内湾する胴部からくの字状に屈曲する口縁部をもつ甕である。この土器は18号住居出土の土器と接合しているが床面付近からの出土であるためここで扱った。160～162は粗製の甕である。160は口縁部下に3条の三角突帯を巡らす。162は1条の刻目突帯の下に垂直方向の突帯を有する。163は甕の胴部で1条の刻目突帯を有する。164は鋏先状を呈する壺で頸部に1条の刻目突帯が巡る。また、口唇部および鋏先状に内側に張り出した部分の先端にも刻目が施されている。165は壺の頸部で屈曲部に貼付浮文がみられる。166は平底を呈する甕の底部とみられる。167は細長い流紋岩を用いた砥石とみられ、3面に擦痕がみられる。167～170は磨製石鏃である。

11号住居址(第21図)

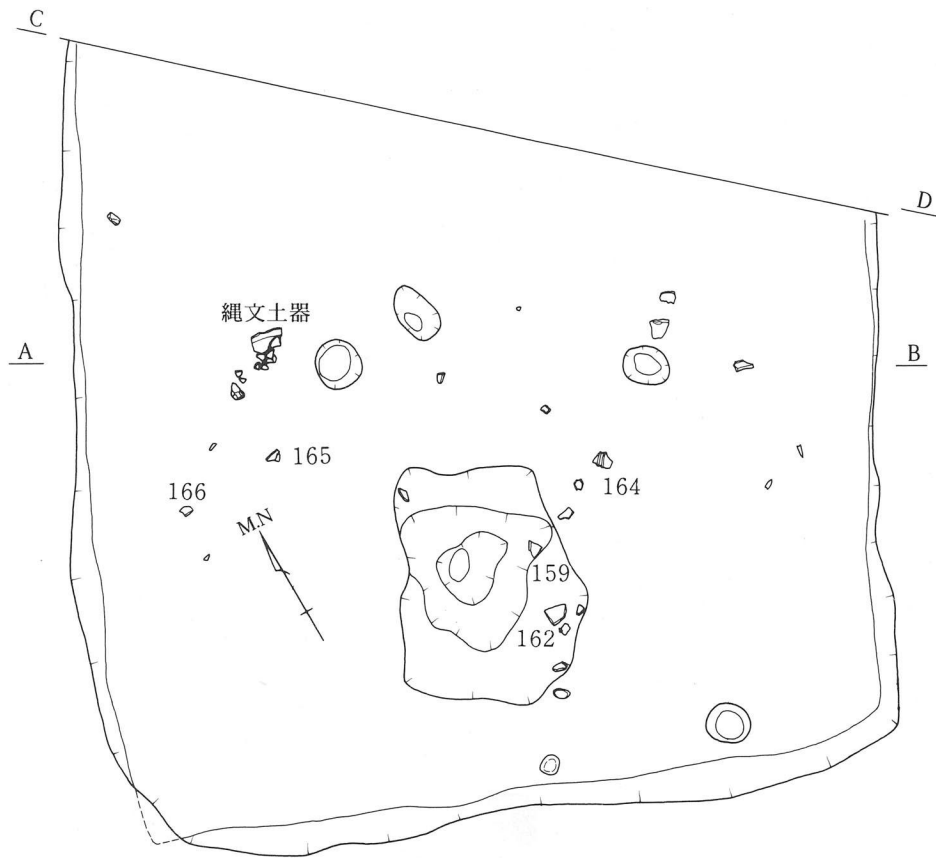
17号住居の西側に位置し15層上面で検出され、12号を切る。1辺4.3mの方形基調の平面プランを呈する。主柱穴は判断に躊躇するが、その深さや平面配置からここでは南北の2本柱を想定した。また、中央部やや東寄りと南壁面付近で焼土塊を検出しているが、南壁面付近のものは13号住居に伴う可能性がある。



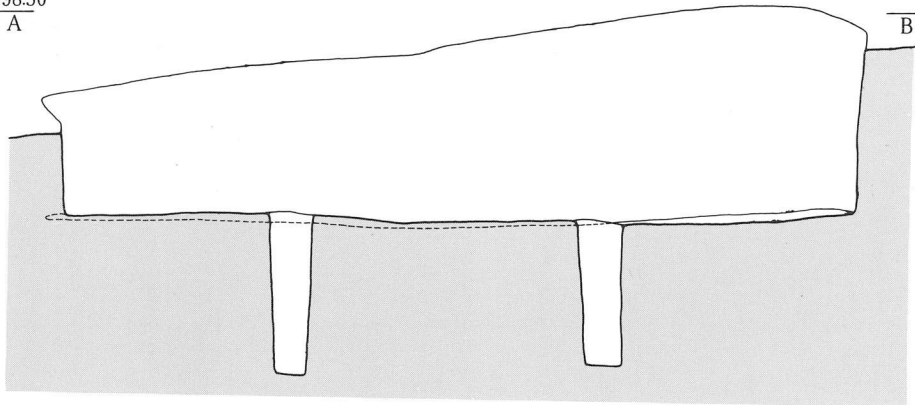
第17図 8号住居および出土遺物実測図



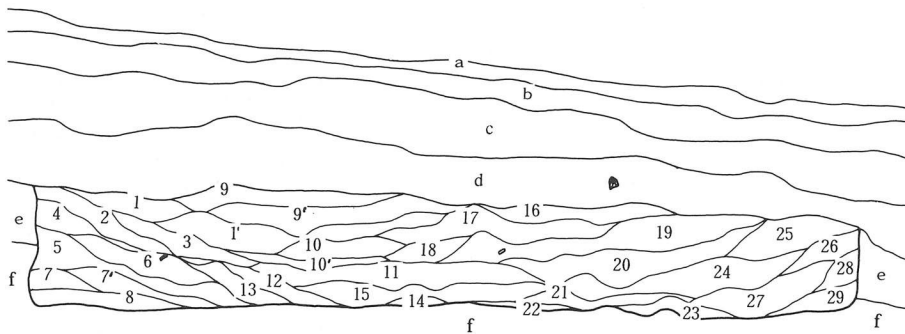
第18図 9号住居および出土遺物実測図



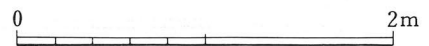
298.50
A



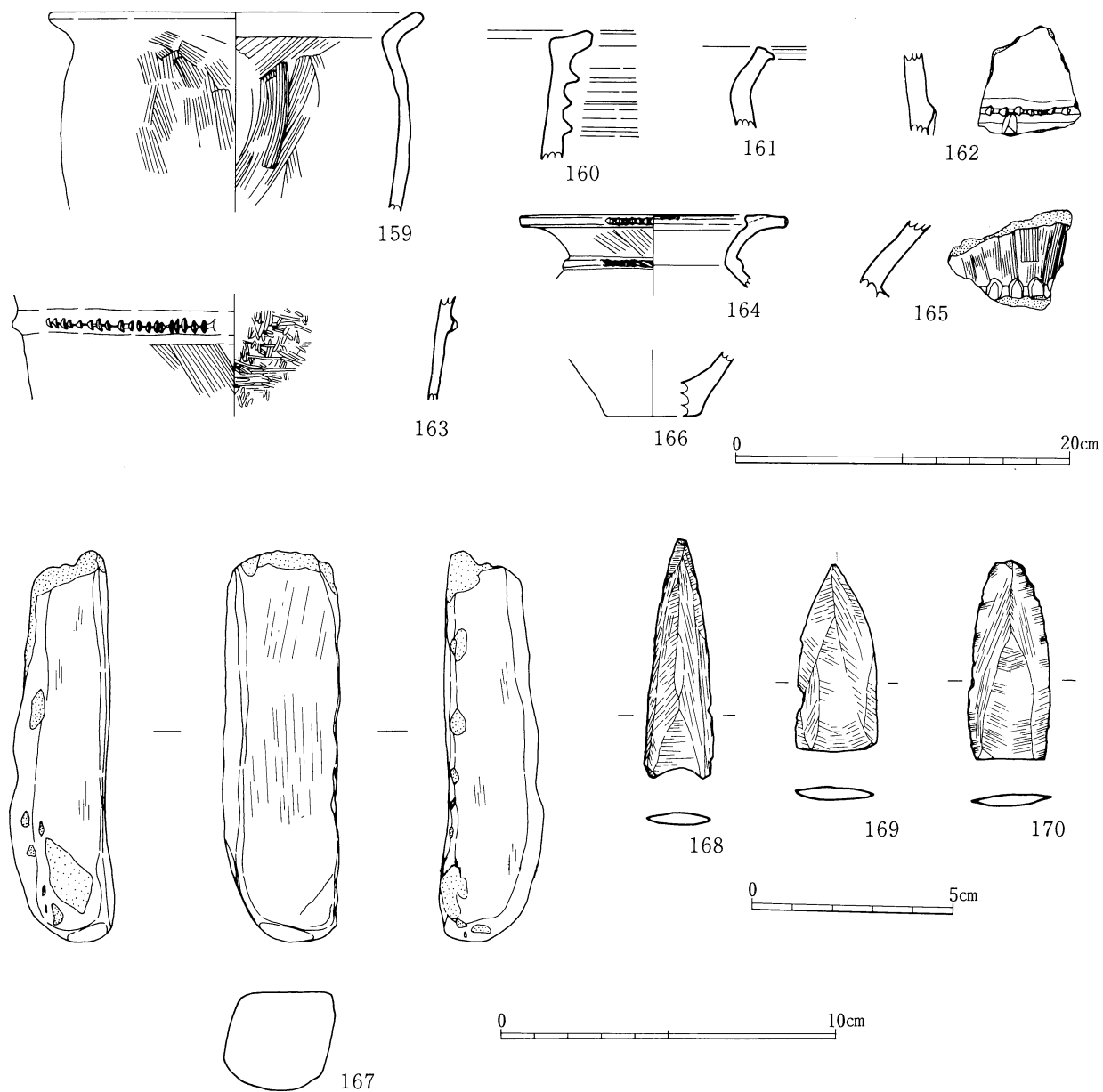
C
299.10



- a 基本土層 10層
 - b 基本土層 11層
 - c 基本土層 12層
 - d 基本土層 13層
 - e 基本土層 15層
 - f 基本土層 16層
- ※1～29層は全て暗褐色土でわずかな色調差や硬さ、混合物等によって分層した。



第19図 10号住居実測図



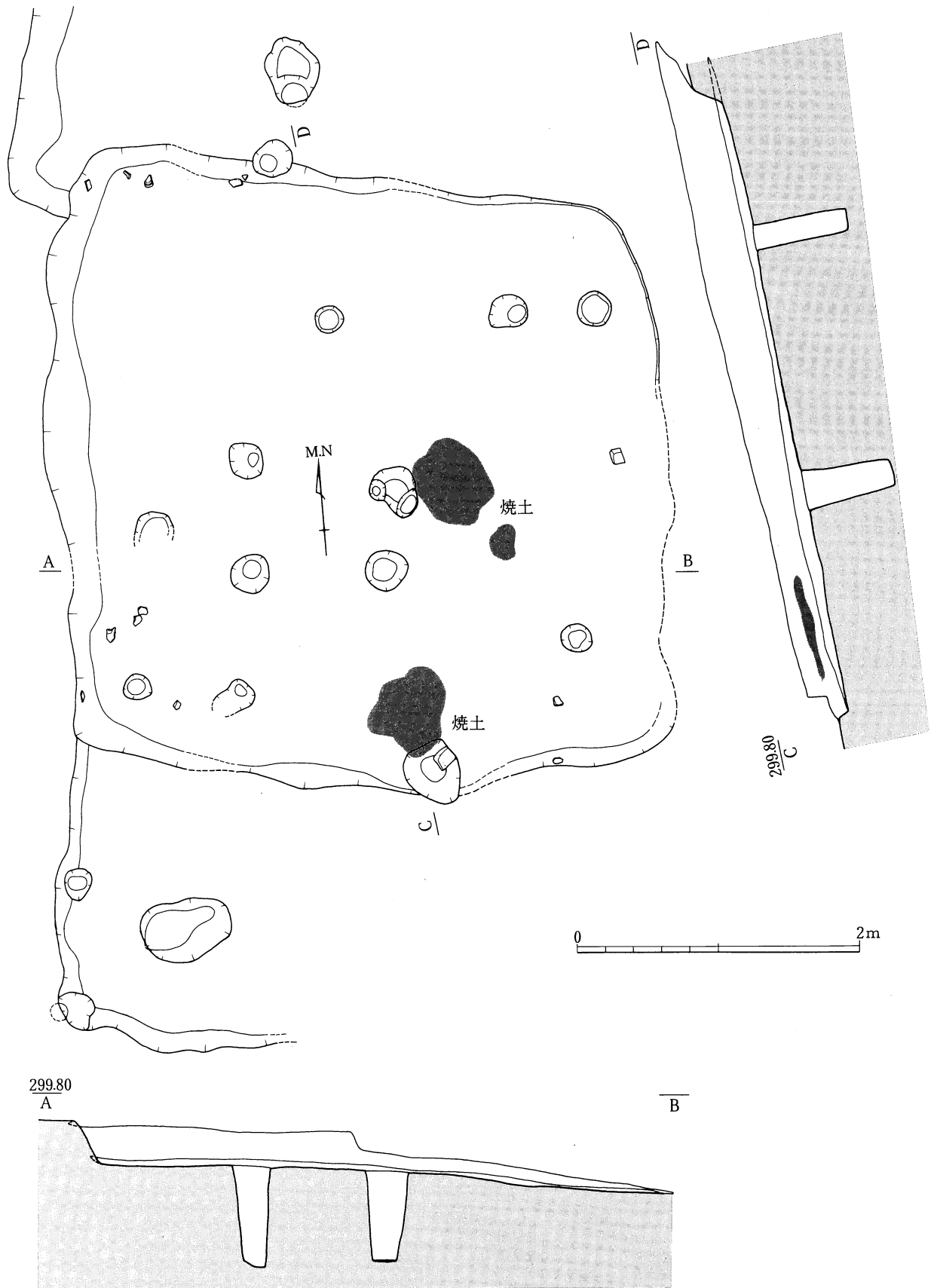
第20図 10号住居出土遺物実測図

遺物 (第22図)

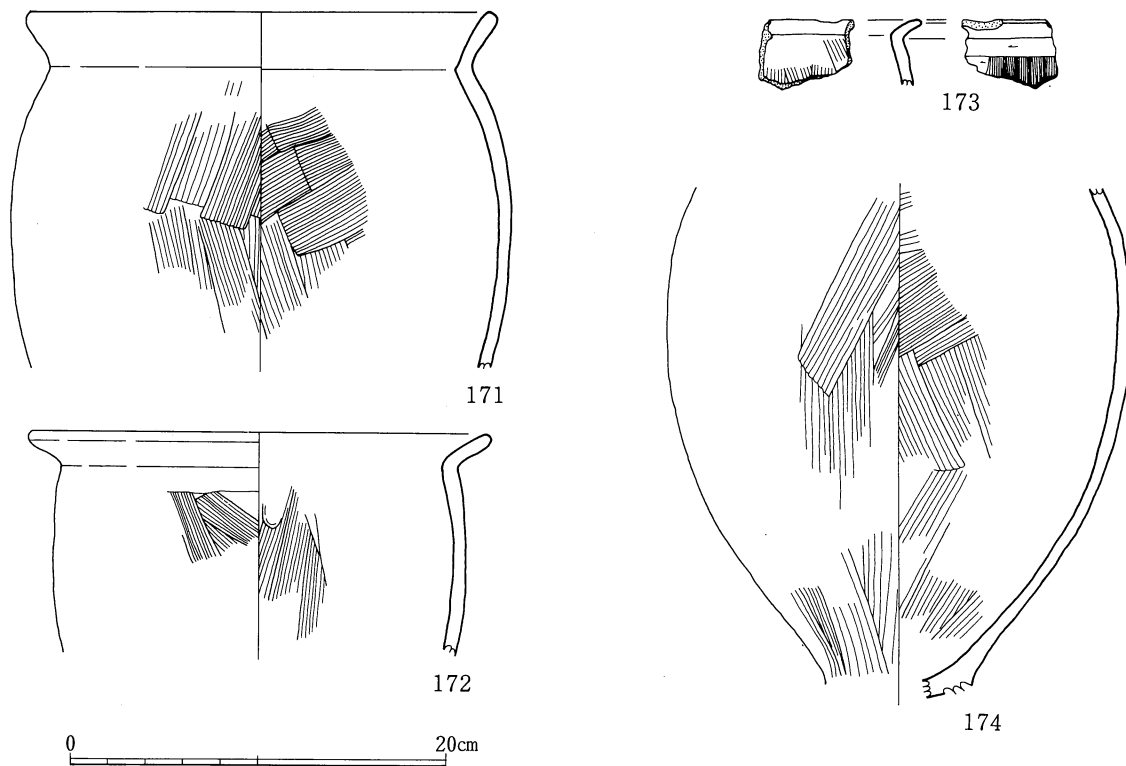
遺物は少ない。171・174は同一固体の可能性が高い甕で脚台内面に砂粒、内面には炭化物の付着がみられる。この2点は12号・17号～19号住居出土の破片と接合しているが、立地的な面や出土量の多さからここで扱った。172・173も内湾する胴部から口縁部がくの字状に屈曲する甕である。

12号住居址 (第23図)

15層上面で検出され、9号・11号によって切られている。東半部は水田耕作等の影響により削平され失われている。西側1辺のみ完全に確認され、約3.2mを計る。主柱穴も判然としないが、中央部やや北寄りに土坑を伴っていた可能性がある。



第 21 图 11 号住居实测图



第22図 11号住居出土遺物実測図

遺物 (第23図)

遺構自体がかなり削平されているため遺物は少ない。175は外傾し直線的な胴部の甕で口縁部下に2条の突帯を有する。また、この突帯と口唇部の外端には刻目が施されている。176は口縁部が内側の張に出す甕である。177はくの字状に屈曲する口縁部で甕とみられる。178は口縁部が鋏先状を呈し水平方向に開く壺である。179は壺の胴部で2条の刻目突帯が巡る。180は壺の底部とみられる。181は全体に擦痕がみられる石器で、先端付近及び長い方の1側面を研磨によって刃部として加工したものである。

13号住居址 (第24図)

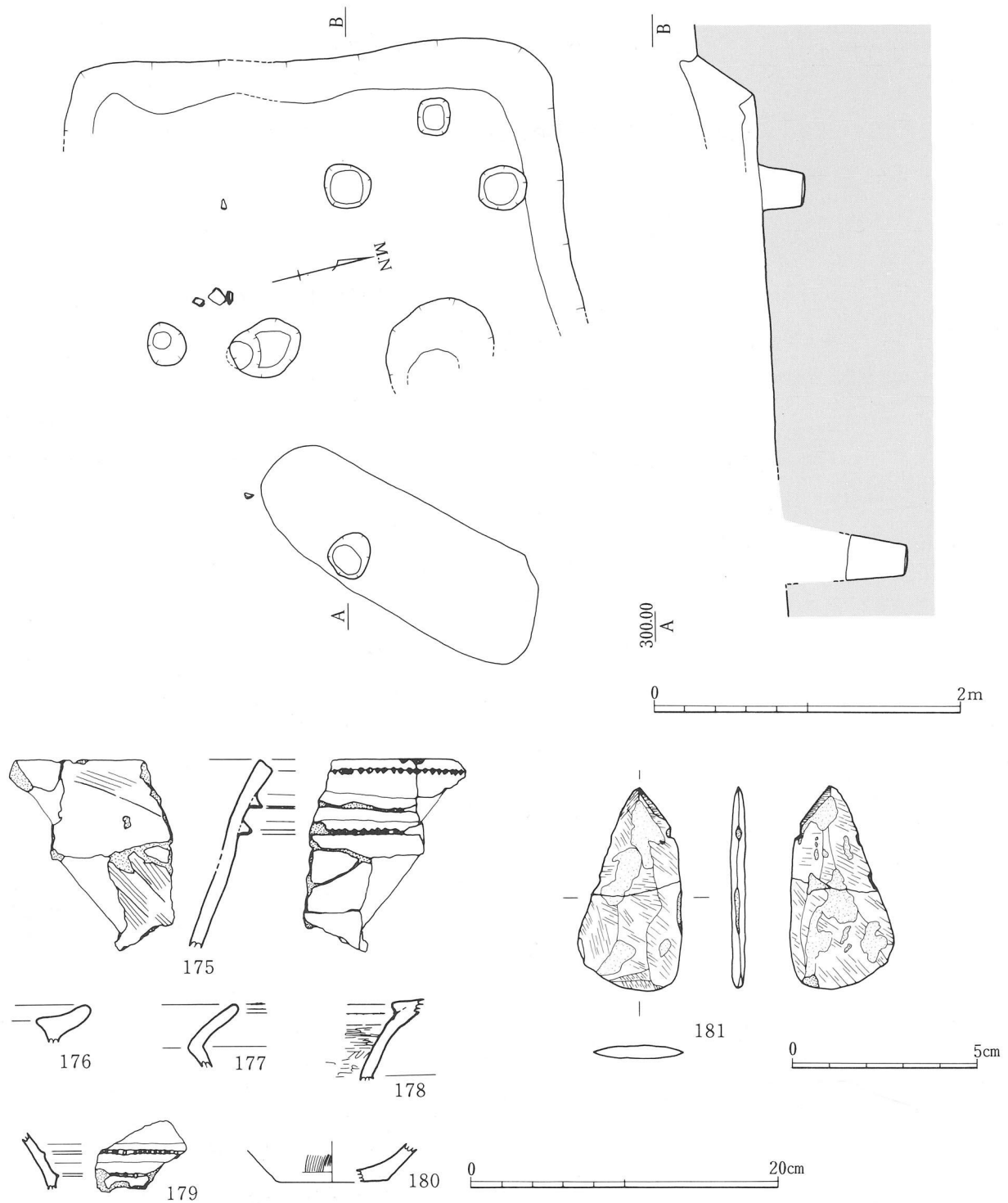
15層上面で検出され、11号によって切られている。12号同様、東半部は水田耕作等の影響により削平され失われている。方形基調の平面プランとみられるが、その規模および支柱穴は不明である。

遺物 (第24図)

12号同様削平が激しく、出土遺物は少ない。182は内湾する胴部から口縁部がくの字状に屈曲する甕である。183は壺の胴部で1条の刻目突帯が巡る。184は甕の脚台部で内面上位に砂粒の付着がみられる。

14号住居址 (第25図)

15層上面で検出され、北側の16号住居と接する。水田耕作等の影響から南側が削平により失われている。1辺約4mほどの方形を基調とした平面プランで支柱穴は2本とみられる。



第23図 12号住居および出土遺物実測図

遺物 (第25図)

遺物は少ない。185は直線的な胴部から口縁部へと続く甕で口縁部下に1条の刻目突帯を有する。186はくの字状に屈曲する甕の口縁部とみられる。

15号住居址 (第26図)

15層上面で検出され、16号を切り17号に切られる。東半部は削平により失われているが、1辺約

4.5 mほどの方形を基調とした平面プランで、主柱穴は2本とみられる。

遺物 (第26図)

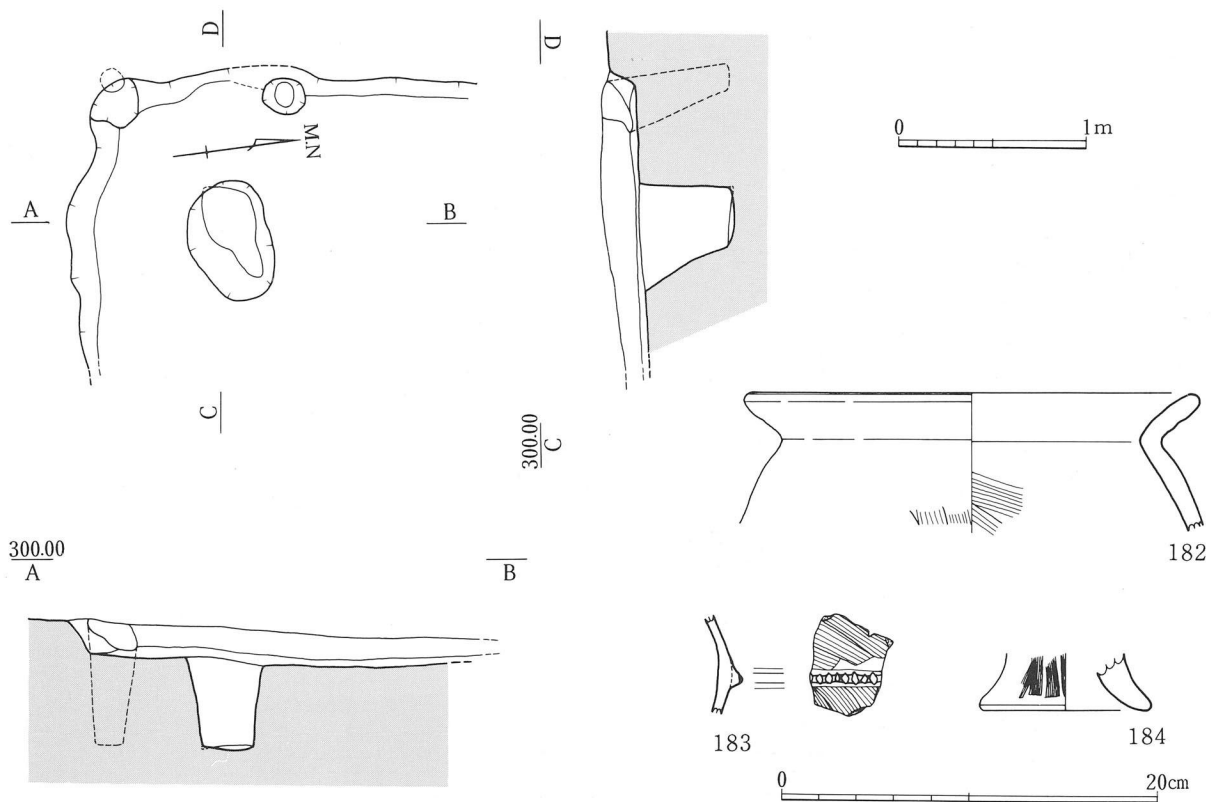
遺物は少ない。187は甕の頸部付近で内外面に粗いハケメが施されている。188は壺の胴部で1条の刻目突帯がみられる。

16号住居址 (第27図)

15層上面で検出され、14号と接し15号に切られる。東半部は削平により失われているが、1辺約4 mほどの方形を基調とした平面プランで、主柱穴は2本とみられる。

遺物 (第27図)

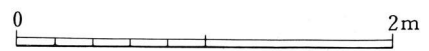
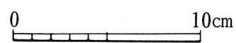
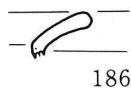
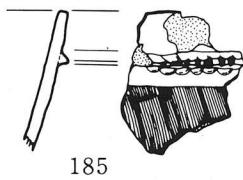
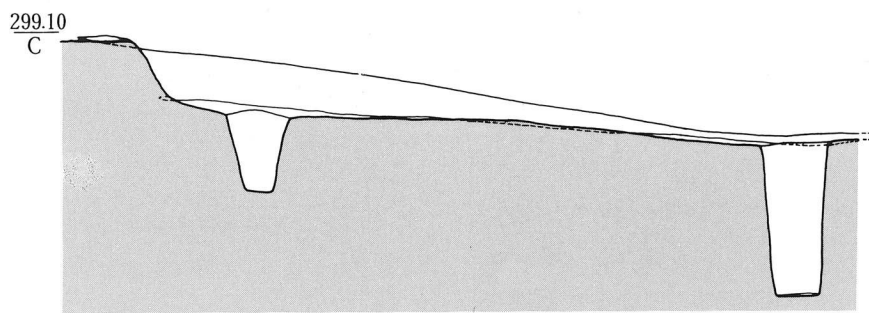
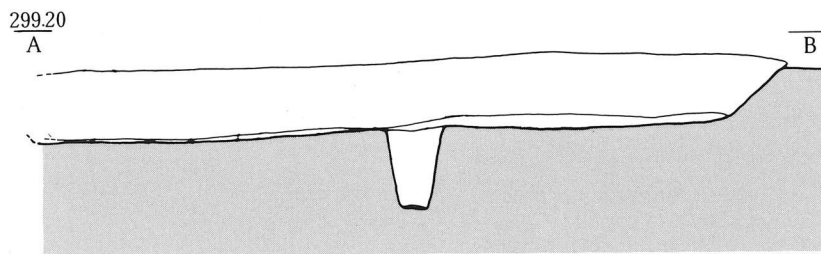
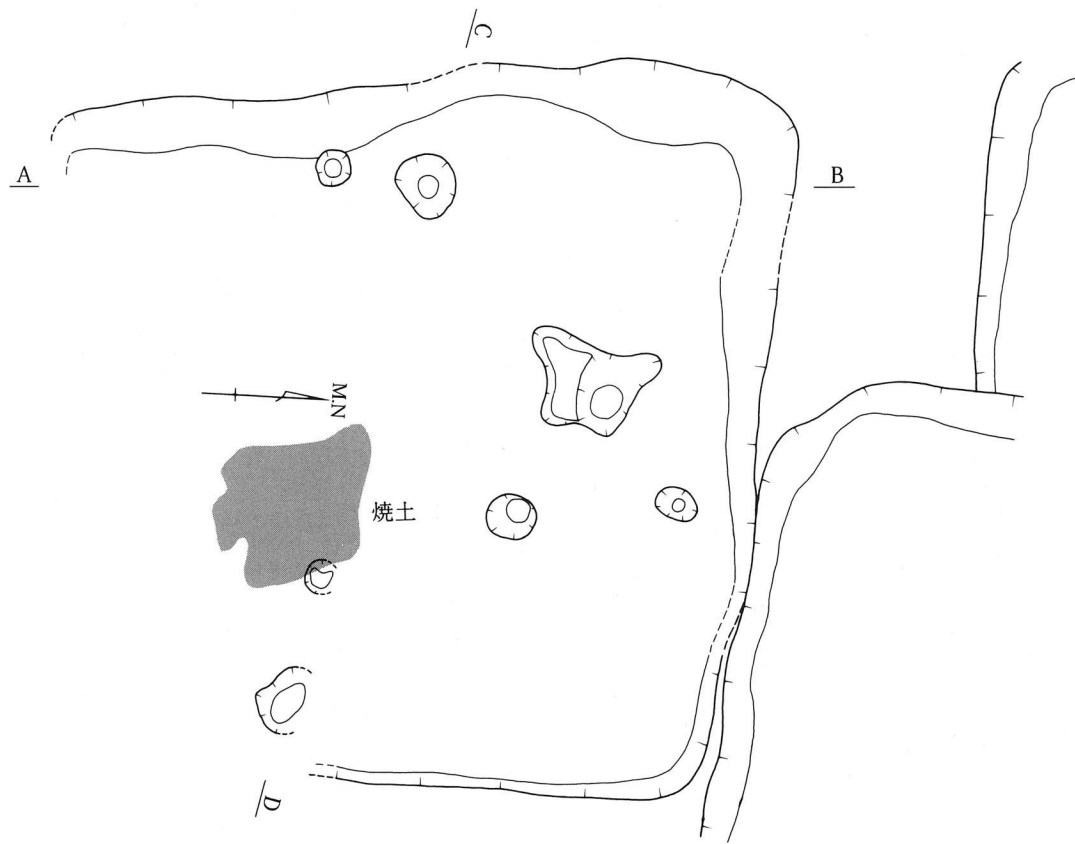
遺物は少ない。190は薄手の甕の口縁部で、口唇部が窪み内面の端部に1か所の刻み目状の落ち込みがみられるが、小破片であるため意図的なものであるか不明である。191は粗製甕の胴部とみられ1条の細い突帯を有する。またこの突帯には間隔をあけて刻目が施されている。192は壺の肩部で3条の三角突帯がみられる。189は磨製石鏃である。



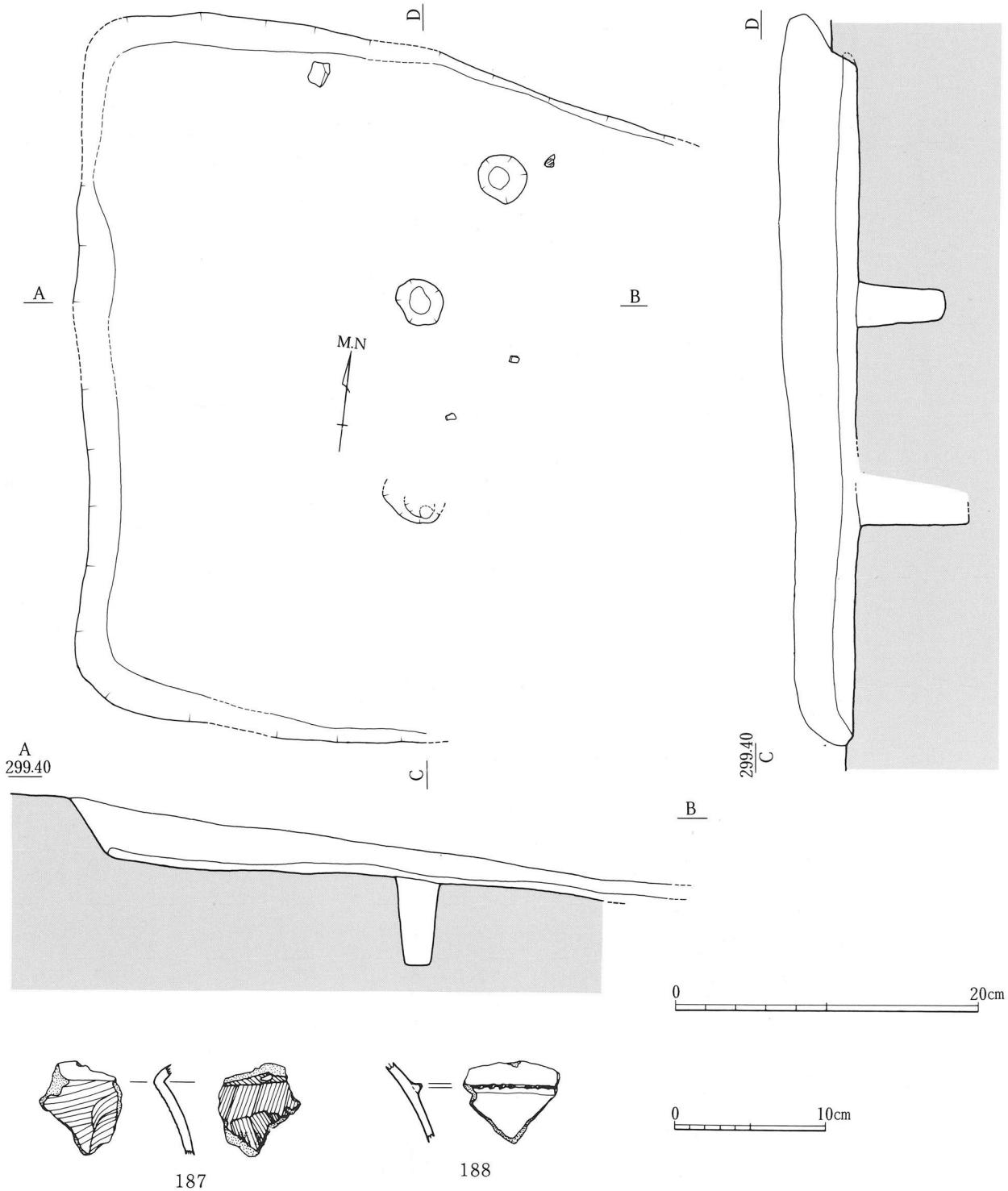
第24図 13号住居および出土遺物実測図

17号住居址 (第28図)

15層上面で検出され、15号を切る。特に削平を受けておらず、検出面から床面までの比高差は最深部で1.5 mを計る。平面プランは1辺約4.3 mの方形基調だが、北西壁の中央付近から西コーナーにかけて幅1.2 mほどの張り出し部分を有する。この張り出し部分の底面は床面よりも30 cmほど高く、ベッド状を呈する。主柱穴は2本とみられ、その間を中心に床面が硬化していた。



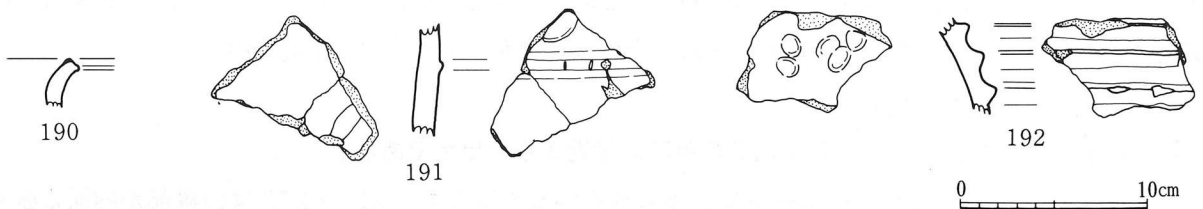
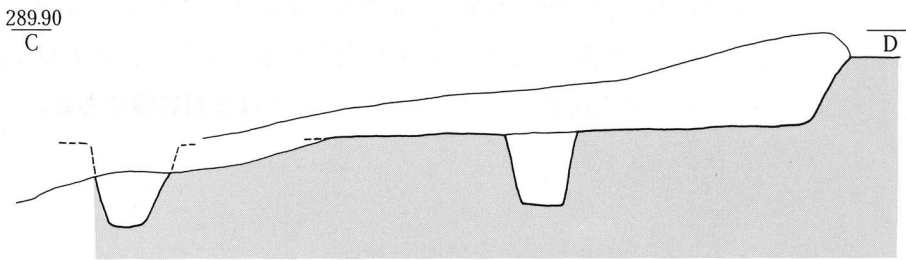
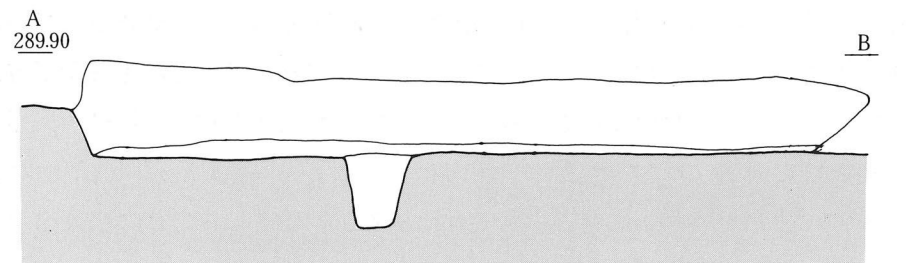
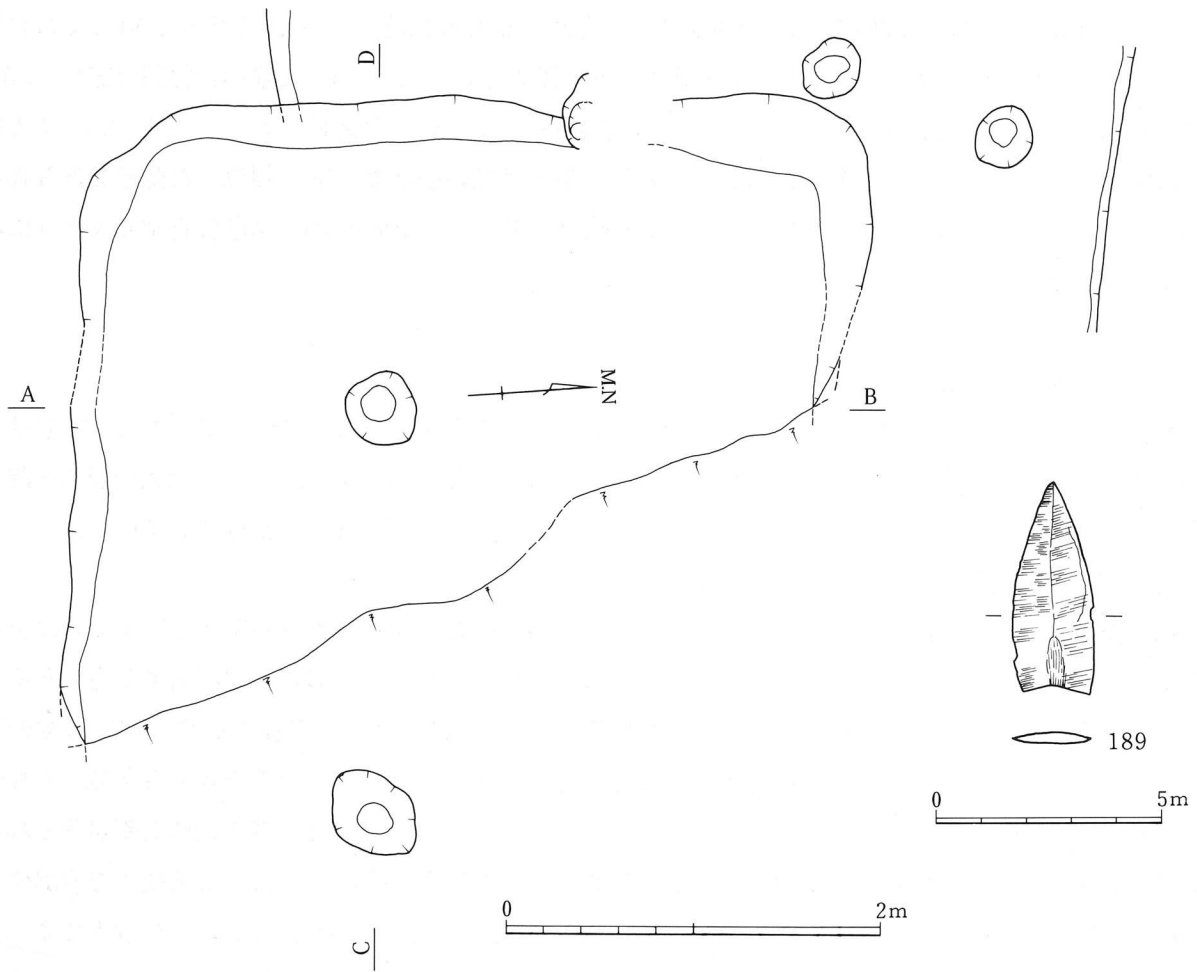
第25図 14号住居および出土遺物実測図



第26図 15号住居および出土遺物実測図

遺物 (第29図)

遺物は比較的多いが、床面付近からの出土は少ない。193は粗製の甕で口縁部下の屈曲部付近に2条とやや間隔をおいて1条の三角突帯が巡り、その間を繋ぐ縦方向の突帯がみられる。194は甕で口縁部が屈曲する付近と胴部上半にやや間隔をあけてハケもしくは櫛歯状の工具によって横方向の沈線文を画き、その間に同一工具により2段の波状文が施されている。195は粗製甕の口縁部で口唇部が強く



第 27 図 16 号住居および出土遺物実測図

くぼむ。196・197は口縁部が内側に張り出す甕で196はかなり内湾している。198～200はくの字状に屈曲する甕の口縁部とみられ、200は頸部に三角突帯が巡る。201・202は壺の口縁部で部で、202の口唇部には刻目が施されている。203は壺の頸部付近で1条の三角突帯が巡る。204・205は突帯を有する壺の胴部で204には刻目が施されている。206は甕の胴部で194に類似した器形とみられる。207は壺の底部で底部外面を細かなハケメにより仕上げている。208～211は磨製石鏃で大きさにかなりばらつきがみられる。

18号住居址（第30図）

調査区のほぼ中央に位置し、19号によって切られる。15層上面で検出され、遺構の残存状態は良好であった。長軸6.2m・短軸5.2mの長方形プランで、今回検出された住居中では最大の規模を誇る。主柱穴は4本とみられ、南寄りの主柱穴間に土坑を伴う。また、床は貼床で一部硬化していた。

遺物（第31・32図）

出土遺物は多く、多様である。216～218・229・230・237・239・240が床面付近からの出土である。212・213は口縁部が内側に張り出す甕である。214～220はくの字状に屈曲する甕である。214は頸部内面を強く撫でて明瞭な稜をつけている。215は口縁部が下方に張り出す。221は甕の脚台部で内面に砂粒の付着がみられる。222～225は粗製甕で口縁部下に多条の三角突帯を巡らすものであるが、口縁部の形状がかなり異なる。また、222には横方向の突帯の下に縦方向の突帯がみられる。226・227は粗製甕の底部とみられる。228は壺の口縁部で下方に垂れる。229は鋏先状で内湾する壺の口縁部である。230はくの字状に屈曲する壺で頸部に1条の三角突帯が巡る。231は垂直に立ち上がる頸部から大きく外反して開く壺で、頸部下位に1条の三角突帯がみられる。232は外反する口縁部の中位でさらに開く壺とみられる。233は鋏先状を呈する壺の口縁部で口唇部に刻目が施されている。234・235は突帯を有する壺の肩部で、235には刻目が施されている。236は外反し口縁部が下方に垂れる壺で2個を1単位とした円形浮文が貼付られている。237は広い平底から胴部中位に最大径をもち、内傾してくの字状の口縁部に続く完形の壺である。238は非常に広い平底の底部で外面はハケメによって丁寧仕上げられている。239～242は平底の底部であるが、242は円盤状に張り出す。243は鋏先状を呈する壺で、水平方向に開いた口縁部の上面には2個を1単位とした円形浮文が4か所に配されているとみられる。244・245は脚の裾部で、いずれも外面が丹塗りである。246は全面よく研磨された石器で、上下の側面が刃部として成形されている。247～249は磨製石鏃である。

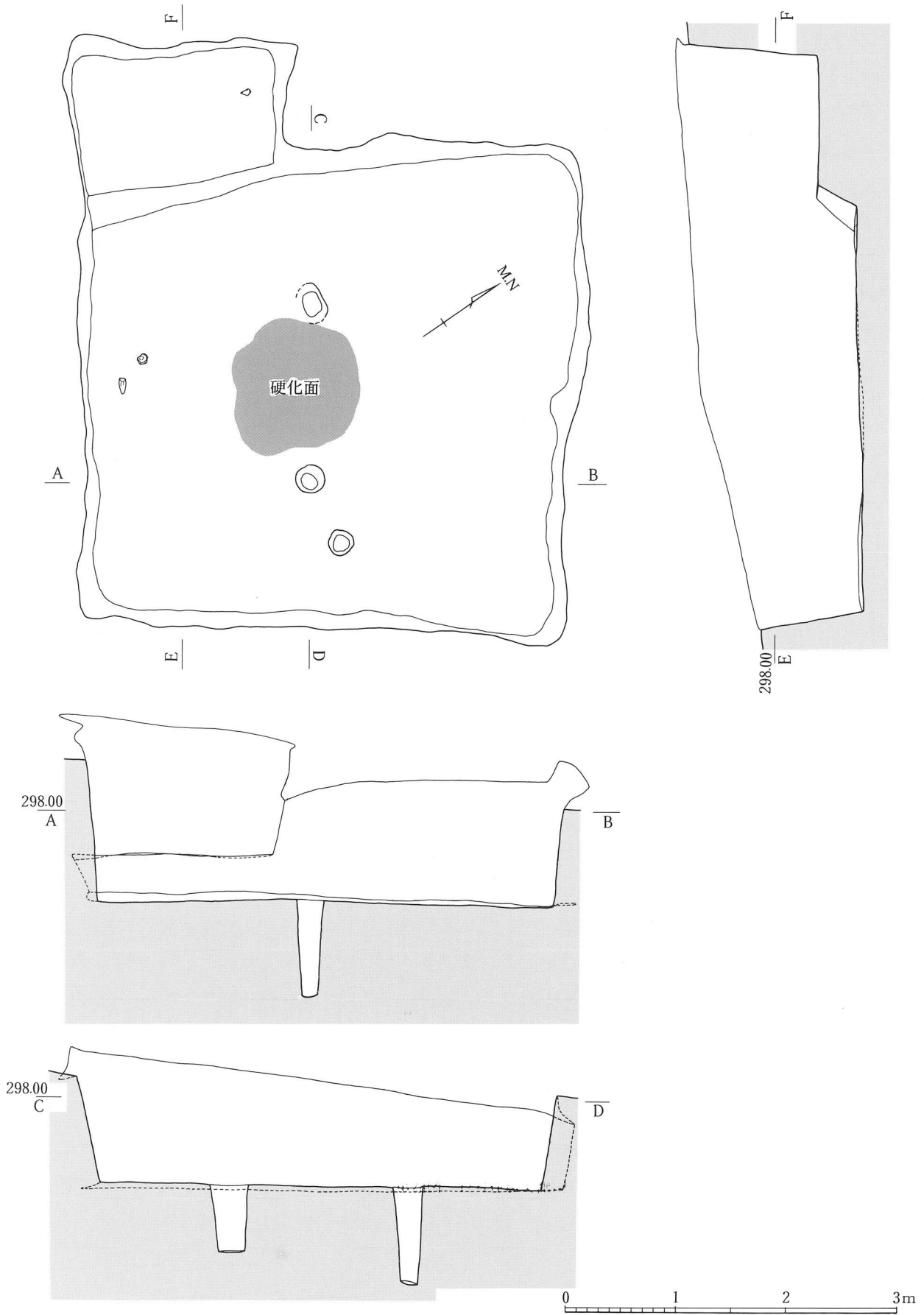
19号住居址（第33図）

21号住居の北西に位置し18号を切る。15層上面で検出され、1辺約4mの方形プランを呈する。残存状況は良好で、遺構の掘り底直上に堆積した8層上面は部分的に硬化しており、貼床である可能性が高い。主柱穴は南北に並んだ2本とみられ、その柱穴間からやや西側に土坑を伴う。

遺物（第35図 250～261）

遺物は少なく、図化したものでは255のみ床面付近からの出土である。

250は直線的な胴部の甕で口縁部下に2条の刻目突帯を巡らす。251・252は口縁部が内面に張り出す甕である。253は平底を呈する甕の底部とみられる。254は甕の脚台部であるが、内面に砂粒の



第28图 17号住居实测图

付着はみられない。また、20号住居出土の破片と接合しており、そちらに伴う可能性もある。255～258は粗製甕とみられる。256については254同様に20号の遺物と接合している。257は上下、傾きとも判然としないが、断面三角形の湾曲した突帯が貼付けられている。259～261は磨製石鏃である。

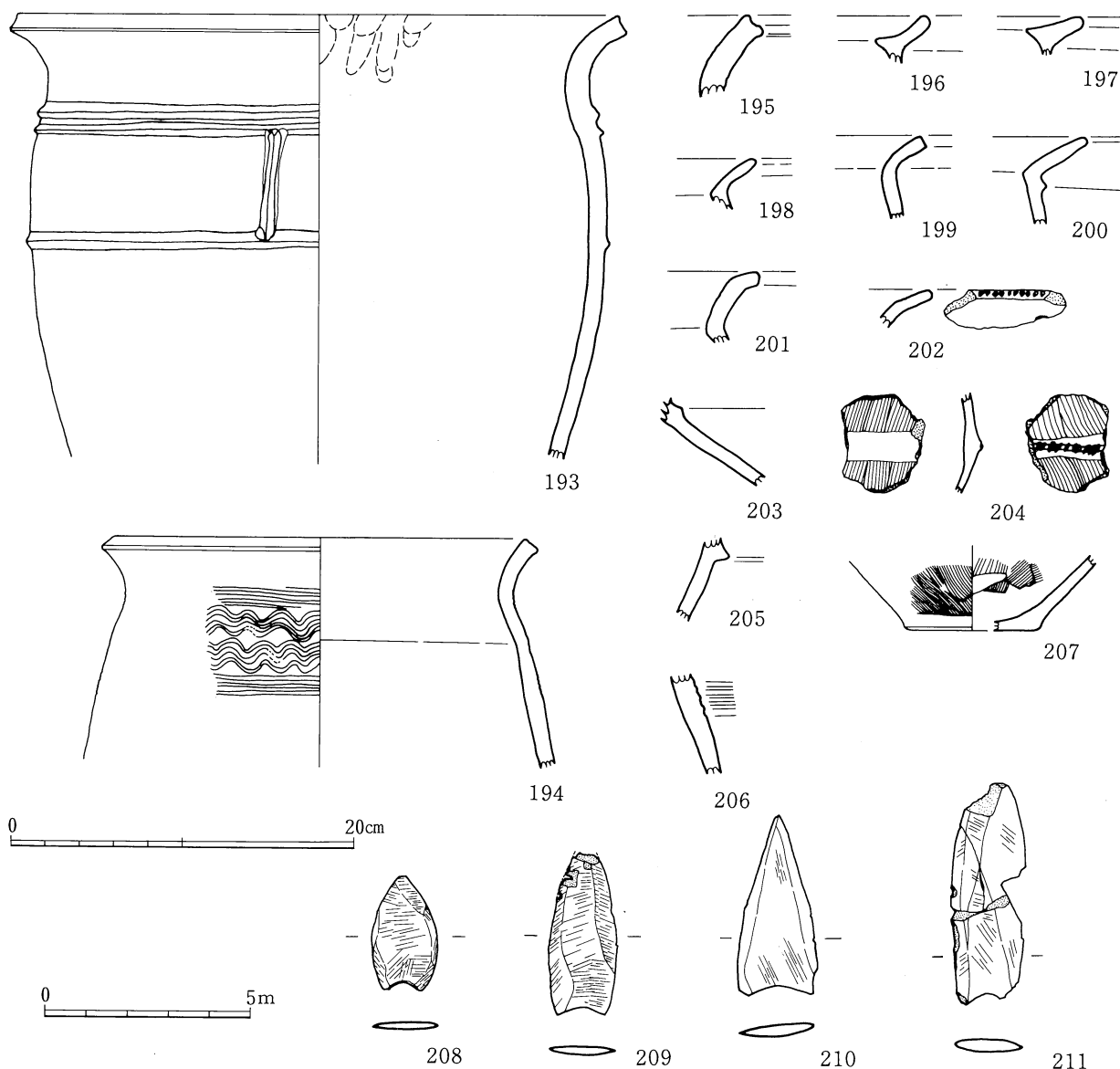
20号住居址（第34図）

調査区の中央部南寄りに位置し、15層上面で検出した。南西コーナーが調査区外に延びるため未検出だが、長軸4.4m・短軸3.8mの長方形プランを呈する。支柱穴は南北方向の2本とみられる。また、支柱穴とした北側の柱穴付近および中央付近の床面直上で焼土が検出された。また、埋土の中位にはほぼ同じレベルで硬化面が確認された。

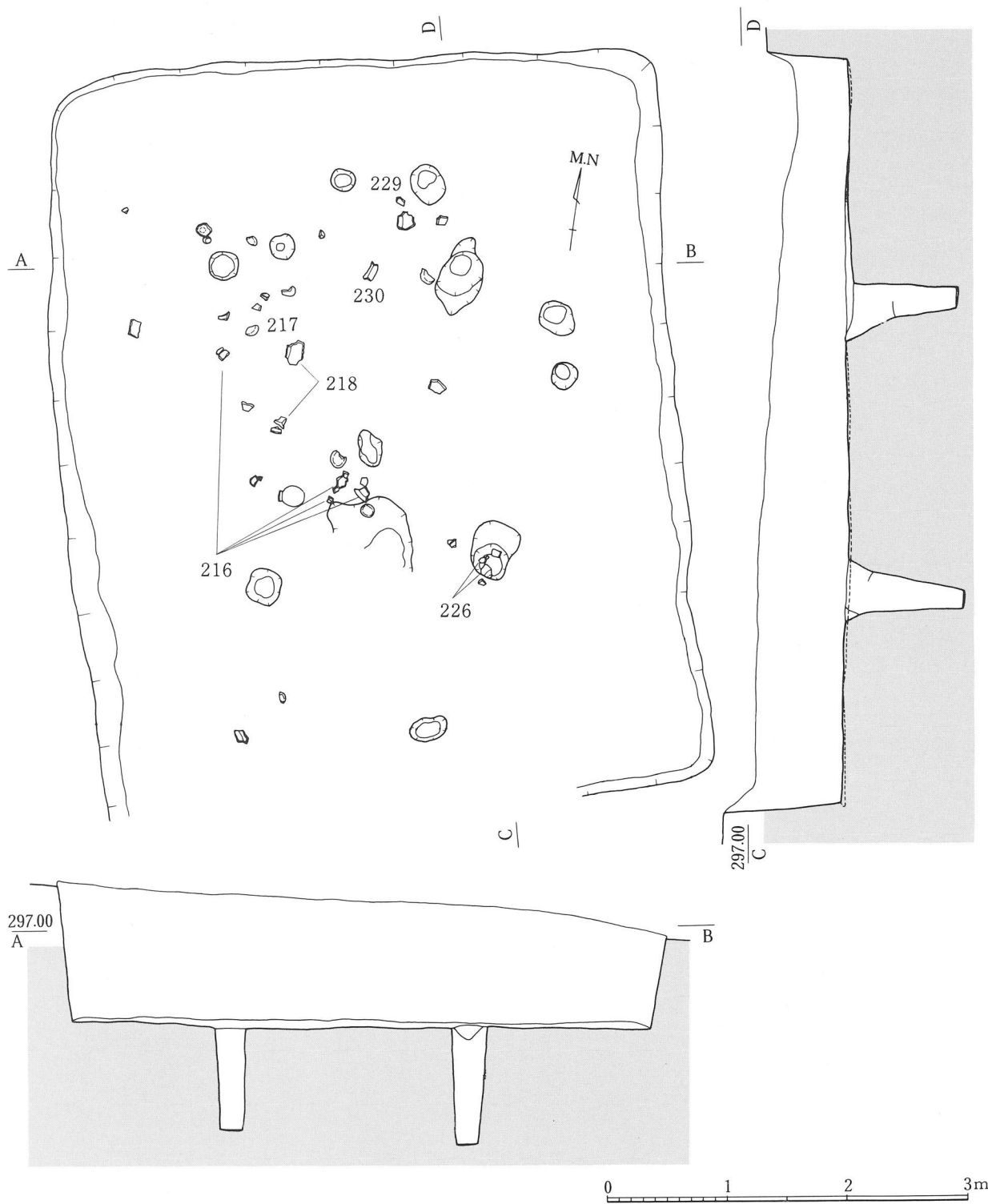
遺物（第35図 262～274）

遺物は少なく、床面付近から出土したものはほとんどない。

262・263は口縁部が内面に張り出す甕である。264は甕の脚台部で内面に砂粒の付着はみられない。

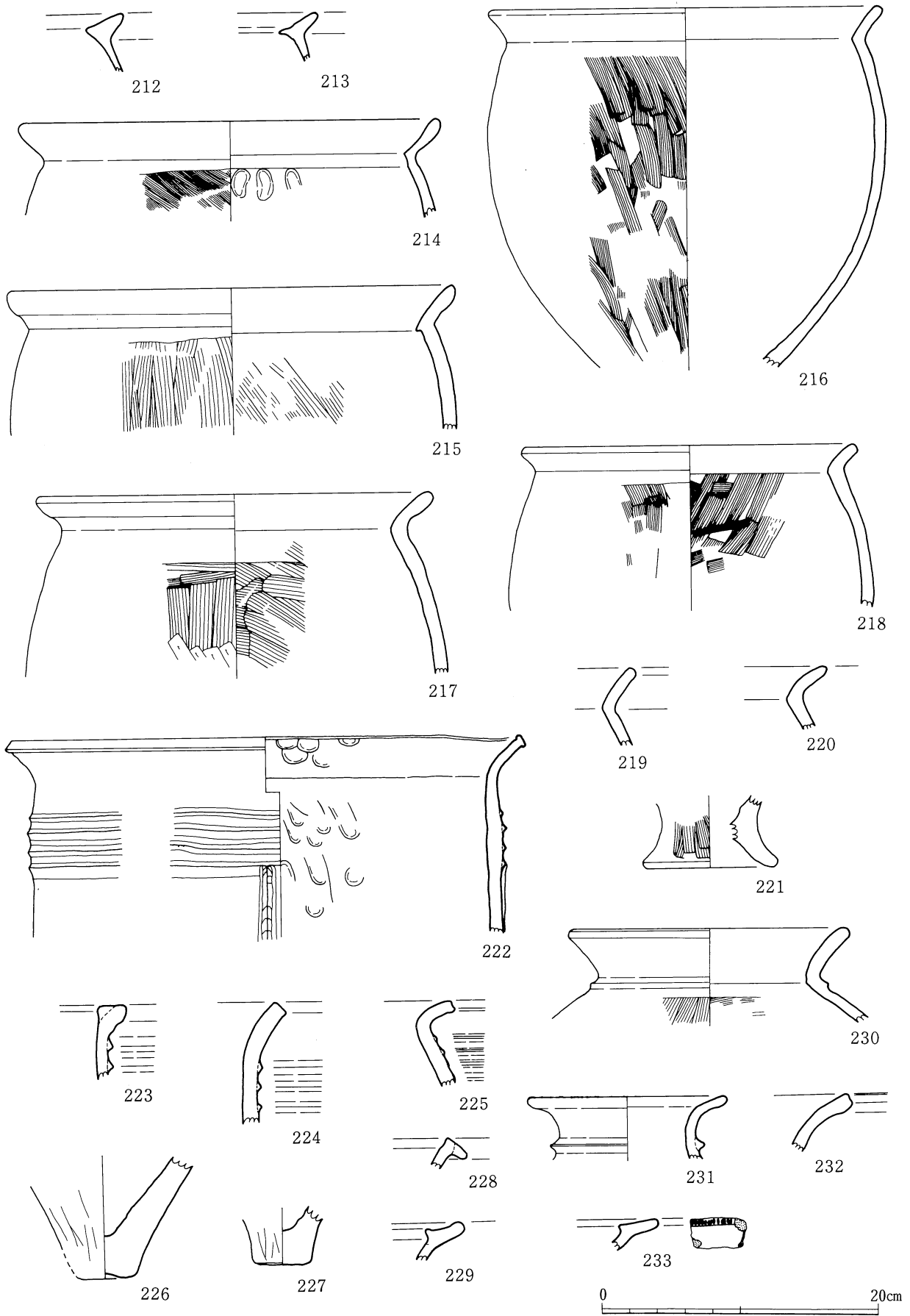


第29図 17号住居出土遺物実測図

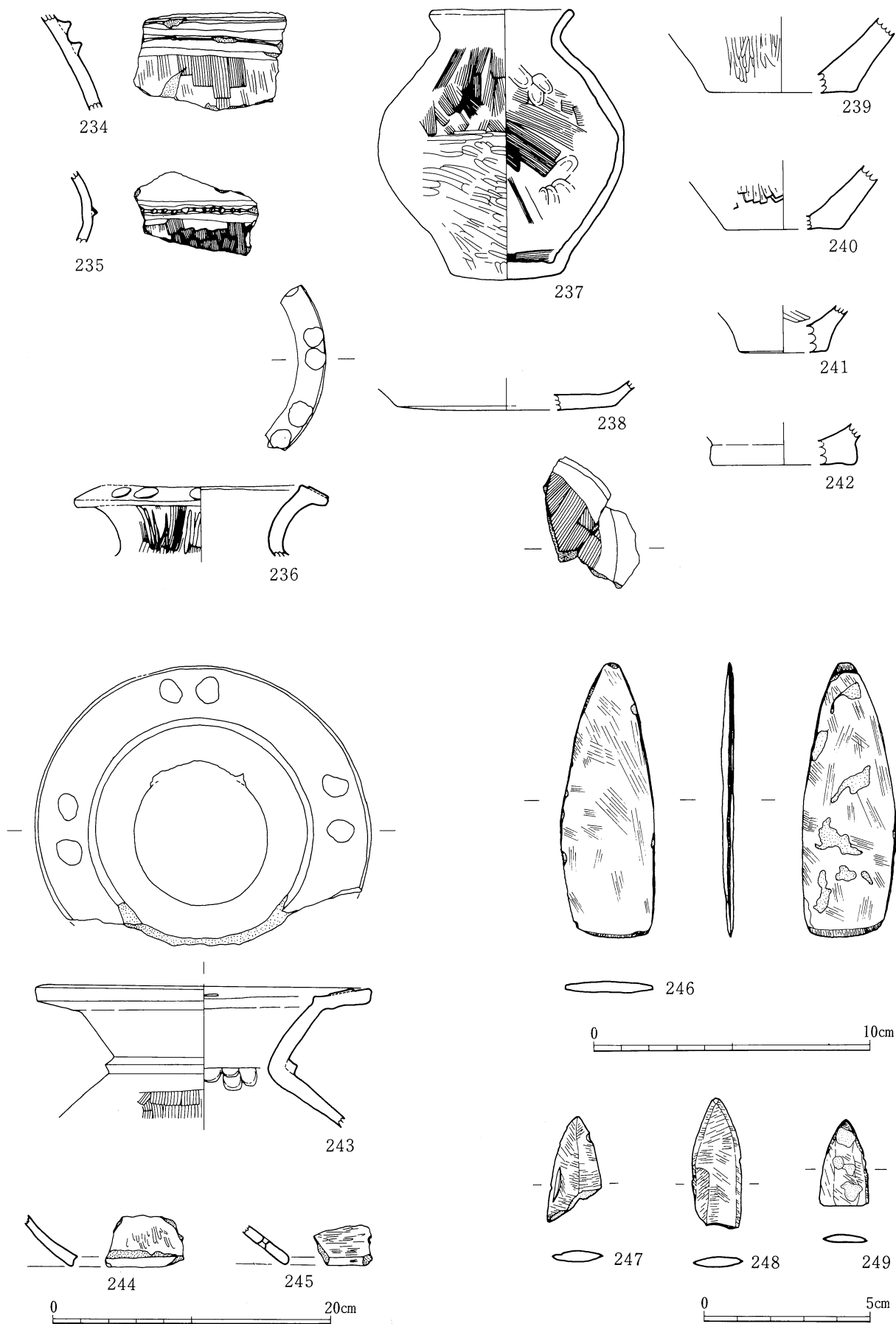


第30図 18号住居実測図

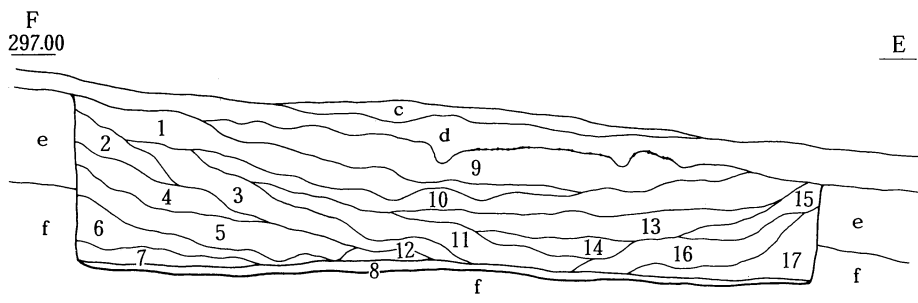
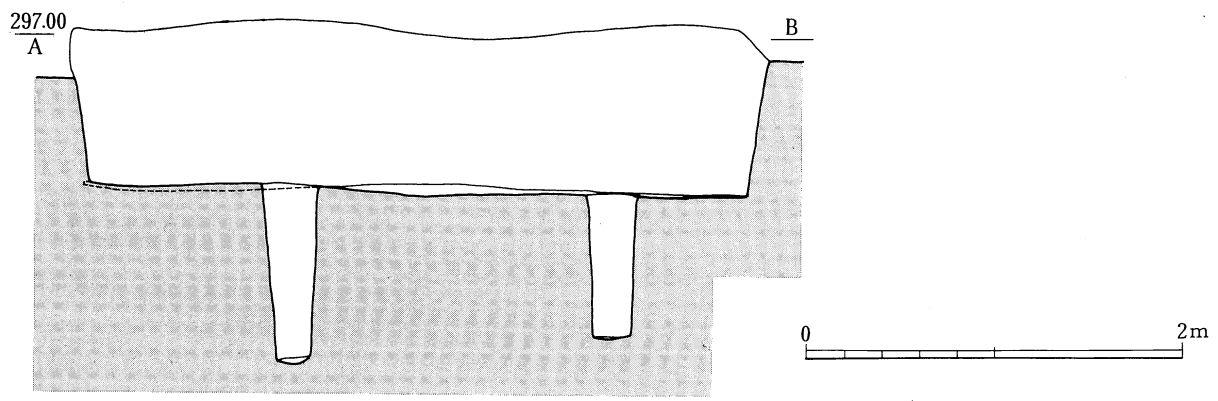
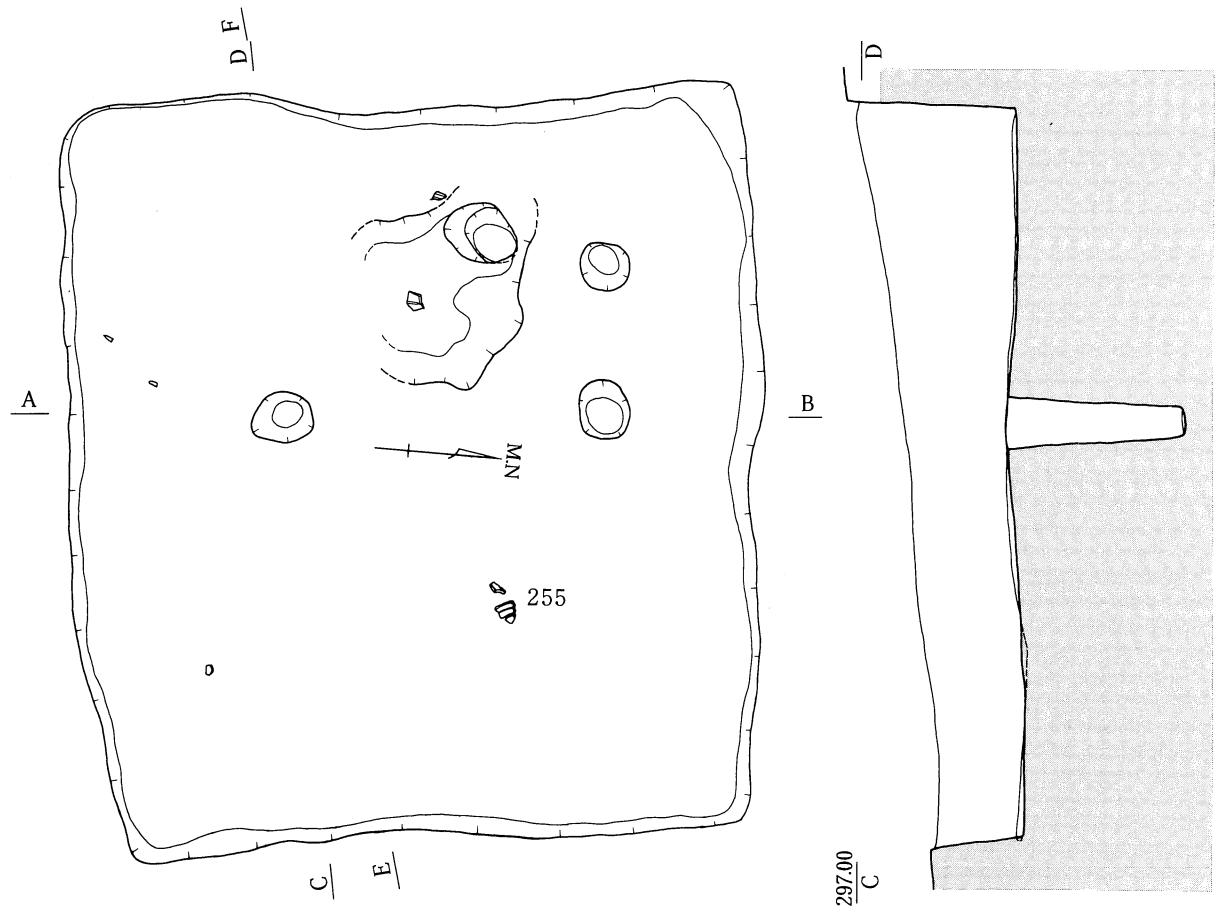
265は壺の頸部で屈曲部に1条の三角突帯を巡らす。266は壺の胴部で高さの異なる突帯を2条巡らせ、下位の高い方には刻目が施されている。267も壺の胴部で最大径となる付近に刻目突帯を巡らせている。268・269・273は粗製の甕である。270・271は壺の頸部付近で、三角突帯と貼付浮文がみられる。272は壺の肩部付近で外面は丹塗りであり、重弧文が施されている。274は粗製甕の底部とみられる。



第31图 18号住居出土遗物实测图(1)

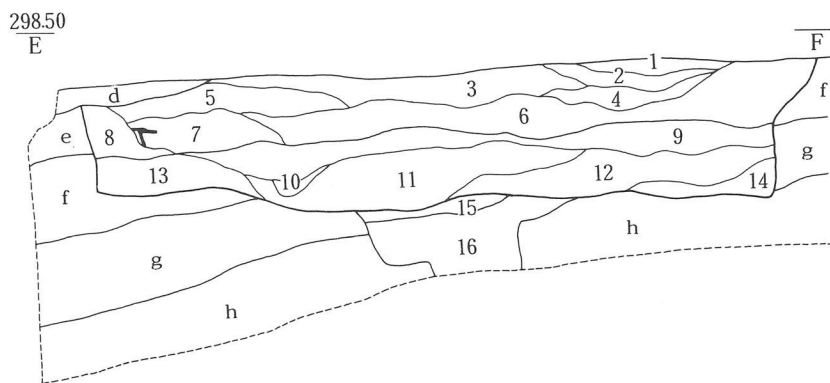
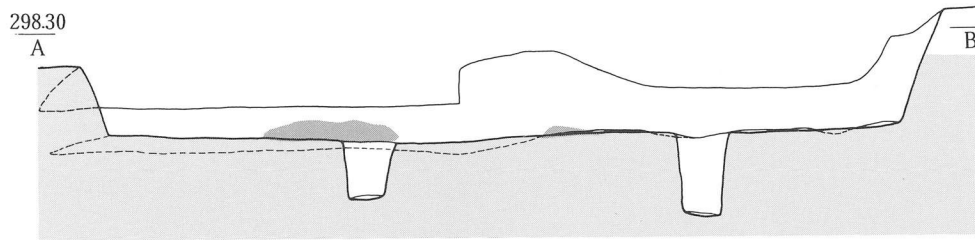
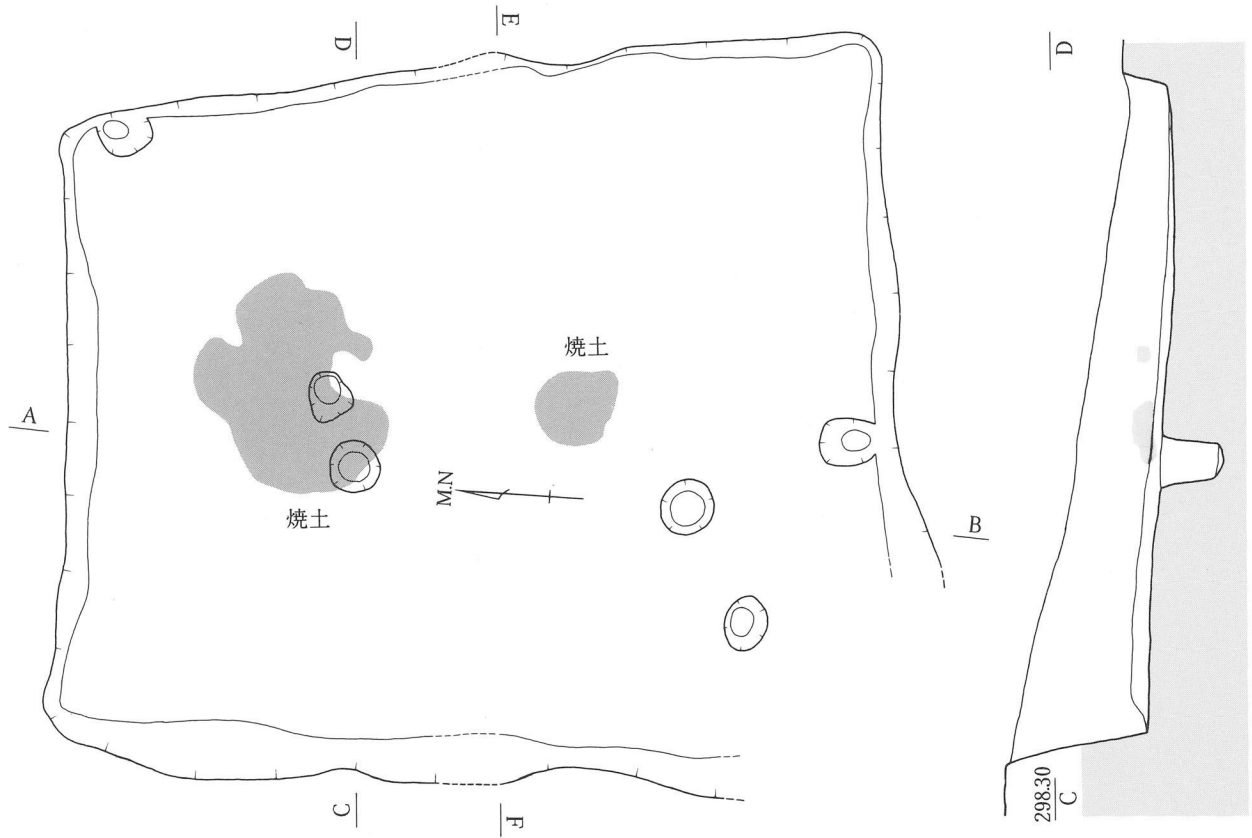


第32图 18号住居出土遺物实测图(2)



c 基本土層 12層
 d 基本土層 13層
 e 基本土層 15層
 f 基本土層 16層
 ※1～17層は暗褐色を基調とした埋土でわずかな色調差や硬さ、混合物等によって分層した。8層上面が部分的に硬化していた。

第33図 19号住居実測図



- d 基本土層 13層
 - e 基本土層 15層
 - f 基本土層 16層
 - g 黄褐色土
 - h 明黄褐色土
- ※ 1～14層は暗褐色を基調とした埋土でわずかな色調差や硬さ、混合物等によって分層した。9層上面が部分的に硬化していた。また、15・16層は竖穴掘削以前の樹根等と思われる。

第34図 20号住居実測図

21号住居址（第36図）

19号住居の東側に位置し、14層上面で検出した。長軸5.3m・短軸4.3mの長方形プランを呈する。支柱穴は長軸に対して直行する方向に並んだ2本とみられ、その東側に土坑を伴う。東よりの床面直上から炭化材および焼土と多くの礫が検出された。

遺物（第38図 278～285）

土器は少ないが、278・282～284が床面付近より出土している。

275・276は口縁部が内面に張り出す甕である。277は外反する口縁部で壺とみられる。278は鋏先状を呈する壺の口縁部である。279・280は粗製甕の口縁部で口縁部下に三角突帯が巡る。281は甕の底部とみられる。282はほぼ完形の長頸壺で口縁部は同一固体と思われるものである。平底を持ち、胴部最大径を計る部分と頸部に1条と口縁部付近には2条の低い突帯が巡る。口縁部はやや内湾している。283は外反しながら開く壺の口縁部で口唇部に刻目が施されている。284は胴部が強く張り出しやや明瞭な稜をもつ壺である。285は壺の胴部で刻目突帯が1条巡る。

22号住居址（第37図）

調査区の東側、23号の南西側に位置する。16層上面で検出したため残存状況はあまり良好でないが、1辺5.3～5.8mの方形プランを呈する。支柱穴は2本（P1、P2）、4本（P3～P6）のどちらの可能性も考えられるが、平面プランの規模が大型である点を考慮して、ここでは4本として断面図を掲示しておく。また、P5・P6の周辺を中心に炭化物を含む焼土塊が検出された。

遺物（第39図 286～293）

遺物はさほど多くないが、北西側の壁付近から10点ほどの石鏃未成品が集中出土していることは注目される。292は床面付近の出土である。

286は口縁部が内面に張り出す甕である。287はくの字状に屈曲する口縁部で外面は縦方向のミガキがみられる。288～290は粗製の甕である。288の縦方向の突帯の左側のみに爪によるとみられる刻目が施されている。289の口縁部下の突帯は貼付時の押圧を意図的に連続させ、いわゆるミミズばれ状の突帯を形成している。291は粗製甕の底部で非常に小さな平底を呈する。292は脚台付鉢ではほぼ完形である。外面はミガキ、内面はナデ調整がみられるが、胴部の最大径を計る部分から口縁部にかけて煤の付着がみられる。293は磨製石鏃である。

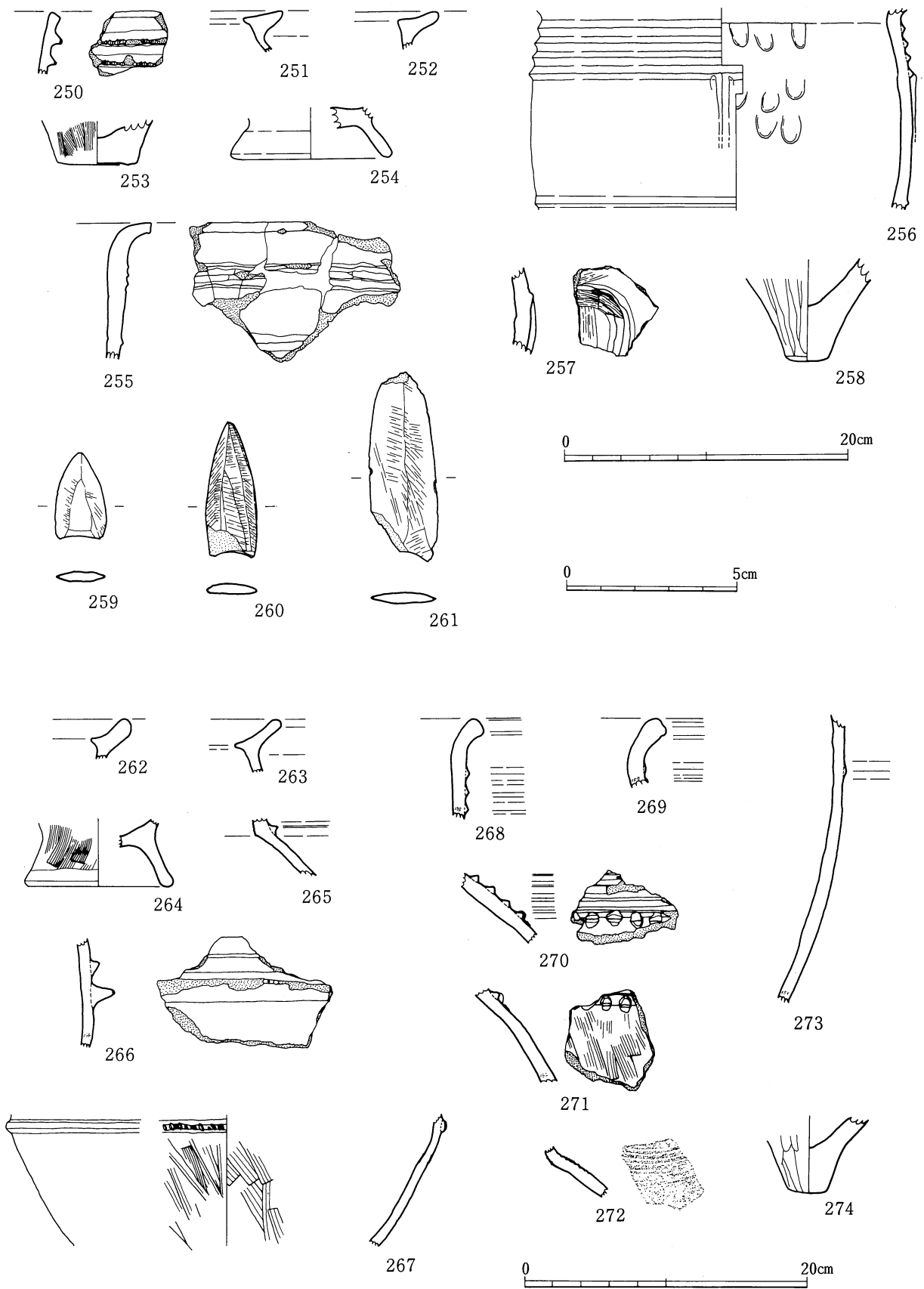
23号住居址（第38図）

22号の北東に位置し、15層上面で検出された。1辺4mの方形プランを呈し、支柱穴は2本とみられる。東西に並ぶこの支柱穴間の南側には浅い落ち込みがみられ、粗製甕の大きな破片が検出されている。また、この住居の壁面には長さ10cm・幅1cm・深さ3cmの溝状の窪みがみられ、部分的には縦に数個並んで検出されており注目される。

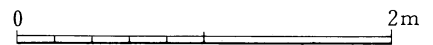
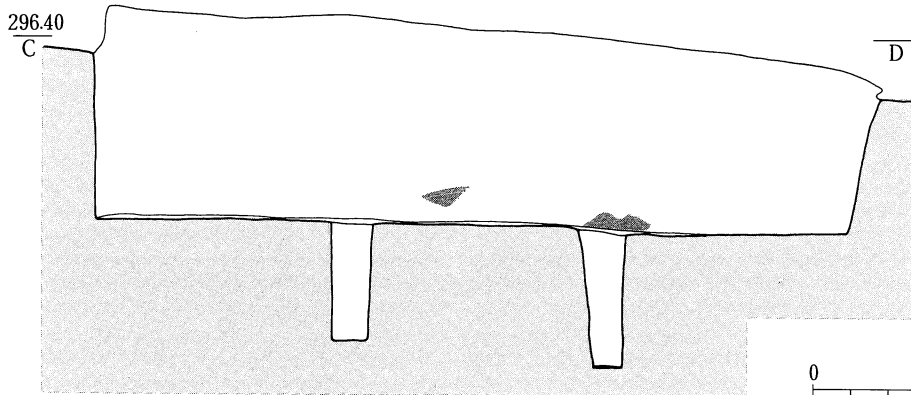
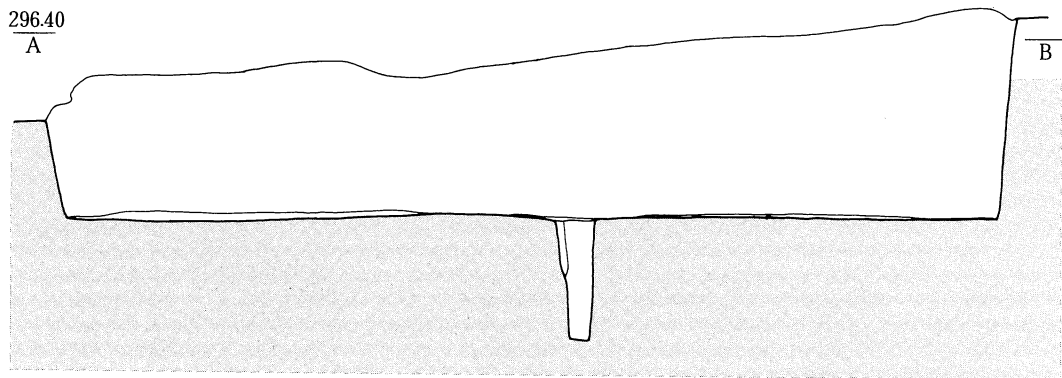
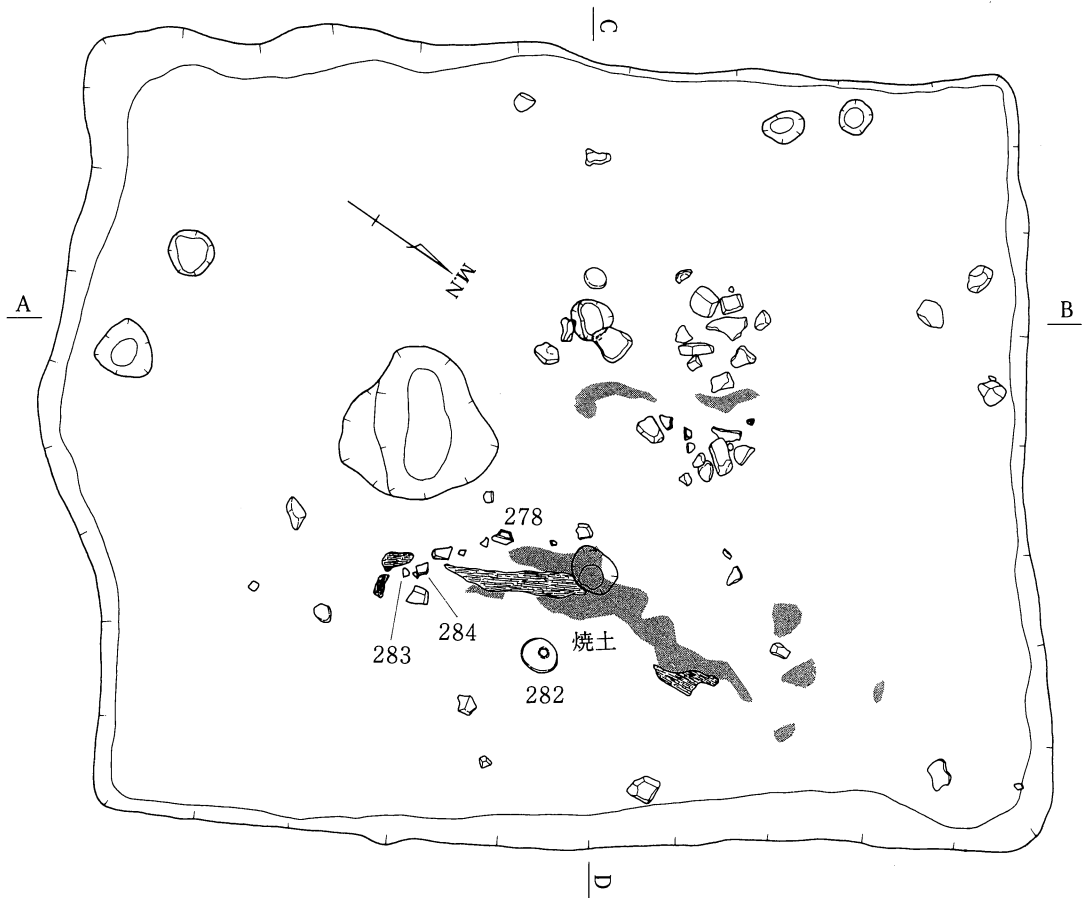
遺物（第39図 294～302）

粗製甕の大きな破片が出土しているが、全体的には少ない。294～296が上述の落ち込みおよび周辺から出土している。

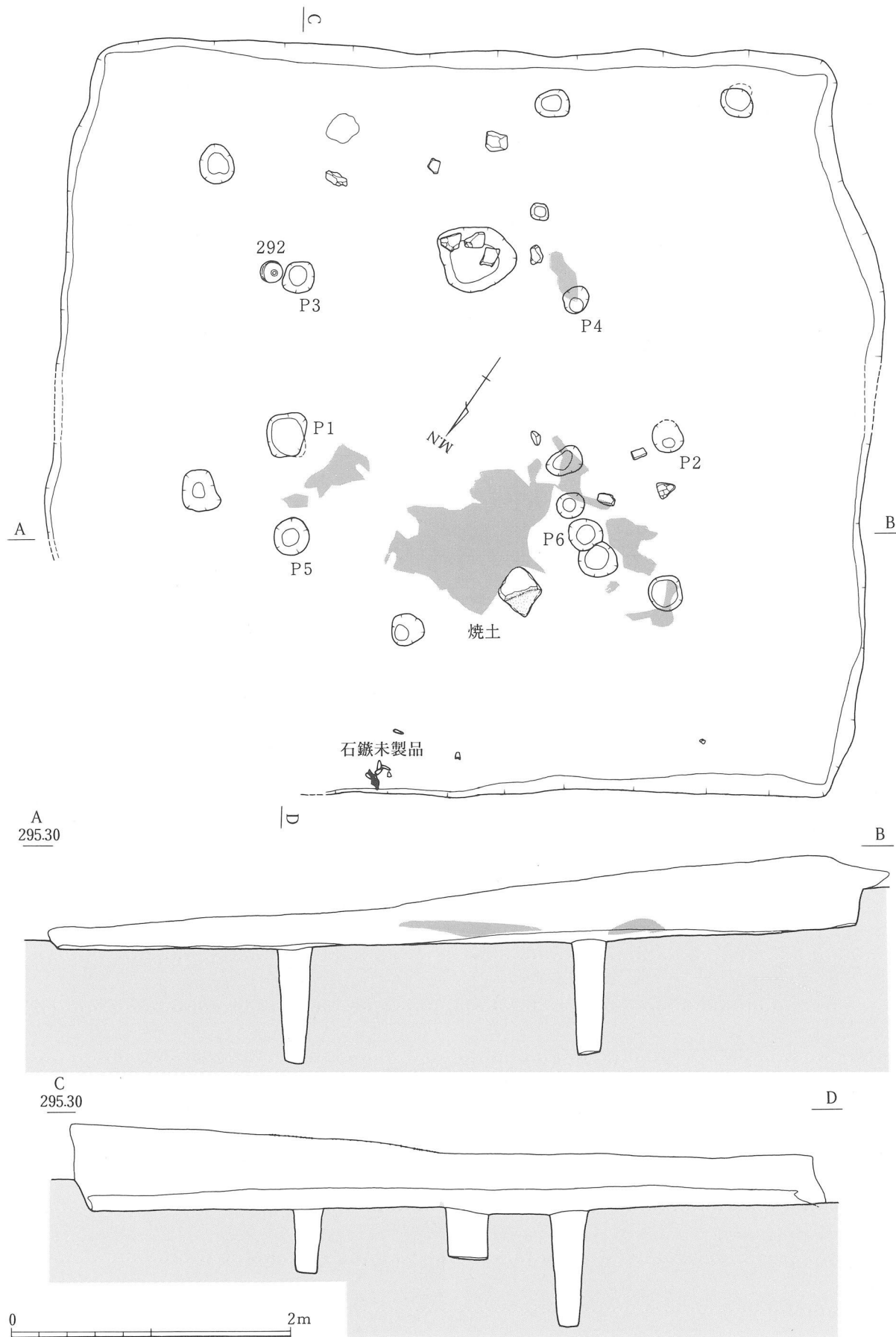
294～296・299・300は粗製甕である。いずれも外反する口縁部の下に4条の三角突帯を巡らせ、



第35图 19·20号住居出土遺物実測図



第36图 21号住居実測図



第37図 22号住居実測図

やや間隔を開けて1条巡らせた突帯の間に縦方向の突帯を張り付ける。296以外は口唇部の形状が異なるため別個体だが、296はいずれかと同一の可能性もある。297はくの字状に屈曲する甕である。298は直線的な口縁部の下に刻目突帯を巡らせる甕である。301・302は磨製石鏃である。

24号住居址（第40図）

21号住居の南側に位置し、15層上面で検出された。南半部が未調査のため不明だが、北側の1辺は約3.2mを計り、方形プランで支柱穴は2本とみられる。

遺物（第40図）

削平の影響で遺物は少ない。308・309が床面付近からの出土である。

303・304は口縁部が内側に張り出す甕である。305は粗製の甕で口縁部下に突帯がみられる。306・307は甕の脚台部で内面に砂粒の付着がみられる。308は壺、309は粗製甕の底部とみられる。310は長頸壺で、頸部に1条の沈線がみられる。311は磨製石鏃である。

25号住居址（第41図）

22号住居の西側に位置し、26号に切られる。15層上面で検出したが、東側は既に破壊され、調査区外は未調査であるため規模は不明だが、方形を基調とした平面プランとみられる。支柱穴も判然としないが、2本の可能性が高い。床面の一部に硬化した部分がみられた。

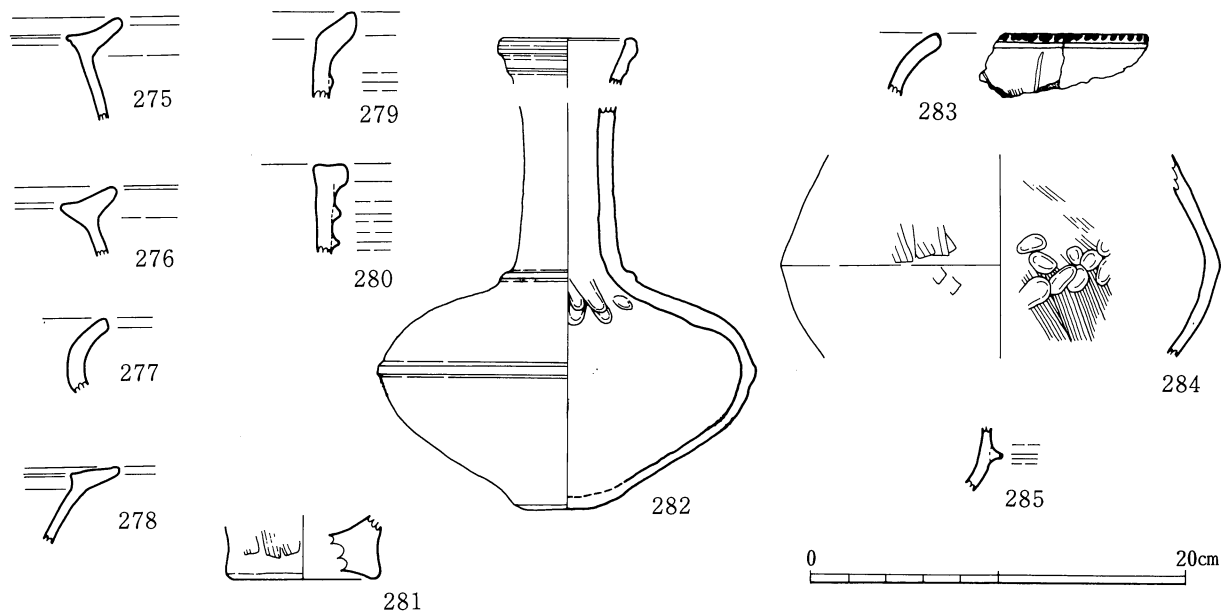
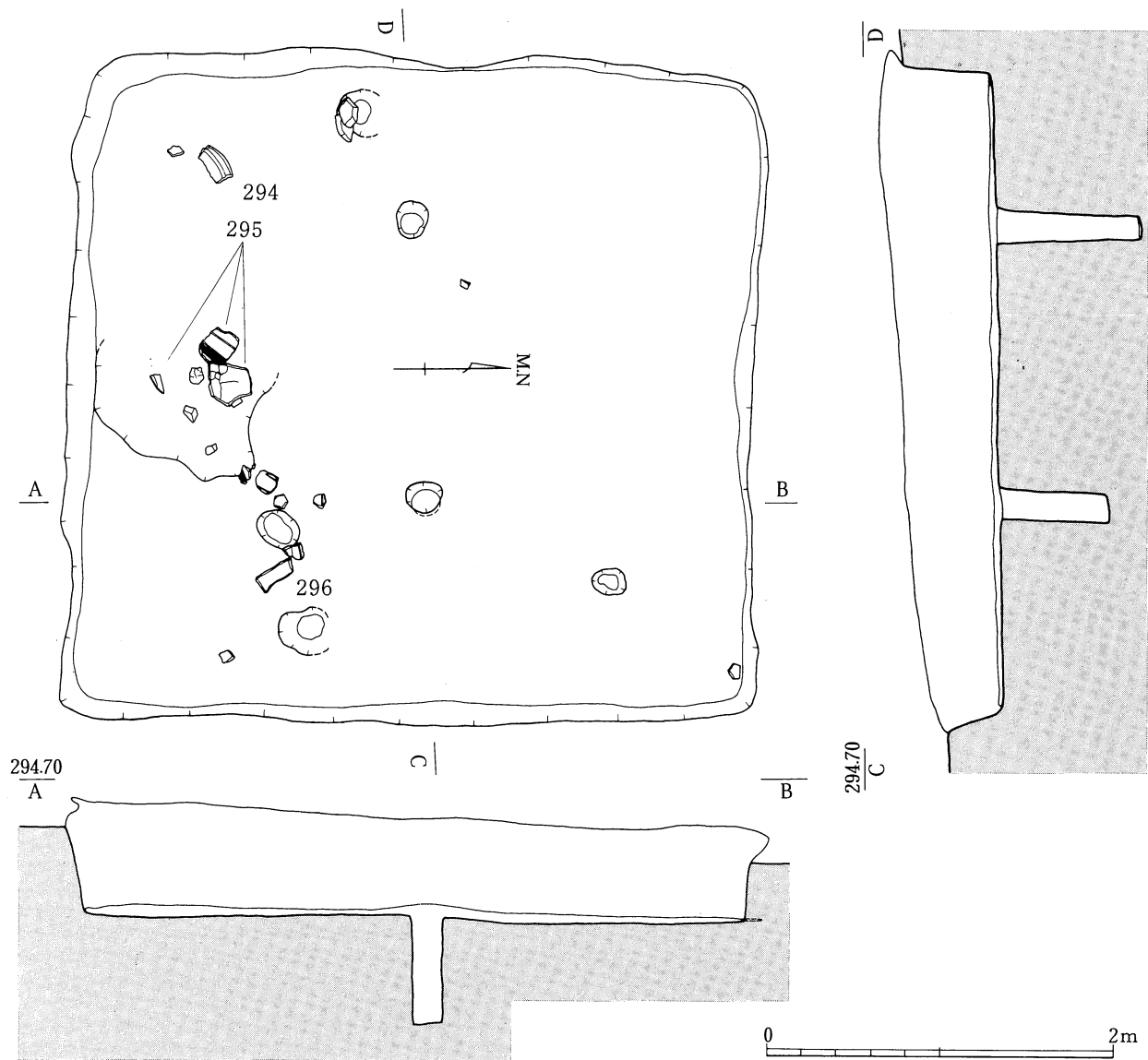
遺物（第42図）

遺物は少なく、床面付近からの出土はほとんどない。

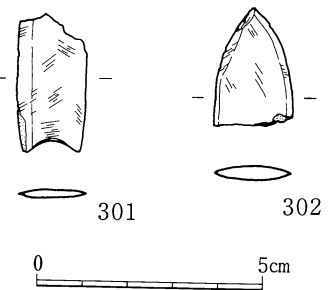
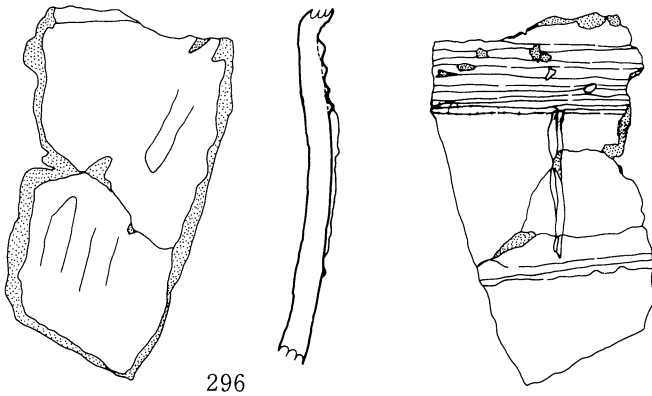
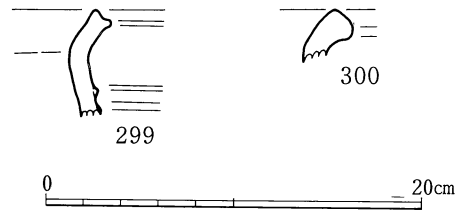
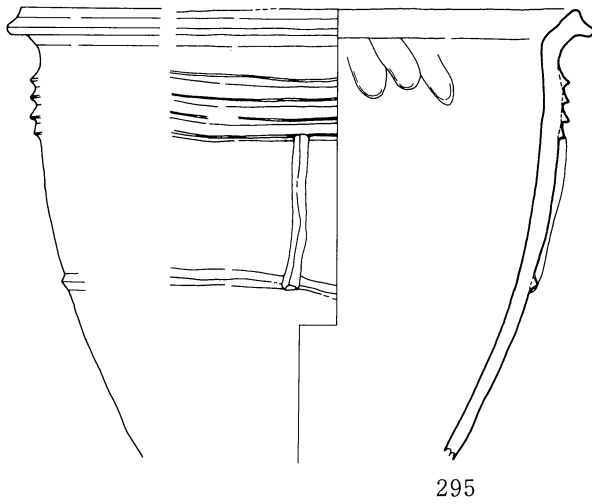
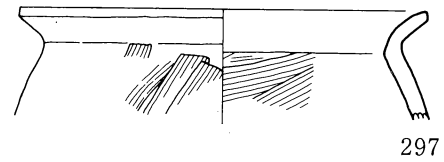
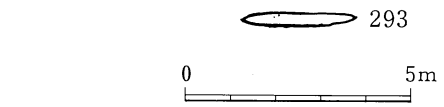
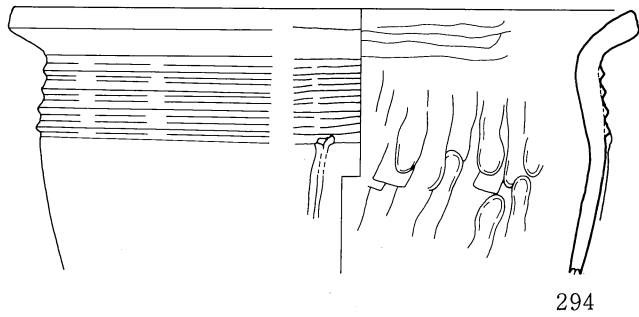
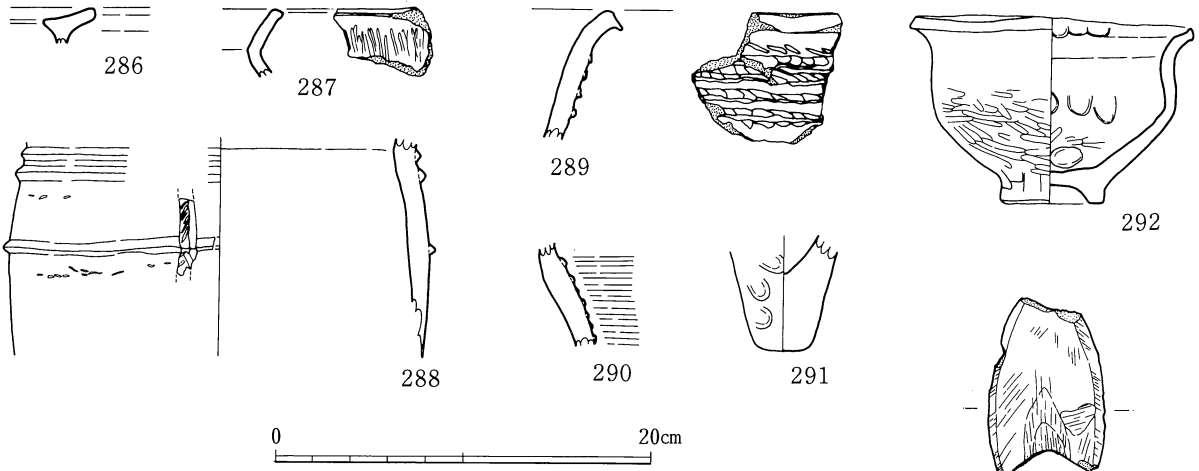
312・313は口縁部が内側に張り出す甕である。314はくの字状に屈曲する甕の口縁部である。315は壺の胴部で1条の刻目突帯が巡る。316は甕の脚台部で底部内面に炭化物の付着がみられる。317～319は粗製甕である。319は縦方向の突帯が横方向の突帯から下に飛び出している。320・321は磨製石鏃である。

26号住居址（第41図）

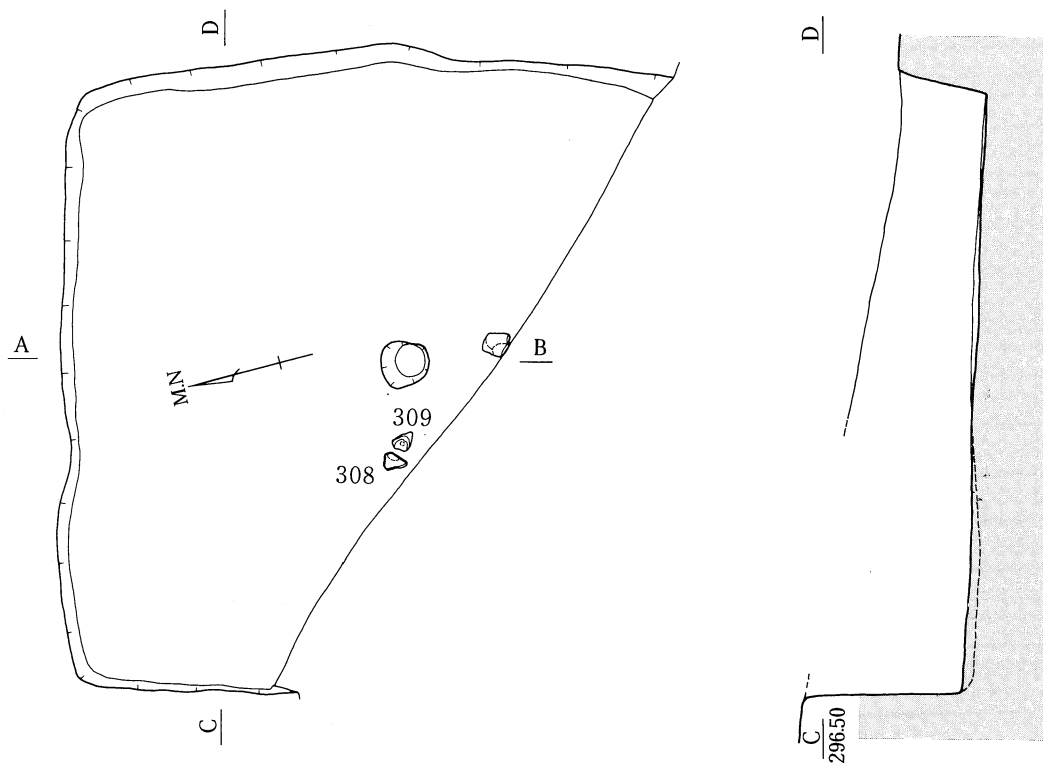
コーナー部分のみ確認された住居で、25号住居を切る。ほとんどが未調整のため平面プランや規模、支柱穴などは知り得ないが、断面の状況から床面に異なる高さの平坦面がみられることから、17号住居と類似したベッド状の遺構が存在する可能性が高い。遺物は出土していない。



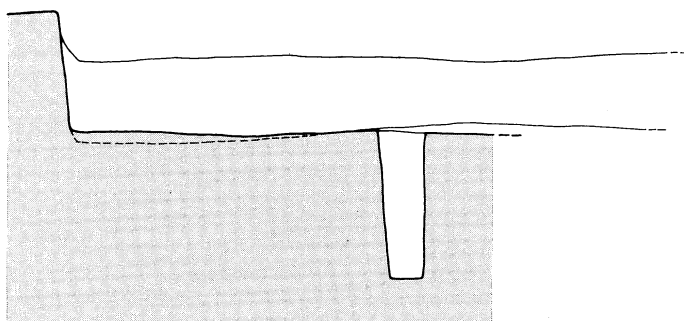
第38図 23号住居および21号住居出土遺物実測図



第39图 22·23号住居出土遺物実測図

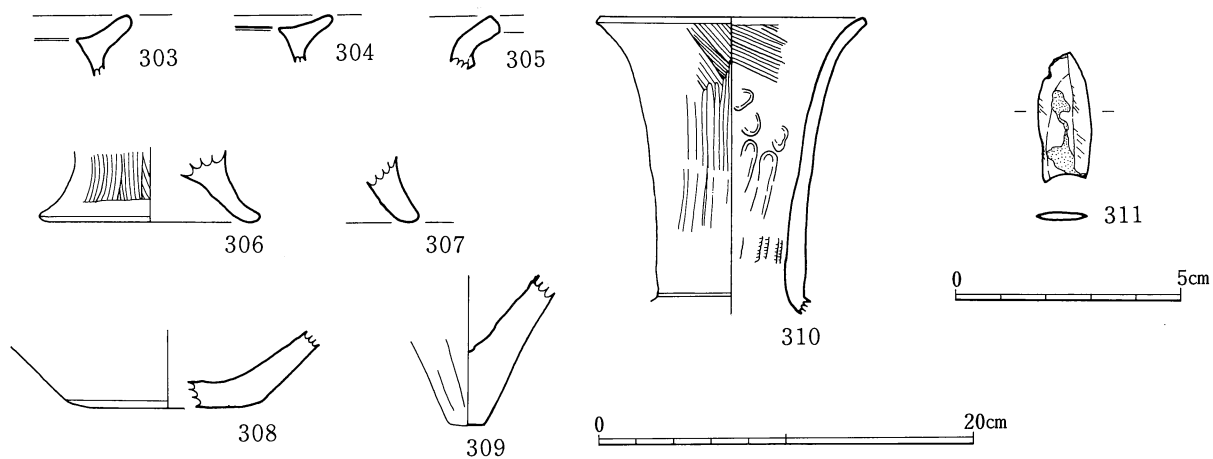


A
296.50

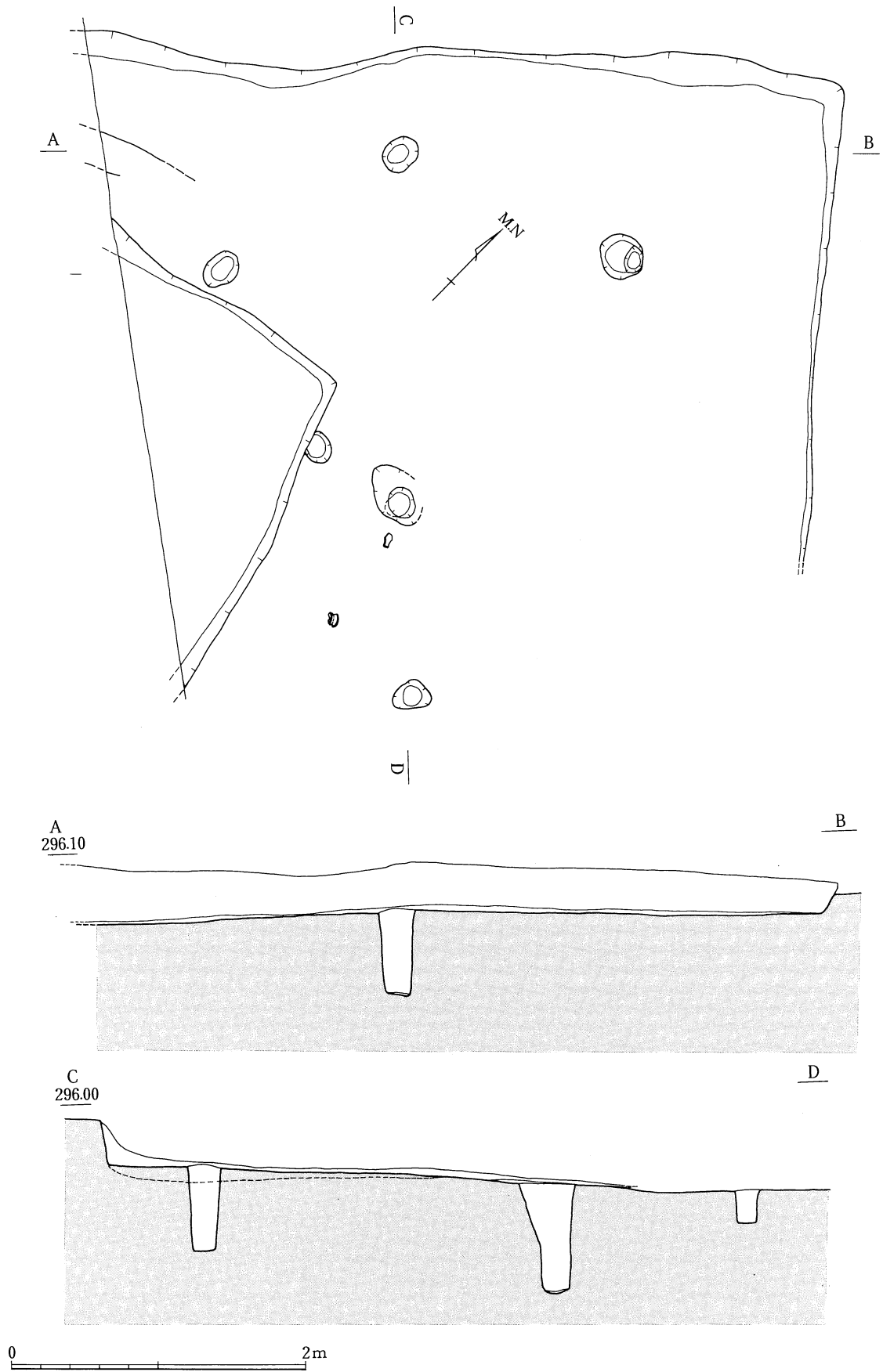


B

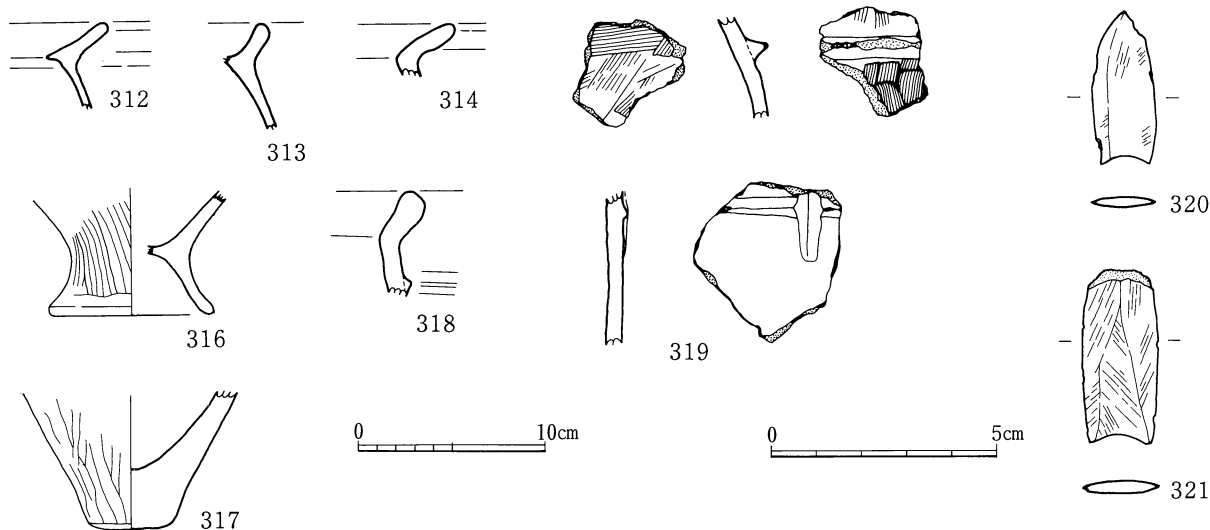
0 2m



第40図 24号住居および出土遺物実測図



第 41 图 25 · 26 号住居实测图



第42図 25号住居出土遺物実測図

2 遺構外出土の遺物

土器

322・323は粗製甕の口縁部である。324～326・330は口唇部の外端と突帯に刻目をもつ甕である。325には口縁部と突帯間に穿孔がみられる。327は口縁部が内面に張り出す甕で、口縁部の下に1条の三角突帯がみられる。328・329はかなり外傾する口縁部で共に三角突帯をもち、329には刻目がみられる。器形は不明だが、鉢形の可能性がある。331は口縁部とその下に突帯を貼り付けた甕である。332はくの字状に屈曲した口縁部で、口唇端部がやや張り出す。これは339・340などいわゆる凹線文土器を意識したもののよう感じられる。333は玉縁状に肥厚した口縁部で、甕の可能性がある。334は壺の胴部で刻目突帯が1条巡る。335はくの字状に屈曲し、口縁部が水平方向に延びる壺である。336は稜をもって強く屈曲し、外反しながら大きく開く口縁部で、高坏もしくは鉢形土器の可能性がある。337はいわゆる袋状口縁をもつ壺である。338も壺で頸部付近に三角突帯がみられる。339～341は瀬戸内地方と強い関連を持つとみられる凹線文土器の壺である。340には円形浮文もみられる。342は鋏先状を呈する壺の口縁部である。343は口唇部に刺突文が巡る口縁部で壺の可能性が考えられる。344は壺の肩部で工具による連続刺突が施されている。345は短く直立する口縁部をもつ壺で口唇部は丸く仕上げられている。346はいわゆる複合口縁壺で外面に櫛描波状文がみられる。347は粗製甕の底部である。348は壺の底部とみられ、外底面はハケ目調整により丁寧に仕上げられている。353～355も壺の底部か。349・350は高坏の坏部と脚柱部である。351は内湾し口唇部がやや尖り気味の口縁部で、碗状のものか。352は内湾しながら内傾する鉢状の土器で、口縁部下に外面から施された2つの焼成前穿孔がみられる。356～361は丹塗りが施された壺である。356～358は口縁部内面まで丹塗りである。360・361はいわゆる免田式長頸壺の肩部で、重弧文が施されている。

石器

該期の石器としては磨製石鋏および未製品が圧倒的に多く、その他に石包丁や局部磨製石斧などが出

土している。ここでは住居址出土のものを含めて磨製石鏃の分類を行い、その他の器種については個別に扱う。

磨製石鏃

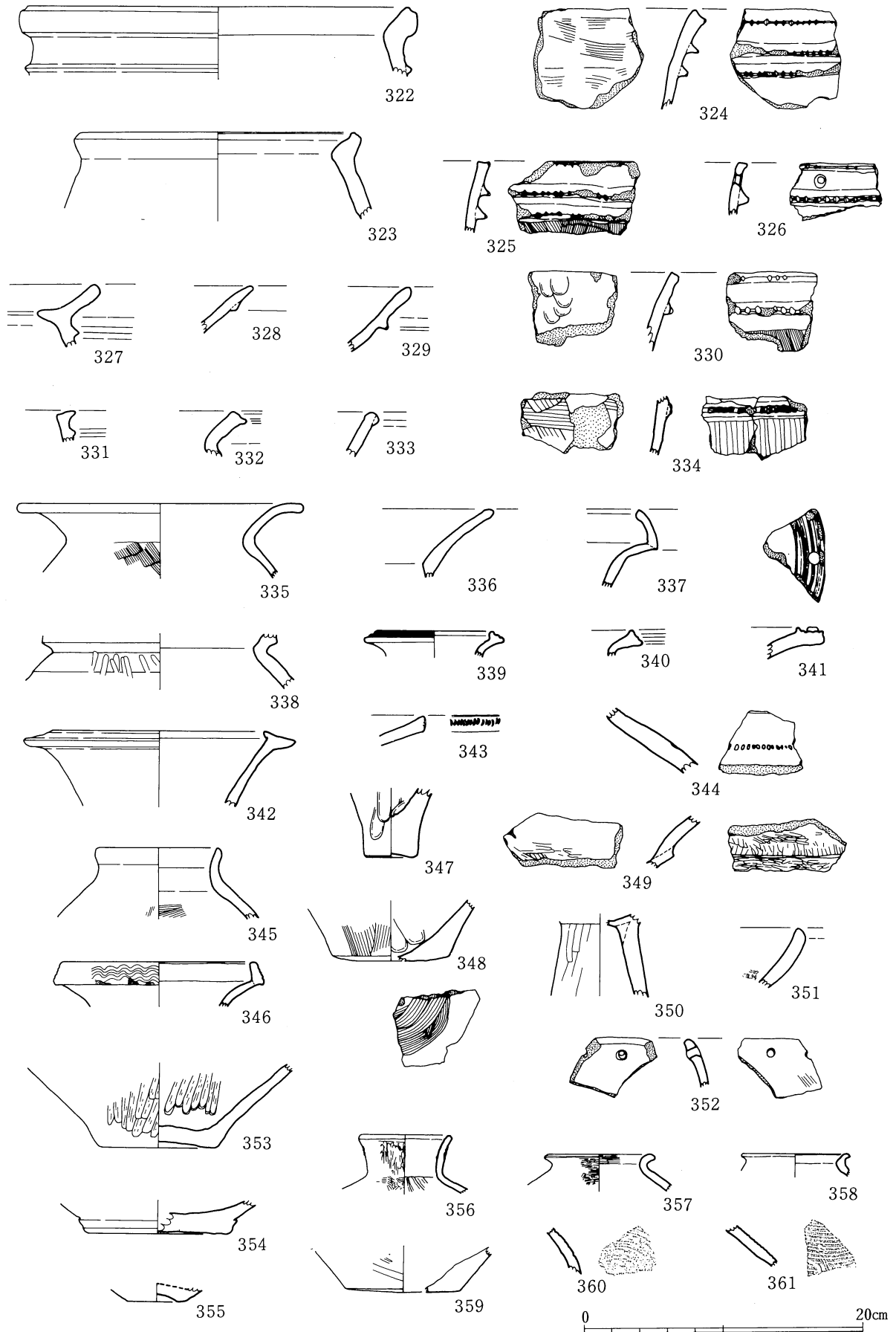
磨製石鏃は欠損品も含めて製品 145 点が出土している。また、擦痕を有する素材剥片 8 点、若干の整形を伴う素材剥片 63 点も出土している。ここで分類の対象とするものは、ある程度形状が把握できる製品 54 点（報告書掲載は 37 点）である。

平面形態では二等辺三角形（Ⅰ類）と砲弾形（Ⅱ類）の 2 種に大別できる。Ⅰ類は幅と長さの比からⅠ a 類（幅：長＝1：1.5 程度）、Ⅰ b 類（幅：長＝1：2 程度）、Ⅰ c 類（幅：長＝1：2.5 以上）の 3 種に細分可能である。Ⅱ類では最大幅の位置からⅡ a 類（中位よりも上に最大幅をもつもの）、Ⅱ b 類（中位よりも下に最大幅をもつもの）の 2 種に細分できる。

基部の構造では 1 類（強く窪むもの）、2 類（やや窪むもの）、3 類（平坦なもの）、4 類（有茎のもの）の 4 種に分けられる。この 2 つの要素を組み合わせると 20 に分類できるが、実際に遺物が該当したのは 14 種であった。内容は以下のとおり。

分類	遺物番号	未掲載	合計	備考
Ⅰ a-1	367	0	1	
Ⅰ a-2	259、370	2	4	
Ⅰ a-3	143、366、371	1	4	
Ⅰ b-1	210、293、365	0	3	
Ⅰ b-2	141、142	2	4	
Ⅰ b-3	169、249、369	1	3	
Ⅰ b-4	373	0	1	石材も異なる
Ⅰ c-1	168	0	1	有茎は 1 点のみ
Ⅱ a-1	208、211、301、362、372、321	1	7	
Ⅱ a-2	140、150、157、248、311、320	3	10	
Ⅱ a-3	158、364	1	3	
Ⅱ b-1	261	0	1	
Ⅱ b-2	289、209、260	4	7	
Ⅱ b-3	97、170	2	4	

以上の結果、平面形態ではⅠ類が 40 %、Ⅱ類が 60 % とややⅡ類が多い。基部の構造では 2 類が 48 % を占め、1 類と合わせると窪むものが 70 % を越える。Ⅰ類では基部が窪むもの（1・2 類）と平坦なもの（3 類）の割合がほぼ等しいのに対して、Ⅱ類では圧倒的に基部の窪むものが多い。大きさや石材との関係では、今回の分類において相関関係を見出すことはできなかったが、168 は形状がかなり特異であり、石材も異なる。また、有茎のものは 373 の 1 点のみであった。

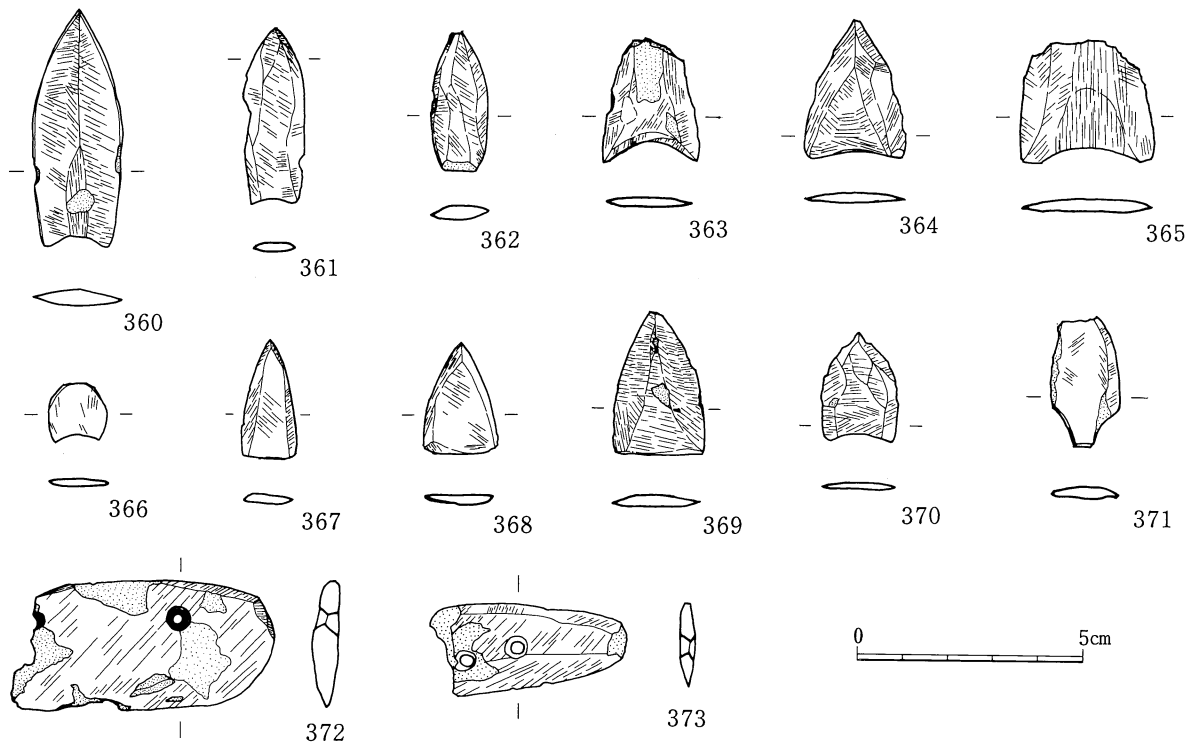


第43图 遺構外出土遺物実測図(1)

この他、分類はなしかつたが、368は非常に小形で全体に丸みを帯びた形状を呈するもので特殊である。

石包丁

374・375は石包丁である。374は3cmほどの間隔を置いて2つの穿孔がみられる。375は細い小形のもので1cmほどの間隔をおいて2つの穿孔がみられる。



第44図 遺構外出土遺物実測図(2)

第3表 南平第3遺跡出土土器観察表(1)

遺物 番号	種別	器種	部位	出土 地点	法 量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
80	弥生土器	甕	口縁	1号住居				ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	3mm以下の灰色・白色・黒色の砂粒及び1.5mm以下の金色の光沢粒を含む	口縁部に凹線状のくぼみ
81	弥生土器	壺	口縁	1号住居				ナデ・スス付着	ナデ	にぶい黄橙	橙	1.5mm以下の白色・黒色・茶色粒を含む	
82	弥生土器	甕	胴部	1号住居				ハケ状工具による施文 ナデ	ナデ	にぶい褐	褐灰	1.5mm以下の乳白色・黒色・茶褐色の砂粒及び2mm以下の黒色光沢粒を含む	
83	弥生土器	壺	肩部	1号住居				ナデ・突帯	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の茶色・黒色・白色の砂粒及び1mm以下の無色光沢粒を含む	
84	弥生土器	甕	口縁	2号住居				ナデ・スス付着	ナデ	橙	黄橙	精良	黒髪式
85	弥生土器	壺	胴部	2号住居				ハケ目・キザミ目突帯	ナデ	にぶい黄橙	明褐	1mm以下の乳白・灰白砂粒及び無色光沢粒を含む	
86	弥生土器	甕	底部	2号住居		(10.6)		ナデ・ハケ目 外底に剝離材(砂)付着	ハケ目	明黄褐	橙	3mm以下の黒色	
87	弥生土器	壺	口縁	2号住居				ナデ	ナデ・円形浮文	橙	灰黄褐	2.5mm以下の乳白色の砂粒	
88	弥生土器	甕	口縁~肩部	3号住居	(30.0)			ナデ・スス付着	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	3mm以下の灰白・黄褐の砂粒及び無色光沢粒を含む	
89	弥生土器	甕	口縁~肩部	3号住居	(25.2)			ナデ・スス付着	ナデ・ハケ目	にぶい黄	浅黄	2mm以下の灰白・褐・黒褐の砂粒	
90	弥生土器	甕	口縁	3号住居				ナデ・ハケ目 キザミ目突帯	ナデ・ハケ目	にぶい黄橙	にぶい橙	2mm以下の灰白砂粒	
91	弥生土器	甕	口縁	3号住居				ナデ・突帯	ナデ・削り	にぶい褐	にぶい灰黄褐	3.4mmの灰色・黒い1mm以下の透明・灰色・暗褐色の砂粒及び無色光沢粒を含む	
92	弥生土器	壺	口縁	3号住居				ナデ	ナデ	にぶい黄	暗灰黄	3mm以下の淡黄色・灰白色・黒色・白色・茶色の砂粒	
93	弥生土器	壺	頸部付近	3号住居				ミガキ・突帯	ナデ	にぶい黄橙	浅黄	精良	
94	弥生土器	壺	胴部片	3号住居				ミガキ・ナデ キザミ目突帯	ナデ	にぶい黄	にぶい黄橙 にぶい黄	精良	
95	弥生土器		脚	3号住居		(14.7)		ミガキ・ナデ	ナデ	浅黄橙	褐灰	5mm以下の灰色・乳白色・茶色の砂粒	
96	弥生土器	壺	底部	3号住居		(8.0)		ナデ・スス付着	ナデ	にぶい黄橙	灰黄 黄灰	1mmの黒・赤褐・灰褐の砂粒	
99	弥生土器	甕	口縁	5号住居				ナデ・ハケ目 キザミ目突帯	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい褐	1mm以下の乳白色の砂粒	
100	弥生土器	甕	口縁	5号住居				ナデ	ナデ	浅黄	灰黄	1mm以下の乳白色・灰白の砂粒	黒髪式
101	弥生土器	甕	胴部片	5号住居				ナデ・キザミ目突帯	ナデ	灰黄褐	褐	1mm以下の乳白色・灰白・砂粒 透明の光沢粒を含む	工字突帯
102	弥生土器	壺	胴部片	5号住居				ナデ・ハケ目 突帯	ナデ	浅黄	灰	1mm以下の乳白色の砂粒	
103	弥生土器	壺	口縁~頸部	4号住居	(20.8)			ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	明黄褐	橙	3mm以下の黒色・1mm以下の乳白色の砂粒	
104	弥生土器	壺	頸部	10・11層				ナデ・ハケ目 突帯 張付け浮文	ナデ・ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm乳白色・3mm以下の茶褐色・灰白色・淡黄色砂粒	
105	弥生土器	壺	肩部	4号住居				ナデ・突帯 張付け浮文	ナデ	にぶい黄橙	暗灰黄	2mm以下の乳白色・灰白色・淡黄色・茶色の砂粒及び無色・微細な光沢粒を含む	
106	弥生土器	壺	頸部~胴部	4号住居 10・11層				ミガキ	ハケ目・ナデ	赤褐	にぶい黄橙	1mm以下の褐・灰白色の砂粒	丹塗
107	弥生土器	甕	底部	4号住居		(5)		ナデ	ナデ・炭化物付着	灰黄褐	橙	3mm以下の乳白色の砂粒及び2mm以下の透明粒を含む	
110	弥生土器	甕	口縁~胴部	6号住居	(27.3)			ナデ・キザミ突帯	ハケ目・ナデ	にぶい黄橙 褐灰	にぶい黄橙 褐灰	4mm以下の黄橙・褐・灰白の砂粒及び無色透明の光沢粒を含む	
111	弥生土器	甕	口縁	6号住居				ナデ・キザミ突帯	ハケ目・ナデ	にぶい黄橙	暗灰黄	2mm以下灰白色・乳白色・茶褐色の砂粒及び無色光沢粒を含む	
112	弥生土器	甕	口縁	6号住居				ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	4mm以下の灰白・褐の砂粒及び無色透明の光沢粒を含む	黒髪式
113	弥生土器	甕?	底部	6号住居		(5.6)		ナデ	ナデ	にぶい橙	黄灰	3mm以下の茶褐・灰褐・灰白褐の砂粒及び無色透明の光沢粒を含む	
114	弥生土器	甕	口縁~胴部	7号住居	(28.8)			ナデ・突帯	ナデ	にぶい橙	橙	3mm以下の黒色の砂粒及び2mm以下の透明粒を含む	工字突帯
115	弥生土器	甕	口縁~胴部	7号住居				ナデ・突帯	ナデ	黄褐	暗灰黄	2mm以下の黒色・砂粒	
116	弥生土器	甕	口縁	7号住居				ナデ・突帯	ナデ	黄灰	にぶい黄	2mm以下で灰白・褐の砂粒	
117	弥生土器	甕	口縁	7号住居				ナデ	ナデ・ハケ目	褐灰	灰黄褐	4mm以下で灰白・灰褐の砂粒及び黒色光沢粒を含む	
118	弥生土器	甕	口縁~肩部	7号住居				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰白・褐の砂粒及び無色透明粒を含む	
119	弥生土器	甕	脚付底部	7号住居		(10.8)		ナデ 外底に剝離材(砂)付着	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の灰白・灰褐・乳白・褐の砂粒	
120	弥生土器	甕	脚付底部	7号住居		(11.5)		ハケ目・ナデ 外底に剝離材(砂)付着	ナデ 内底に炭化物付着	にぶい橙	灰黄褐	4mm以下で灰白・灰褐・乳白褐の砂粒及び無色透明粒を含む	
121	弥生土器	甕	胴部~底部	7号住居		(2.9)		ナデ	ナデ	にぶい黄橙	オリーブ黒	4~2mmの灰白・灰褐・1mmの赤褐の砂粒及び透明光沢粒を含む	
122	弥生土器	壺	口縁~胴部	7号住居	(19.0)			ナデ・ハケ目 キザミ目	ナデ・ハケ目	橙	橙	1mm以下の乳白色・灰白の砂粒及び透明粒を含む	
123	弥生土器	壺	口縁	7号住居	(22.8)			ナデ・ハケ目・刺突文	ナデ・ハケ目 円形浮文	にぶい橙	にぶい橙	5mm以下の黄褐・灰白・乳白・褐の砂粒	
124	弥生土器	壺	口縁付近~頸部	7号住居				ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	明赤褐	明褐	8mm白い石 4mm以下の白色・乳白色・淡黄色・灰白・茶色の砂粒及び無色透明光沢粒を含む	
125	弥生土器	壺	口縁~肩部	7号住居	(18.6)			ナデ	ハケ目・ナデ	にぶい黄橙 暗灰黄	橙	3mm以下の茶色・黒色・灰白色の砂粒及び2mm以下の黒色・無色光沢粒を含む	

第4表 南平第3遺跡出土土器観察表(2)

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
126	弥生土器	壺	口縁~肩部	7号住居				ナデ・ハケ目	ナデ	橙	橙灰黄	2mm以下の淡黄色・黒色・白色・茶褐色の砂粒及び金色微細な光沢粒を含む	
127	弥生土器	壺	胴部片	7号住居				ナデ・ハケ目 キザミ目突帯	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1~2mmの灰白の砂粒	
128	弥生土器	壺	胴部	7号住居				ナデ・ハケ目 キザミ目突帯	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の白色・黒色・茶褐色の砂粒	
129	弥生土器	壺	胴部	7号住居				ナデ・ハケ目 突帯・張付浮文	ナデ	にぶい黄橙	橙	2mm以下の乳白色の砂粒	
130	弥生土器	壺	胴部	7号住居				ハケ目・ナデ 突帯	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	1cm位の灰白の石3ヶ3mm以下の灰白・乳白色・砂粒	
131	弥生土器	甕	口縁	7号住居				ナデ	ナデ	にぶい黄 黄灰	にぶい黄	2mm以下の乳白色・黒色・茶褐色の砂粒及び無色透明な光沢粒を含む	黒髪式
132	弥生土器	甕	口縁	7号住居				ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	1mm以下の黒褐・褐・乳白色・無色透明の砂粒	黒髪式
133	弥生土器	壺	胴部	7号住居				丁寧なナデ・ナデ 突帯	ナデ	にぶい橙	橙	4mm以下の乳白色の砂粒	
134	弥生土器	壺?	胴部	10・11層 4層				ナデ 櫛歯状工具による施文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の乳白色・灰色の砂粒	
135	弥生土器	壺?	底部	7号住居		(10.6)		ハケ目・ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	6mm以下の灰白・灰褐の石及び無色透明の光沢粒を含む	
136	弥生土器	壺?	底部	7号住居		(9.8)		ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	3mm以下の黒褐・灰白の砂粒及び無色・黒色の光沢粒を含む	
137	弥生土器	壺?	底部	7号住居		(4.7)		ハケ目・ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄	2mm以下で灰白・黒褐・黄褐色の砂粒	
138	弥生土器	甕?	底部	7号住居 9層		(4.7)		ハケ目・ナデ	ナデ	浅黄	明黄褐	2.3mmの灰白・橙の砂粒	
144	弥生土器	甕	口縁	8号住居				ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	1mm以下の乳白色の砂粒	黒髪式
145	弥生土器	甕?	口縁	8号住居				ナデ	ナデ	暗灰黄	暗灰黄	2mm以下の乳白色・灰白の砂粒	
146	弥生土器	甕?	胴部	8号住居				櫛歯状工具による施文 ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄	1mm以下の灰褐・赤褐の砂粒	
147	弥生土器	壺	胴部	8号住居				ナデ・突帯	ナデ	にぶい赤褐	暗灰黄	4mm以下の茶褐色・乳白色・灰白色・黒色の砂粒及び1.5mm以下黒色光沢粒	
148	弥生土器	壺?	底部	8号住居		(4.4)		丁寧なナデ・ナデ	工具によるナデ	にぶい褐	黒褐	2mm以下の白色・黒色・乳白色・茶褐色の砂粒及び無色透明の微細な光沢粒	
149	弥生土器	高坏?	脚部	8号住居				ミガキ・ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mmの赤褐の砂粒	
151	弥生土器	甕	口縁	9号住居				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	2mm以下の乳白・褐色・無色透明の砂粒	黒髪式
152	弥生土器	壺	胴部	9号住居				ナデ・突帯	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒褐・黄褐の砂粒	
153	弥生土器	壺	口縁近・頸部	9号住居 12・13層				ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	橙	明黄褐	3mm以下の乳白色・茶色・黒色の砂粒及び1mm以下の無色透明に光る微粒子を含む	
154	弥生土器	壺	口縁	9号住居	(22.0)			ナデ・ハケ目・ 刺突文	ナデ・ハケ目・ 円形浮文	黄橙	黄橙	5mm以下の乳白色の砂粒を含む	
155	弥生土器	甕	脚付底部	9号住居				ハケ目・ 外底に剝離材(砂)付着	ナデ 内底に炭化物付着	にぶい黄橙 黄灰	にぶい黄橙 黄灰	2mm以下灰白色・黒色・淡黄色茶褐色の砂粒を含む	
156	弥生土器	壺	底部	9号住居		(6.9)		ハケ目	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	2.5mm以下の灰白・褐・無色透明黒く光沢のある砂粒を含む	
159	弥生土器	甕	口縁~胴部	10号・11号・ 18号住居	(22.4)			ハケ目・ナデ スス付着	ハケ目・ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	2mm以下の灰白・乳白色の砂粒及び金色や透明に光る砂粒を含む	
160	弥生土器	甕	口縁~胴部	10号住居				ナデ・突帯	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	2mm以下の透明・半透明・黒色の光沢のある砂粒及び2mm以下の乳白色・灰・黒の砂粒を含む	
161	弥生土器	甕	口縁	10号住居				ナデ	ナデ	黒褐	暗灰黄	3mm以下の黒・灰白の砂粒を少し含む	
162	弥生土器	甕	胴部	10号住居				ナデ・キザミ目 突帯	ナデ	灰黄褐	にぶい褐	1mm以下の金・黒・透明に光る砂粒及び1.5mm以下の灰白透明な砂粒を含む	工字突帯
163	弥生土器	甕	胴部	10号・ 17号住居				ナデ・ハケ目 キザミ目突帯	ミガキ?	明赤褐 にぶい褐	灰褐 明黄褐	1~3mmの灰・茶・淡黄・乳白色の砂粒を含む	
164	弥生土器	壺	口縁~頸部	10号住居 10・11・12・13層	(16.0)			ナデ・ハケ目 キザミ目突帯・キザミ目	ナデ・キザミ目	にぶい黄橙	浅黄	1mm以下の黒・乳白色・灰褐の砂粒を含む	
165	弥生土器	壺	頸部~肩部	10号住居				ハケ目・張付浮文	ナデ	にぶい黄褐	浅黄	1~3mmの灰白・黄褐の砂粒を含む	
166	弥生土器	甕?	底部	10号住居		(5.8)		ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	5mm以下で黄褐・灰褐・黒く光沢のある砂粒を含む	
171	弥生土器	甕	口縁~胴部	11・12・16・17・18号住居 9・10・11・12・13層	(25.0)			ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	にぶい橙 にぶい黄褐	にぶい黄橙	2mm以下の褐・黒褐・4mm以下の灰白・灰色の砂粒及び2mm以下の透明黒色光沢粒を含む	174と同一
172	弥生土器	甕	口縁~胴部	11号・ 13号住居	(24.7)			ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	黒褐 にぶい褐	橙 黒褐	1~3mmの赤・黒色の砂粒及び1mm以下の透明黒色光沢粒を含む	
173	弥生土器	甕	口縁	11号住居				ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	明赤褐	明赤褐 灰黄褐	2mm以下の褐・灰黄・灰白色の砂粒を少し含む	
174	弥生土器	甕	胴部~底部	11号・17号 18号住居				ハケ目 外底に剝離材(砂)付着	ハケ目・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の灰白の砂粒・3mm以下の褐・黒色の砂粒・0.5mm以下の透明黒色光沢粒を含む	
175	弥生土器	甕	口縁~胴部	12号住居 12・13層				ナデ・キザミ目突帯 キザミ目	ハケ目後ナデ	黄褐 にぶい褐	明赤褐 にぶい褐	8mm以下のにぶい黄褐の石及び2mm以下の明褐の砂粒を含む	
176	弥生土器	甕	口縁近~頸部	12号住居				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	0.5mm以下の無色透明の砂粒を多く含む灰白・1mm以下の褐色・灰白・黒く光る砂粒を少し含む	黒髪式
177	弥生土器	甕	口縁	12号住居				ナデ	ナデ	黒褐	にぶい黄褐	黒・茶・黄灰の砂粒及び無色・黒色・金色の光沢粒を含む	
178	弥生土器	壺	口縁	12号住居				ナデ	ナデ・ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の褐色・灰白・黒く光る砂粒及び0.5mm以下の無色透明多く含む	
179	弥生土器	壺	胴部	12号住居				ナデ・キザミ目突帯	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	灰・黒・茶の砂粒及び透明・半透明・黒色光沢粒を含む	

第5表 南平第3遺跡出土土器観察表(3)

遺物 番号	種別	器種	部位	出土 地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考	
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
180	弥生土器	壺	底部	12号住居		(7.3)		ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄橙	2mm以下の灰白・浅黄橙・褐灰・透明光沢・黒色光沢の砂粒を含む		
182	弥生土器	甕	口縁~胴部	13号住居	(24.4)			ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	3.5mm以下の灰白・灰褐・明褐・透明光沢の砂粒を含む		
183	弥生土器	壺	胴部	13号住居				ハケ目・ナデ キザミ目突帯	ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	暗灰黄	2mm以下の灰白色及び1mm以下の浅黄・黒・褐色・光沢の砂粒を含む		
184	弥生土器	甕	脚	13号住居 21号住居		(8.8)		ハケ目・ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の柱状に黒く光る砂粒及び灰白・無色透明に光る砂粒を含む		
185	弥生土器	甕	口縁~胴部	14号住居				ハケ目・ナデ キザミ目突帯	ナデ		橙	橙	2mm以下の乳白・灰黒色及び微細な透明光沢の砂粒を含む	
186	弥生土器	甕?	口縁	14号住居				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の白・灰白色及び透明光沢の砂粒を含む		
187	弥生土器	甕	胴部	15号住居				ハケ目	ハケ目・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の白・灰白・褐色の砂粒を含む		
188	弥生土器	壺	胴部	15号住居				ナデ・キザミ目突帯	ナデ		橙	橙	2mm以下の褐・赤褐・黒褐色の砂粒を含む	
190	弥生土器	甕	口縁	16号住居				ナデ	ナデ	にぶい褐	灰褐	2.5mm以下のにぶい褐・灰白・灰・透明光沢・黒色光沢の砂粒を含む		
191	弥生土器	甕	胴部	16号住居				ナデ・突帯	ナデ		明褐	にぶい褐	3.5mm以下の橙・にぶい褐・灰白・透明光沢・黒色光沢の砂粒を含む	
192	弥生土器	壺	胴部	16号住居				ナデ・突帯	ナデ		明黄褐	暗灰黄	5mm以下の青・灰褐色の石及び3mm以下の灰白・灰黄・にぶい黄橙・透明光沢の砂粒を含む	
193	弥生土器	甕	口縁~胴部	17号住居	(36.0)			ナデ・突帯 スス附着	ナデ		橙・黒	橙・黒褐	8mm以下の乳白色の石及び3mm以下の灰白・黒色光沢の砂粒を含む	工字突帯
194	弥生土器	甕	口縁~胴部	12・13層	(25.4)			ナデ・櫛歯状工具による施文・スス附着	ナデ		橙	にぶい褐	3mm以下の灰・灰・乳白色及び透明・半透明・黒色光沢の砂粒を含む	
195	弥生土器	甕	口縁	17号住居				ナデ	ナデ		灰黄褐	明赤褐	4mm以下の黒・灰白・灰褐色及び2mm以下の暗赤・乳白・黒色光沢・透明光沢の砂粒を含む	
196	弥生土器	甕	口縁	17号住居 21号住居				ナデ	ナデ		浅黄 黄灰	浅黄	2mm以下の褐灰・灰褐・灰白及び透明光沢・黒色光沢の砂粒を含む	黒髪式
197	弥生土器	甕	口縁	17号住居				ナデ	ナデ		浅黄	灰黄	2mm以下の灰白・乳白・浅黄・灰褐・褐灰色及び透明光沢の砂粒を含む	黒髪式
198	弥生土器	甕	口縁	17号住居				ナデ	ナデ		灰白	灰	1mm以下の浅黄色及び光沢微細粒を含む	
199	弥生土器	甕	口縁	17号住居				ナデ	ナデ		灰黄	暗灰黄	2.5mm以下の灰・赤褐色及び1mm以下の無色透明光沢の砂粒を含む	
200	弥生土器	甕	口縁	17号住居				ナデ・スス附着 突帯	ナデ・ハケ目		灰黄褐	灰黄	3mm以下の白灰色及び1mm以下の無色透明光沢の砂粒を含む	
201	弥生土器	壺	口縁	17号住居				ナデ	ナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下灰褐・浅黄橙・褐灰・灰白色・透明光沢の砂粒を含む	
202	弥生土器	壺	口縁	17号住居				ナデ・キザミ目	ナデ		浅黄橙	淡黄	3mm以下の明赤褐・暗赤褐・灰白色及び1mm以下の黒灰色・黒色光沢の砂粒を含む	
203	弥生土器	壺	頸部	17号住居 12・13層				ナデ・ハケ目 突帯	ナデ		にぶい黄橙	にぶい橙	8mmの白色の石及び2.5mm以下の白・黄白・灰色の砂粒を含む	
204	弥生土器	壺	胴部	17号住居				ハケ目・ナデ キザミ目突帯	ハケ目・ナデ		にぶい橙	暗灰黄	1.5mm以下の白・黄白・灰白・褐色の砂粒を含む	
205	弥生土器	壺	胴部	17号住居				ハケ目後丁寧なナデ ナデ・突帯	ナデ		橙 にぶい黄橙	浅黄	1mm以下の白・灰白・灰・褐・赤褐色の砂粒を含む	
206	弥生土器	甕	胴部	17号住居				ナデ・線紋	ナデ		にぶい黄橙	暗灰黄	2mm以下の白・灰白・黄白色・柱状の黒色光沢及び1mm以下の透明光沢の砂粒を含む	
207	弥生土器	壺	胴部~底部	17号住居		(7.6)		ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ		浅黄	灰黄	3mm以下の白・灰色の砂粒を含む	赤色物附着
212	弥生土器	甕	口縁	18号住居				ナデ	ナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	2.5mm以下の灰白・灰・橙・透明光沢の砂粒を含む	黒髪式
213	弥生土器	甕	口縁	18号住居				ナデ	ナデ		浅黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰褐・灰黄・にぶい赤褐・灰白色・透明光沢・黒色光沢の砂粒を含む	黒髪式
214	弥生土器	甕	口縁~胴部	18号住居 19号住居	(30.6)			ハケ目・ナデ	ナデ		にぶい黄橙	にぶい黄 にぶい黄橙	5mm以下の乳白・半透明光沢の砂粒1mmの灰・乳白・黒色光沢・透明光沢の砂粒を含む	
215	弥生土器	甕	口縁~胴部	18号住居	(32.5)			ハケ目・ナデ	ナデ・ハケ目		橙・黒	明黄褐 黒	4mm以下の乳白色及び2mm以下の灰色・黒色光沢の砂粒を含む	
216	弥生土器	甕	口縁~胴部	18号住居 19号住居	(28.6)			ハケ目・ナデ	ナデ		にぶい黄橙 橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰白・灰褐色・褐灰色・透明光沢・黒色光沢の砂粒を含む	
217	弥生土器	甕	口縁~胴部	18号住居	(28.8)			ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ		浅黄 明黄褐	暗灰黄	3mm以下の灰白・黒・灰黄褐及び2mm以下の光沢の砂粒を含む	
218	弥生土器	甕	口縁~胴部	18号住居	(24.3)			ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ		褐灰 にぶい黄橙	浅黄 黄灰	3mm以下の白灰光沢及び1mm以下の黒色光沢の砂粒を含む	
219	弥生土器	甕	口縁~頸部	18号住居				ハケ目・ナデ	ナデ		にぶい黄褐	にぶい黄褐	1.5mm以下の乳白色及び4mm以下の白色光沢・透明光沢の砂粒を含む	
220	弥生土器	甕	口縁	18号住居				ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の灰白・赤褐・灰黄色・黒色光沢の砂粒を含む	
221	弥生土器	甕	底部	18号住居		(9.1)		ハケ目・ナデ	ナデ		にぶい黄橙	灰黄 にぶい黄橙	2mm以下の淡黄・乳白色・黒色光沢・半透明光沢の砂粒を含む	
222	弥生土器	甕	口縁~胴部	18号住居 19号住居	(37.8)			ナデ・突帯	ナデ		灰褐	にぶい赤褐	8mmの灰白の石及び3mm以下の灰・浅黄・無色透明・柱状の黒色光沢の砂粒を含む	工字突帯
223	弥生土器	甕	口縁	18号住居 19号住居				ナデ・突帯	ナデ		にぶい赤褐	灰黄褐	2mm以下の黒・灰色・黒色光沢の砂粒を含む	
224	弥生土器	甕	口縁	18号住居 12・13層				ナデ・突帯	ナデ		にぶい黄褐 黒褐	にぶい褐 灰黄褐	3mm以下の灰白・暗灰黄色・黒色光沢の砂粒を含む	
225	弥生土器	甕	口縁	18号住居				ナデ・突帯	ナデ		褐灰 にぶい黄橙	褐灰	1mm以下の褐色・透明光沢・黒色光沢の砂粒を含む	
226	弥生土器	甕	底部	18号住居		(4.2)		工具ナデ	ナデ		褐	黒	3mm以下の乳白・褐・茶色・黒色光沢及び1.5mm以下の透明光沢の砂粒を含む	
227	弥生土器	甕	底部	18号住居		(4.0)		工具ナデ	ナデ		灰黄褐	オリープ黒	2mm以下の淡黄・茶色・透明光沢・黒色光沢の砂粒を含む	

第6表 南平第3遺跡出土土器観察表(4)

遺物 番号	種別	器種	部位	出土 地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
228	弥生土器	壺	口縁	18号住居				ナデ	ナデ	橙	橙	3.5mm以下のにぶい赤褐及び2mm以下の黒・褐灰の砂粒を含む	
229	弥生土器	壺	口縁	18号住居				ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	2mm以下の灰白・黒色及び光沢の砂粒を含む	
230	弥生土器	壺	口縁~肩部	18号住居 21号住居	(20.4)			ハケ目・ナデ 突帯	ハケ目・ナデ	にぶい褐 浅黄	にぶい褐	4mm以下の黒色及び3mm以下の灰白の砂粒を含む	
231	弥生土器	壺	口縁~頸部	18号住居	(14.5)			ナデ・突帯	ナデ	灰黄褐	浅黄	2mm以下の乳白色・黒色光沢の砂粒を含む	
232	弥生土器	壺	口縁	18号住居				ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	暗灰黄	にぶい橙	4mmの乳白色及び2mm以下の茶・浅黄・灰・乳白色の砂粒を含む	
233	弥生土器	壺	口縁	18号住居				ナデ・キザミ目	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	2mm以下の灰色及び微細な黒色光沢の砂粒を含む	
234	弥生土器	壺	胴部	18号住居				ハケ目・ナデ・突帯	ナデ	にぶい橙 にぶい黄	にぶい黄	4mm以下の灰白・褐灰・浅黄の砂粒を含む	
235	弥生土器	壺	胴部	18号住居 21号住居				ハケ目・ナデ キザミ目突帯	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	2mm以下の灰褐・褐灰・白灰・透明光沢・黒色光沢の砂粒を含む	
236	弥生土器	壺	口縁	18号住居	(18.4)			ハケ目・ナデ・ミガキ	ミガキ・ナデ 円形浮文	にぶい橙 にぶい褐	橙	2mm以下の黒・褐・灰白・黒色光沢及び1mm以下の透明光沢の砂粒を含む	
237	弥生土器	壺	口縁~底部	18号住居	10.0	8.15	19.6	ハケ目・ナデ・ミガキ	ハケ目・指押さえ	にぶい橙 黒	にぶい橙 黒	9mmの乳白色の石及び3mm以下の黒・灰・赤褐・乳白・黒色光沢の砂粒を含む	ほぼ完形
238	弥生土器	壺	底部	18号住居		(15.8)		ハケ目・ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	2mm以下の茶・灰・乳白色・黒色光沢の砂粒を含む	
239	弥生土器	壺	底部	18号住居		(10.9)		ミガキ?・ナデ	ナデ	橙	橙	8mmの白色の石及び4mm以下の茶色の砂粒を含む	
240	弥生土器	壺	底部	18号住居		(8.5)		工具ナデ・ナデ	ナデ	橙	にぶい黄	2mm以下の茶・乳白色及び透明光沢の微砂粒を含む	
241	弥生土器	壺?	底部	18号住居		(6.4)		ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	5mm以下の灰色及び2mm以下の黄・褐色・黒色光沢の砂粒を含む	
242	弥生土器	壺?	底部	18号住居		(10.3)		ナデ	ナデ	にぶい黄	暗灰黄 にぶい黄	1mm以下の黒・褐色・光沢の砂粒を含む	
243	弥生土器	壺	口縁~胴部	18号住居	(24.2)			ハケ目・ナデ 突帯	ナデ・円形浮文	黄	明黄	1cmの灰色の石及び9mmの灰・乳白・黒色の石・微細な透明・半透明・黒色光沢の砂粒を含む	
244	弥生土器		脚 裾部	18号住居				ミガキ・ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙 にぶい黄	2.5mm以下の灰白色及び灰白の光沢の砂粒を含む	外面丹塗
245	弥生土器		脚 裾部	18号住居				ミガキ	ナデ	赤褐	にぶい褐 赤褐	0.5mm以下の明褐及び1mm以下の黒色光沢の砂粒を含む	胴の朝刈
250	弥生土器	甕	口縁	18号住居 19号住居				ナデ・キザミ目突帯	ナデ・ハケ目	にぶい黄	橙	1.5mm以下の灰白・灰色の砂粒を含む	
251	弥生土器	壺	口縁	19号住居				ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	微細な乳白・黒・褐色及び半透明・金色・黒色光沢の砂粒を含む	黒髪式
252	弥生土器	甕	口縁	19号住居				ナデ	ナデ	灰黄	灰黄	微細な乳白・黄・灰・褐色及び半透明・黒色光沢の砂粒を含む	黒髪式
253	弥生土器	甕	底部	19号住居		5.7		ハケ目・ナデ	ナデ	にぶい黄	橙	4mm以下の白・黄・黄・灰白色の砂粒	
254	弥生土器	甕	底部	19号住居 20号住居		(11)		ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	5mmの灰白色の石1.5mm以下の灰白・灰色の砂粒及び無色・黒色の光沢を含む	
255	弥生土器	甕	口縁	19号住居 20号住居				ナデ・突帯	ナデ・粗いナデ	黒褐 暗褐	にぶい褐	3mm以下の橙・灰白の砂粒及び黒色の光沢を含む	
256	弥生土器	甕	胴部	19号住居 20号住居				ナデ・突帯	ナデ・指押さえ	灰褐	にぶい褐	5mm以下の黄・灰白色の砂粒及び1mm程無色透明光沢を含む	工字突帯
257	弥生土器	甕	胴部	18号住居				ナデ・突帯文	ナデ	黒褐	灰黄	5mm以下の灰黄色・灰黄・灰白・褐色砂粒及び黒色・無色光沢を含む	
258	弥生土器	甕	底部	19号住居		3.05		丁寧なナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	1.5mm以下の白・褐・赤褐・黒褐色砂粒及び1.5mm以下黒色・透明光沢を含む	
262	弥生土器	甕	口縁	20号住居				ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	5mmの白い石・2mm以下の白・褐色の砂粒	黒髪式
263	弥生土器	甕	口縁~頸部	20号住居				ナデ	ナデ	明黄	明黄	1mm以下の黒・茶色・白色の砂粒及び1.5mm以下の金色光沢を含む	黒髪式
264	弥生土器	甕	底部	20号住居		(10.5)		ハケ目・ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	4mmの以下の灰白砂粒及び1mm以下の無色透明光沢の粒を含む	
265	弥生土器	壺	肩部	20号住居				ナデ・突帯	ハケ目・ナデ	浅黄 にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の浅黄・灰白の砂粒及び1mm以下の黒・金・光沢を含む	
266	弥生土器	壺	胴部	20号住居				ナデ・突帯	ナデ	橙 褐灰	褐灰	3mm以下の灰黄色・灰白色・灰褐色の砂粒及び無色透明・黒色光沢を含む	
267	弥生土器	壺	胴部	20号住居 13層				ハケ目・ナデ キザミ目突帯	ハケ目・ナデ	褐	にぶい褐	1mm以下の黄・灰・黒色の砂粒及び透明・半透明の微細な光沢を含む	
268	弥生土器	甕	口縁	20号住居				ナデ・突帯	ナデ	褐 灰黄	にぶい黄 褐灰	6mmの灰白色の石及び1mm以下の灰黄・褐色・黒色光沢を含む	
269	弥生土器	甕	口縁	20号住居				ナデ・突帯	ナデ	にぶい黄	灰黄	2mm以下の黒・灰白色の砂粒及び2mm以下の黒色光沢を含む	
270	弥生土器	壺	胴部	20号住居				ナデ・突帯 張付け浮文	ナデ	にぶい黄	灰白	2mm以下の灰白砂粒及び1mm以下の黄・黒・無色透明光沢を含む	
271	弥生土器	壺	胴部	20号住居				ハケ目・ナデ・突帯 張付け浮文	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	4mmの以下の灰白の砂粒及び2mm以下の黒色・無色透明の光沢を含む	
272	弥生土器	壺	頸部~胴部	20号住居				ナデ・重孤文?	ナデ	にぶい橙	灰黄	7mmの灰白色の石5mm以下の灰白色・茶色の砂粒及び透明光沢を含む	
273	弥生土器	甕	胴部	20号住居				ナデ・突帯	ナデ	黄	灰黄	1~4mmの淡黄・茶・灰・乳白色の砂粒及び半透明・黒色光沢を含む	
274	弥生土器	甕	底部	20号住居		(2.6)		ナデ	ナデ	にぶい褐	灰褐	6mmの灰白の石及び1mm以下の黒色微細な光沢を含む	
275	弥生土器	甕	口縁	21号住居				ナデ	ナデ	にぶい黄	浅黄	4.5mm以下褐・灰白の砂粒及び1mm以下の黒・褐色・黒色光沢を含む	黒髪式
276	弥生土器	甕	口縁	21号住居				ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	4mm以下の灰白の砂粒	黒髪式

第7表 南平第3遺跡出土土器観察表(5)

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
277	弥生土器	壺	口縁	21号住居				ナデ	ナデ	橙	橙	3mm以下の褐色・黒色の砂粒	
278	弥生土器	壺	口縁	21号住居				ハケ目・ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	灰色の砂粒及び1mm以下の褐色・にぶい橙色透明・黒色光沢粒を含む	
279	弥生土器	甕	口縁	21号住居				ナデ・突帯	ナデ	黄褐	にぶい黄橙	8mm以下の灰黄褐色の石・黒・灰白色の砂粒及び黒色・白色の光沢粒を含む	
280	弥生土器	甕	口縁	21号住居				ナデ・突帯	ナデ	にぶい褐 黒褐	オリーフ褐	6~4mmの褐色の石2mm以下の灰白・暗灰黄色の砂粒及び黒色光沢粒を含む	
281	弥生土器	甕?	底部	21号住居	(8.3)			ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰白砂粒及び1.5mm以下の黒色・無色透明光沢粒を含む	
282	弥生土器	長頸壺	口縁~胴部	21号住居 18号住居	(7.2)	(5.25)		ミガキ・突帯	ナデ・指押さえ	にぶい赤褐 黄褐	灰褐	2mmの浅黄色の砂粒及び1mm以下の黒色・無色微細な光沢粒を含む	丹塗
283	弥生土器	壺	口縁	21号住居 13層				ハケ目後ナデ キザミ目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰白色・灰褐色・褐色・金雲母の砂粒及び黒色・透明光沢粒を含む	
284	弥生土器	壺	胴部	21号住居				ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ 指押さえ	橙 にぶい黄橙	橙	1~2mm以下の茶・灰・褐・乳白色の砂粒及び透明・黒色・光沢粒を含む	
285	弥生土器	壺	胴部	21号住居				ハケ目・ナデ キザミ目突帯	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄	1mmの褐色の砂粒及び光沢粒を含む	
286	弥生土器	甕	口縁	22号住居				ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄	1mm以下の乳白色の砂粒及び1~3mmの半透明光沢粒を含む	黒髪式
287	弥生土器	甕?	口縁	22号住居				ハケ目・ナデ	ナデ	にぶい褐 にぶい褐	褐灰 にぶい褐	5mm以下の乳白色・褐色・灰色の砂粒及び透明・黒色・微細な光沢粒を含む	
288	弥生土器	甕	頸部~胴部	21号住居 22号住居				ナデ・突帯	ナデ	にぶい橙 にぶい橙	にぶい黄橙	3.5mm以下の褐色・灰白の砂粒及び1mm以下の透明光沢粒を含む	工字突帯
289	弥生土器	甕	口縁~胴部	22号住居				ナデ・突帯	ナデ	灰褐 暗灰黄	にぶい褐 褐	3mm以下の灰白・褐灰の砂粒及び2mm以下の黒色・透明光沢粒を含む	
290	弥生土器	甕	胴部	22号住居				ナデ・突帯	ナデ	明赤褐 明黄褐	明黄褐 にぶい黄褐	5mm以下の灰白の石・2mm以下の灰白・褐灰の砂粒及び黒色・透明光沢粒を含む	
291	弥生土器	甕	底部	22号住居		(2.6)		ナデ	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	5~6mmの暗褐色・黄褐色の石・1~2.5mmの灰・暗褐色・乳白色の砂粒及び黒色・無色光沢粒を含む	
292	弥生土器	脚台付鉢	口縁~底部	22号住居	(15.2)	(5.51)	(10.1)	ナデ・ミガキ スス付着	ナデ・指押さえ	浅黄 黒褐	黄灰	5.5mmの褐色の石3.5mm以下の灰色・褐灰色・赤褐色の砂粒及び黒色・透明光沢粒を含む	ほぼ完形
294	弥生土器	甕	口縁~胴部	23号住居	(33.6)			ナデ・突帯	ナデ	にぶい赤褐 にぶい黄橙	にぶい赤褐 にぶい黄橙	5mm灰白・褐色の石3mm以下の灰白・黒褐色の砂粒及び黒色・透明光沢粒を含む	工字突帯
295	弥生土器	甕	口縁~胴部	23号住居 13層	(31.2)			ナデ・突帯	ナデ	褐	にぶい褐	6mm以下の褐色・灰・黒・乳白色の石透明・半透明・黒色微細な光沢粒を含む	ク
296	弥生土器	甕	口縁~胴部	23号住居				ナデ・突帯	ナデ	にぶい橙	灰黄褐 黒褐	5mm以下の灰白・褐灰の石3mm以下の黒色・白色光沢粒を含む	ク
297	弥生土器	甕	口縁	23号住居	(21.8)			ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	2mm以下の灰白・褐色の砂粒	
298	弥生土器	甕	口縁	23号住居				ナデ・キザミ目突帯	ナデ	にぶい赤褐 にぶい橙	橙	灰・灰黄・褐色・乳白色の砂粒及び光沢粒を含む	
299	弥生土器	甕	口縁	23号住居				ナデ・突帯	ナデ	黒褐	暗灰黄	2mm以下の暗灰黄・黒褐色の砂粒及び2.5mm以下黒色光沢粒を含む	
300	弥生土器	甕	口縁	23号住居 13層				ナデ	ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	4mm以下の砂粒	
303	弥生土器	甕	口縁	24号住居				ナデ	ナデ	浅黄橙	淡黄	1.5mm以下の褐灰・黒色・灰白の砂粒	黒髪式
304	弥生土器	甕	口縁	24号住居				ナデ	ナデ	黒褐 浅黄橙	にぶい黄橙 黄灰	1.5mm以下の灰白の砂粒及び1mm以下の黒色光沢粒を含む	ク
305	弥生土器	壺?	口縁	24号住居				ナデ・突帯	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	3mm以下の灰白の砂粒及び透明な光沢粒を含む	
306	弥生土器	甕	底部	24号住居		(11.9)		ハケ目・ナデ 外底に剝離材(砂)付着	不明	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1~2.5mmの淡黄・乳白色の砂粒及び透明・黒色光沢粒を含む	
307	弥生土器	甕	底部	24号住居				ハケ目・ナデ 外底に剝離材(砂)付着	不明	浅黄	橙 淡黄	1~2mm・淡黄・乳白色の砂粒及び半透明・黒色光沢粒を含む	
308	弥生土器	壺	底部	24号住居		(11.0)		ナデ	ナデ	灰黄 褐灰	灰白 黄灰	3mm以下の灰白の砂粒及び1mm以下の無色透明光沢粒を含む	
309	弥生土器	甕	底部	24号住居		(3.8)		ナデ	ナデ 内底に炭化物付着	灰褐	黒褐	3mm以下の褐色砂粒及び1mmの無色透明・黒色光沢粒を含む	
310	弥生土器	長頸壺	口縁~頸部	24号住居	(14.5)			工具ナデ・ハケ目ナデ	ハケ目・ナデ 指ナデ	橙	橙	2mm以下の褐色の砂粒	
312	弥生土器	甕	口縁	25号住居				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の灰白・褐色の砂粒及び2mm以下の透明光沢粒を含む	黒髪式
313	弥生土器	甕	口縁	25号住居				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰	1mm以下の灰白・黒色の砂粒及び1mm以下透明・黒色光沢粒を含む	ク
314	弥生土器	甕	口縁	25号住居				ナデ	ナデ	にぶい黄 にぶい橙	にぶい黄橙	浅黄橙・白灰・灰褐の砂粒及び透明の光沢粒を含む	
315	弥生土器	壺	胴部	25号住居				ハケ目・ナデ キザミ目突帯	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄	3mm以下の灰白色・黄白色の砂粒及び透明光沢粒を含む	
316	弥生土器	甕	底部	25号住居		(8.8)		ハケ目・ナデ	ナデ	にぶい黄橙 黒褐	黒灰 黄灰	1mm以下の灰白色・褐色の砂粒及び1mm以下の無色透明の光沢粒を含む	
317	弥生土器	甕	底部	25号住居		(5)		ナデ	ナデ 内底に炭化物付着	にぶい黄褐 にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰白色・黄白・灰白の砂粒及び透明光沢粒を含む	
318	弥生土器	甕	口縁	25号住居				ナデ・突帯	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰白・黒色の砂粒及び黒色・透明光沢粒を含む	
319	弥生土器	甕	胴部	25号住居				ナデ・突帯	ナデ	にぶい黄橙 にぶい橙	にぶい黄橙	1mm以下の灰白・灰色の砂粒及び透明・金色光沢粒を含む	
322	弥生土器	甕	口縁~頸部	12・13層	(28.6)			ナデ・突帯	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙の砂粒及び透明光沢粒を含む	
323	弥生土器	甕	口縁	12・13層	(20.6)			ナデ	ナデ	にぶい褐	黒褐	1mm以下の灰白の砂粒及び透明光沢粒を含む	
324	弥生土器	甕	口縁	12・13層				ナデ・キザミ目突帯	ハケ目・ナデ	橙 黒褐	橙 黒褐	4mm以下の乳白色・茶色・灰色・砂粒及び透明光沢粒を含む	

第8表 南平第3遺跡出土土器観察表(6)

遺物 番号	種別	器種	部位	出土 地点	法 量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
325	弥生土器	甕	口 縁	12・13層				ハケ目・ナデ キザミ目突帯	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3.5mm以下の乳白色・茶色の砂粒及び 半透明・黒色光沢粒を含む	
326	弥生土器	甕	口 縁	10・11層				ナデ・キザミ目突帯	ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	5mm以下の赤褐色の石、2mm以下の 灰白・褐灰・赤褐の砂粒	穿孔あり
327	弥生土器	甕	口 縁	12・13層				ナデ・突帯	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰褐・灰白・黄褐・黒褐・ 乳白・無色透明・砂粒	黒髪式
328	弥生土器	鉢?	口 縁	9・11層				ナデ・突帯	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	4mm以下の灰白色・茶褐色・乳白色・黒色 の砂粒及び無色透明・微細な光沢粒を含む	
329	弥生土器	鉢?	口 縁					ナデ・キザミ目突帯	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	2mm以下乳白色・茶色の砂粒及び 2mm以下の黒色・透明光沢粒を含む	
330	弥生土器	甕	口 縁	12・13層				ハケ目・ナデ キザミ目突帯	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3.5mm以下の白色・淡黄色・黒色・茶褐色 の砂粒及び無色透明光沢粒を含む	
331	弥生土器	甕	口 縁	10・11層				ナデ・突帯	ハケ目・ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	2mm以下の褐・黒褐・灰褐の砂粒及び 黒色光沢粒を含む	
332	弥生土器	甕	口 縁	12・13層				ナデ	ナデ	褐灰	褐灰	3mm以下の灰褐・灰白・黒褐・乳白の 砂粒及び無色透明を含む	
333	弥生土器	甕	口 縁	12・13層				ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	3mm以下の黒色・茶褐色・灰白色の砂粒 及び1mm以下の無色透明光沢粒を含む	
334	弥生土器	壺	胴 部	12・13層				ハケ目・ナデ キザミ目突帯	ハケ目	にぶい黄橙	黄褐	2mm以下の白色・淡黄色・茶褐色の砂 粒及び無色透明光沢粒を含む	
335	弥生土器	壺	口縁~肩部	9層 11・12層	(20.6)			ハケ目・ナデ	ナデ	橙 にぶい橙	にぶい黄橙 橙	3mm以下の灰白・褐・黒褐色の砂粒	
336	弥生土器		口 縁	12層				ナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の黒色・茶褐色・灰白色 の砂粒	
337	弥生土器	壺	口 縁	12・13層				ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	橙	橙	5mm以下黒色・乳白色の砂粒	袋状口縁
338	弥生土器	壺	頸 部	12・13層				ナデ・ミガキ 突帯	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	1mm以下の褐・黄褐・灰褐・黒 褐の砂粒	
339	弥生土器	壺	口縁~頸部	12・13層	(10.0)			ナデ・凹線文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	精良	瀬戸内系
340	弥生土器	壺	口 縁	12・13層				ナデ・凹線文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2.5mm以下の灰白・黄褐・褐 の砂粒	瀬戸内系
341	弥生土器	壺	口 縁	12・13層				ナデ	ナデ・凹線 円形浮文	浅黄	浅黄	1mm以下の乳白色の砂粒	瀬戸内系
342	弥生土器	壺	口 縁	12・13層	(19.4)			ナデ	ナデ	橙	橙	1mm以下の黒・褐色の砂粒	
343	弥生土器	壺	口 縁	9層				ナデ・刺突文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1~3mmの淡黄・茶灰・乳白色の砂粒 及び黒色・半透明・光沢粒を含む	
344	弥生土器	壺	肩 部	12・13層				丁寧なナデ・刺突文	工具ナデ・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の乳白・灰白の砂粒 を含む	
345	弥生土器	壺	口縁~肩部	12・13層	(9.4)			ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	3mmの黒色及び2mm以下の茶・灰・乳 白・半透明・黒色光沢の砂粒を含む	
346	弥生土器	復合口縁壺	口 縁	12・13層	(13.9)			ナデ・櫛描波状文	ナデ	橙	にぶい橙	3mm以下の黒褐・灰褐・黄褐の 砂粒を含む	
347	弥生土器	甕	底 部	9層		(3.8)		ナデ	ナデ	にぶい黄橙 黒	灰黄褐	5mmの灰色の石及び4mm以下の灰・乳白、2m 以下の透明光沢・黒色光沢の砂粒を含む	
348	弥生土器	壺	底 部	13層		(8.4)		ハケ目	ナデ	明褐	にぶい褐	2mm以下の灰褐・黄褐・乳白色及び 微細な無色透明の砂粒を含む	
349	弥生土器	高坏	坏 部	12・13層				ミガキ	ミガキ	にぶい橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の赤褐・灰褐の砂 粒を含む	
350	弥生土器	高坏	脚 部	12・13層				ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙 黒褐	2mm浅黄及び1mm以下の灰白色・灰色・ 無色透明光沢の砂粒を含む	
351	弥生土器	椀	口 縁	12・13層				丁寧なナデ	丁寧なナデ	明黄褐	にぶい黄橙	8mmの乳白色の石を含む	
352	弥生土器	鉢?	口 縁	12・13層				ハケ目・ナデ	ナデ	橙	橙	3mm以下の黄褐・褐色及び黒色 光沢の砂粒を含む	穿孔あり
353	弥生土器	壺	胴部~底部	9層~11層		(8.6)		ミガキ・ナデ	工具ナデ・ナデ	にぶい黄橙 にぶい橙	浅黄 暗灰黄	3mm以下乳白・灰白・黒・茶褐色及び2mm 以下の無色透明光沢の砂粒を含む	
354	弥生土器	壺	底 部	12・13層		(10.4)		ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄	2mm以下の黒白・乳白・茶褐色及び1mm以下の 柱状の黒色光沢・無色透明光沢の砂粒を含む	
355	弥生土器	壺?	底 部	9層~11層		(4.3)		ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の乳白・茶褐・黒色及び 柱状の黒色光沢の砂粒を含む	上げ底
356	弥生土器	壺	口縁~肩部	4層	(6.7)			ミガキ	ナデ	赤褐	赤褐	2mm以下の白・灰白・褐色の砂 粒を含む	丹塗
357	弥生土器	壺	口縁~肩部		(7.9)			ミガキ	ミガキ・ナデ	赤	にぶい黄橙	2mm以下の褐・灰白色の砂粒 を含む	丹塗
358	弥生土器	壺	口縁~頸部	4層	(7.8)			ミガキ	ミガキ・ナデ	にぶい黄橙	橙	6mm灰白の石及び1mm以下の灰・ 褐・灰白色の砂粒を含む	丹塗
359	弥生土器	壺	底 部	12・13層		(8.2)		ミガキ・ナデ	不明	橙 明黄褐	浅黄	7mmの黄橙の石及び1mm以下の黒・ 灰白・にぶい黄橙の砂粒を含む	丹塗
360	弥生土器	長頸壺	胴 部	10・11層				ナデ・重孤文	ナデ	橙	黄灰	5mm以下の灰白色及び1mm以下の黒色 光沢・透明光沢の砂粒を含む	免田式
361	弥生土器	長頸壺	胴 部	12・13層				ナデ・重孤文	ナデ	橙	橙	2mm以下の茶色及び1mm以下の乳白色・ 黒色光沢・透明光沢の砂粒を含む	免田式
376	弥生土器	坏	坏	4層				ヘラ研り 回転ナデ	回転ナデ	明オリブ灰	明青灰	5mm以下の灰白の砂粒を含む	
377	弥生土器	壺	肩 部	4層				回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	精良	
378	弥生土器	鉢?	口 縁	4層				回転ナデ	回転ナデ	浅黄	灰黄	精良	
379	弥生土器	椀	底 部	9層		(5.0)		施釉貫入あり 体部下位から高台部は露胎	施釉・貫入あり	オリブ灰	オリブ灰	灰色で精良	高取山 か?
380	弥生土器	皿	口縁~底部	4層	(9.8)	(3.6)	2.5	施釉・染付・露胎	施釉・染付	灰白	灰白	白色で精良	碁笥底 ・明末
381	弥生土器	皿?	底 部	4層		(7.0)		全面施釉・貫入 目跡	施釉・貫入 目跡	灰白	灰白	灰白色で精良	朝鮮産・ 砂目積み

第9表 石器観察表

レイアウト番号	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
97	3号住居	磨製石鏃	(42)	1.8	0.4	3.4	頁岩	Ⅱb-3
98	3号住居	石包丁	(45)	(25)	0.4	7.0	頁岩	穿孔なし
108	4号住居	局部磨製石斧	92	32	1.6	65.8	砂岩	
109	4号住居	磨製石鏃	(40)	1.7	0.2	2.0	頁岩	
139	7号住居	磨石	(79)	11.3	6.3	765.5	溶結凝灰岩	赤色顔料付着
140	7号住居	磨製石鏃	3.9	1.6	0.3	2.8	頁岩	Ⅱa-2
141	7号住居	磨製石鏃	(3.4)	1.7	0.3	1.9	珪質粘板岩	I b-2
142	7号住居	磨製石鏃	3.8	2.0	0.2	1.7	頁岩	I b-2
143	7号住居	磨製石鏃	(25)	1.8	0.3	1.5	頁岩	I a-3
150	8号住居	磨製石鏃	3.5	1.9	0.4	3.1	頁岩	Ⅱa-2
157	9号住居	磨製石鏃	6.0	2.2	0.4	7.7	頁岩	Ⅱa-2
158	9号住居	磨製石鏃	(3.1)	1.6	0.3	1.8	頁岩	Ⅱa-3
167	10号住居	砥石	11.8	3.5	3.2	207.1	流紋岩	
168	10号住居	磨製石鏃	6.0	1.8	0.3	3.7	赤紫色頁岩	I c-1 日之影産か
169	10号住居	磨製石鏃	4.8	2.0	0.3	4.5	頁岩	I b-3
170	10号住居	磨製石鏃	5.0	2.1	0.4	4.8	頁岩	Ⅱb-3
181	12号住居		5.5	2.9	0.4	7.3	頁岩	
189	16号住居	磨製石鏃	4.7	1.8	0.3	2.9	流紋岩	Ⅱb-2
208	17号住居	磨製石鏃	2.8	1.6	0.2	1.2	頁岩	Ⅱa-1
209	17号住居	磨製石鏃	(3.9)	1.7	0.2	2.2	珪質粘板岩	Ⅱa-2
210	17号住居	磨製石鏃	4.4	2.0	0.4	3.2	頁岩	Ⅱa-1
211	17号住居	磨製石鏃	(5.5)	(1.8)	0.3	3.7	質粘板岩	Ⅱa-1
246	18号住居		10.0	3.4	0.4	21.3	頁岩	
247	18号住居	磨製石鏃	(3.2)	(1.7)	0.3	1.3	頁岩	
248	18号住居	磨製石鏃	(4.0)	1.5	0.3	1.9	頁岩	Ⅱa-2

レイアウト番号	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
249	18号住居	磨製石鏃	2.6	1.5	0.2	1.2	頁岩	I b-3
259	19号住居	磨製石鏃	2.6	1.5	0.3	1.6	頁岩	I a-2
260	19号住居	磨製石鏃	(4.0)	1.6	0.4	2.2	流紋岩	Ⅱb-2
261	19号住居	磨製石鏃	(5.6)	2.0	0.4	5.1	珪質粘板岩	Ⅱb-1
293	22号住居	磨製石鏃	(4.0)	2.6	0.3	3.8	流紋岩	I b-1
301	23号住居	磨製石鏃	(3.1)	1.5	0.2	1.3	珪質粘板岩	Ⅱa-1
302	23号住居	磨製石鏃	(2.6)	1.7	0.3	1.5	流紋岩	
311	24号住居	磨製石鏃	2.9	1.2	0.2	0.9	流紋岩	Ⅱa-2
320	25号住居	磨製石鏃	3.5	1.5	0.2	1.4	珪質粘板岩	Ⅱa-2
321	25号住居	磨製石鏃	(3.9)	1.7	0.3	2.6	珪質粘板岩	Ⅱa-1
362	13層	磨製石鏃	5.3	2.0	0.4	4.8	頁岩	Ⅱa-1
363	12・13層	磨製石鏃	3.8	1.4	0.2	1.8	珪質粘板岩	Ⅱa-2
364	12・13層	磨製石鏃	(3.1)	1.3	0.3	1.7	珪質粘板岩	Ⅱa-3
365	12・13層	磨製石鏃	(2.8)	2.2	0.2	1.8	頁岩	I b-1
366	4層	磨製石鏃	3.1	2.3	0.3	2.4	頁岩	I a-3
367	4層	磨製石鏃	(2.7)	3.0	0.3	3.2	珪質粘板岩	I a-1
368	9層	磨製石鏃	(1.3)	1.3	0.2	0.5	流紋岩	
369	12・13層	磨製石鏃	2.7	1.3	0.3	1.0	流紋岩	I b-3
370	12・13層	磨製石鏃	2.5	1.7	0.2	1.4	頁岩	I a-2
371	13層	磨製石鏃	(3.2)	2.0	0.4	2.4	頁岩	I a-3
372	4層	磨製石鏃	2.5	1.6	0.2	1.2	珪質粘板岩	Ⅱa-1
373	4層	磨製石鏃	(3.9)	1.5	0.3	1.7	結晶偏岩	I b-4
374	11・12層	石包丁	(5.9)	3.0	0.6	14.2	頁岩	穿孔2つあり
375	10・11層	石包丁	(4.4)	2.1	0.4	4.3	頁岩	穿孔2つあり

第6節 その他の遺構と遺物

1 遺 構

本遺跡において出土遺物などから縄文・弥生時代以外の時期とみられる遺構は検出されていない。しかし、時期の特定ができない遺構として柱穴、土坑2基、溝状遺構2条が検出されている。

a 土坑

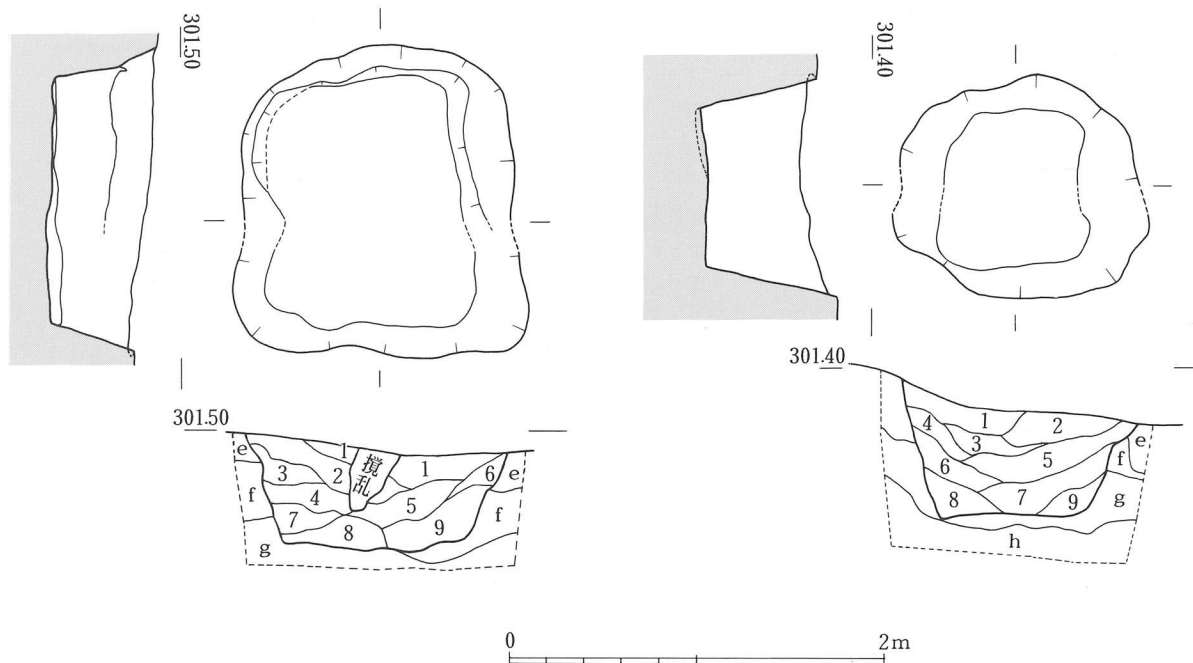
1号土坑は4号住居址の南側に隣接し、1号溝状遺構により切られた1辺約1.5mほどの隅丸方形の土坑で、検出面からの深さは約70cmを計る。遺物の出土はほとんどなく、調査時点でその検出位置から4号住居に関連するものかと思われたが、第4層出土の炭化物の分析結果では、5世紀半ば頃の暦年代が報告されている。(別篇参照)

2号土坑は1号土坑の南東側に位置し、1号土坑と同様に1号溝により切られる。直径約1.2mの不整形円の平面プランで、検出面からの深さは最大で約80cmを計る。この土坑においても炭化物の年代測定分析を実施しているが、その結果はほぼ2号と同様であった。(別篇参照)

b 溝状遺構

1号溝状遺構は調査区の西側に位置し、2・3号土坑を切る。削平の影響により全体像は不明だが、検出された現況で長さ20m、幅約1m、深さは最も深い部分で10cmほどしかない。硬化面などもみられず、遺物の出土もほとんどないことから性格および時期については不明である。

2号溝は最も東側の独立した調査区内を東西に横切る形で検出され、北側で検出された柱穴群を切る。1号溝と同様に削平の影響を受けており全体像は不明である。検出された現況で長さ8m、幅約1m、深さは最も深い部分で25cmを計る。埋土は軟質の暗褐色土(13層に近い)で遺物はみられず、性格および時期は不明である。



第45図 1・2号土坑実測図

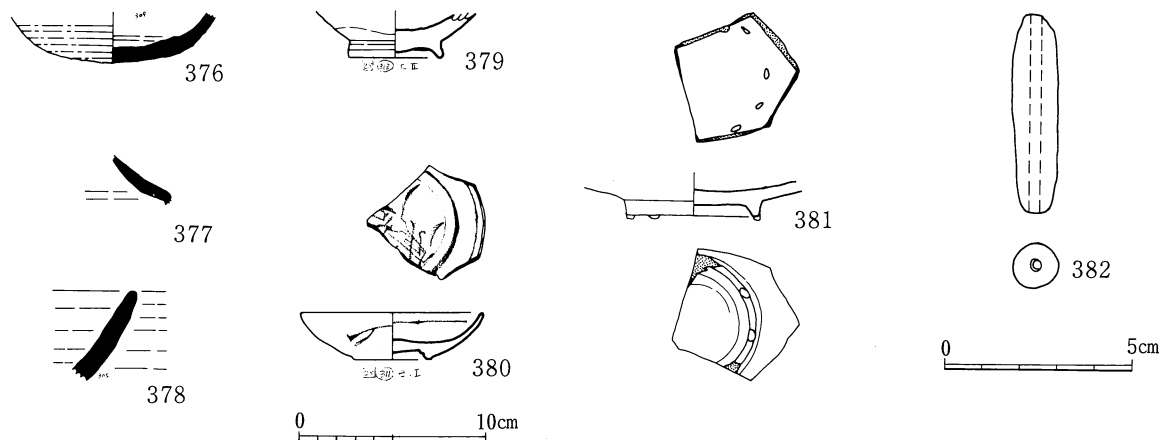
c 柱穴状遺構群

2号溝状遺構が検出された最も東側の独立した調査区の北側に30基ほど検出されている。検出面は13層上面で埋土は軟質の暗褐色土（9層に近い）であった。切り合いの状況および埋土から2号溝よりも古い時期の遺構であることは明らかだが、遺物の出土もないため時期については不明である。また、柱穴群として報告しているが、明瞭な柱根などの痕跡はみられず、遺構の性格は不明である。

2 遺物

縄文・弥生時代の遺物以外に少量の須恵器および中・近世の陶磁器などが出土している。また、旧表土中から出土した遺物の中には鉄鏝の破片とみられるものが3点ほどみられた。

376～378は須恵器である。376は古墳時代の坏身もしくは蓋である。377は壺の肩部、378は鉢の口縁部とみられるが、かなり軟質である。379は国産の磁器碗で濃緑色系の施釉が施されている。高台と体部の下位1cmほどは露胎である。380は染付の皿で碁笥底を持ち、見込みに擬人化した吉祥文字、外面に略化した文字のような文様が施されている。381は16世紀前後の朝鮮半島系の皿とみられ、畳付と見込みに砂目積みの痕跡がみられる。382は土錘で最大長約5.3cm・最大幅約1.3cm・重さ7.2gをはかる。



第46図 須恵器・陶磁器・土錘実測図

第7節 まとめ

南平第3遺跡では縄文時代から近世の遺構・遺物が検出され、その中心を為すのは弥生時代の集落であった。縄文時代については第2節で述べたように明確な形での遺構は検出されなかったが、後期から晩期にかけての遺物がある程度出土していることから、近接地に該期の遺跡が存在する可能性が高い。

ここでは縄文土器と弥生時代の遺構・遺物について簡単に触れ、まとめとする。

1 縄文土器について

縄文時代の土器は後期後半頃と晩期中頃のものに大きくわかれる。

2は口縁部の施文帯において縄文を地文として2条の沈線文間に山形の沈線を連続して繋ぎ波状（鋸歯状）の文様を施している。この文様は大分県大野郡大野町松木遺跡出土資料⁽¹⁾との関連が伺われるが、胴部に文様をもたない点で異なる。8、9は大きさが異なるが、胴部の施文はほぼ同様であり、大分県神原遺跡第3集中部出土土器⁽²⁾と類似している。これらの土器は川南原遺跡群の報告⁽³⁾においてそれぞれ「松の木原段階」と「西平式第1段階」とされ⁽⁴⁾、後者は熊本において辛川Ⅱ式とされている⁽⁵⁾ものに類似している。この3点以外に1・3・5・6・10の土器はともに10号住居址の埋土からの出土であり、施文や調整が異なるものの時期的に近いものである可能性が高い。また、13は胴部の平行沈線間に波状紋が施されており、大分県夏足原遺跡出土の同様の土器に類似するものとみられる。この土器の施文は元住吉山式の影響を受けて成立した可能性が指摘されている⁽⁶⁾。これら以外のものとして、11や12はその器形および施文が前述の一群とは異なり、やや古い様相を呈している。

晩期の土器には粗製の深鉢と精製の浅鉢がみられる。粗製の深鉢は口縁部に無刻目突帯を1条巡らすもので、内・外面ともに粗い条痕がみられる。精製浅鉢は22や29などのやや古いものを除いて黒川式を前後する時期のもの⁽⁷⁾と考えられ、深鉢とも時期的にはほぼ一致している。

2 弥生土器について

ここでは遺構および包含層出土の土器を一括して扱い、甕・壺の口縁部を中心に特徴的なものについてのみ以下のように分類する。なお、甕・壺の胴部や底部およびその他の器種については特に分類せず、必要に応じて適宜取り上げる。

(1) 甕

甕Ⅰ類 口縁部が内側に張出すいわゆる黒髪式で、胴部・底部の形態が不明であるため、口縁部の形態により大きく3つに細分する。

A 口縁部が比較的長く、内湾するもの（196、213、263、275、312、327）

B 口縁部が比較的短く、内湾するもの（84、100、131、144、151、176、197、252、262、286、303、304、313）

C 口縁部が短く、断面が三角形状を呈するもの（112、132、212、251、276）

甕Ⅱ類 いわゆる下城式系のもので口縁部および突帯により4つに細分する。

A 口縁部下に1条の刻目突帯を持ち、口唇部外端がやや張出すもの（110、111、298、326、330）

- B 口縁部下に1条の刻目突帯を持ち、口唇部外端がやや張出さないもの (185)
 - C 口縁部下に2条の刻目突帯を持ち、口唇部外端がやや張出すもの (175、250、324、325)
 - D 口縁部下に2条の刻目突帯を持ち、口唇部外端がやや張出さないもの (90、99)
- A・Cには口唇部外端の張出部に刻目を持つもの (326、330、175、324、325) と持たないもの (110、111、298、250) がみられる。

甕Ⅲ類 薄手でくの字状を呈する口縁部をもつもので6つに細分する。

- A 口縁部が外反し、わずかに内側に張出すもの (89、117、215)
- B 口縁部が内湾し、わずかに内側に張出すもの (171、214)
- C 口縁部の中位でさらに外側に開くもの (88、118、177、198、199、219、220、297)
- D 頸部の強い撫によって口縁部の中位から先が膨らみ気味になるもの (182、217、314)
- E 口縁部で最大径を計るもの (159、172、200)
- F 口縁部が比較的短く、胴部が球形に近いと思われるもの (173、216、218)

甕Ⅳ類 粗製の甕を一括し、6つに細分する。

- A 短い逆L字条の口縁部をもち、いわゆる工字突帯にはならないと思われるもの (160、223、280)
- B 胴部にいわゆる工字突帯をもつもの (101、114、162、193、222、255、256、288、294、295、296、319)
- C 胴部に直線文と櫛描波状紋が施されたもの (146、194)
- D 頸部下に多条の直線文が施されたもの (206)
- E 胴部に直線文とそれから垂下する数条の弧文が施されたもの (82)
- F 胴部に屈曲した突帯を有するもの (257)

この他に80、115、161、191、195、224、225、268、269、273、288、289、290、299、300、318、322、323も粗製甕とみられるが、その諸特徴は多岐に渡り、残存部分のみでは判断できないため、特に細分しない。また、121、226、227、258、274、291、309、317、347はこのⅣ類の底部とみられる。

甕Ⅴ類 肥厚した口縁部に2条の凹線がめぐるもの (332、340)

(2) 壺

壺Ⅰ類 鋤先状の口縁部を有するもので7つに細分する。

- A 口縁部が外上方に外反しながら開くもの (87、124、153)
- B 口縁部が外上方に直線的に開くもの (178、243)
- C 口縁部がほぼ水平方向に開くもの (164、233、278)
- D 口縁部がほぼ水平方向に開き、口唇部が下に垂れ下がり気味のもの (123、154)
- E 口縁部が外下方に開くもの (228、236、342)
- F 口縁部が内湾気味のもの (229)

このⅠ類には円形浮文を伴うものと伴わないものがある。また、192のような肩部に多条の三角突帯をもつものや、165のような貼付浮文をもつものはⅠ類のものであるとみられる。

壺Ⅱ類 口径が比較的大きく、くの字状の口縁部をもつもので、3つに細分する。

- A 口唇部に刻み目をもつもの (122、202、283)
- B 口縁部の中位でさらに屈曲するもの (103、125、126、201、335)
- C その他 (230、237、287)

267などの胴部最大径に刻目突帯をもつものはⅡ類のものであると考えられる。

壺Ⅲ類 長頸壺を一括してⅢ類とし、4つに細分する。

- A 胴部と頸部に突帯をもち、細く直立する頸部からやや内湾気味に口縁部が開くもの (282)
- B 袋状の口縁部をもつもの (337)
- C 頸部に沈線をもち、やや外傾気味の頸部から外反しながら口縁部が開くもの (310)
- D 算盤玉状の胴部をもつもの (106、272、360、361)

Dには重弧文が施されたもの (272、360、361) と無文のもの (106) がある。

壺Ⅳ類 小形で口縁部が短く外反するもの (357、358)

壺Ⅴ類 頸部に突帯をもち、直立気味の頸部から口縁部が大きく外反するもの (231)

壺Ⅵ類 短頸の壺で口縁部がやや内湾するもの (345)

壺Ⅶ類 外反気味の頸部から口縁部がわずかに外反しながら開くもの (356)

壺Ⅷ類 肥厚した口縁部に2条の凹線がめぐるもの (339)

壺Ⅸ類 複合口縁をもつもの (346)

以上、甕を5つ、壺を9つに分類したが、その大半は中期後葉から後期中葉のものである。甕ではⅠ類は形態的に差はあるものの、時期的にあまり差はないと考えられる。いわゆる黒髪式の中でも終末期のもので中期後葉頃のものとして捉えておきたい。また、このⅠ類の特徴をわずかに残すものがⅢA類であり、Ⅲ類はⅠ類に続く後期前葉のものともみられる。Ⅱ類も突帯の数や口唇部の形状にやや差はあるものの時期的にはあまり差はなく、中期末頃のものと考えられる。Ⅳ類ではA類が口縁部形状等に最も古い要素が認められ、それに続くともみられるB類の中にも突帯数の減少や胴部最大径の位置などにおいて時期差が伺われる。Ⅴ類は壺Ⅷ類とともに瀬戸内地域との関係が考えられるが、搬入品ではなく模倣して製作された在地産のものとの可能性がある。

壺ではⅠ類に中期的な要素が強くみられるものである。Ⅱ類は肥後地域との関連が強いとみられ、概

ね後期のものと考えられる。Ⅲ類ではAおよびBが須玖式系のもので、D類は免田式との関連がみられる。
また、Ⅳ類は須玖式系のものである。

3 竪穴住居址について

今回の調査によって確認された竪穴住居址は26軒である。土器の時期では概ね中期後葉から後期中葉のものがみられたが、住居の大半は中期末から後期前葉の近接した時期に造られたものと考えられる。その近接する時期に造られた住居における遺構の切り合い状況では、最大3回の切り合い（5号→3号→4号、16号→15号→17号）がみられるため、少なくとも3時期以上の住居群の変遷が予想される。ただし、各遺構出土の土器は床面から浮いた状態のものや異なる時期のものが混在しており、あまり良好な共伴資料とはいえない。また、各住居においては出土遺物の量が少ないものが多く、積極的に時期差を考えることは躊躇される。ここでは検出された住居址の形態的特徴について若干触れておく。

第10表は各住居址にみられる諸要素についてまとめたものである。平面形態では殆どが方形を基調としたものであり、この傾向は周辺地域における同時期の集落とも一致している⁽⁸⁾。床面積では6号の4.7㎡を最小として18号の29.7㎡が最大で、あまり大形の住居は検出されなかった。主柱穴の数では本数がほぼ確認できる22軒の内4本のものが5軒、2本のものが16軒と2本主柱のものが多い。床面積の特に大きな18・22号は共に4本主柱であり、大形のものに4本主柱が採用されている傾向がみられる。2本主柱のものでは主柱の並ぶ方向が棟方向と想定されるが、その向きが傾斜（等高線）に対してほぼ直角するものと平行するものがみられる。この内、平行するものは床面積の規模がほぼ15㎡程度であり、後期前葉でもやや新しい様相の土器が出土している点でも共通していることから、時的な特徴の可能性はある。この他、17号では出土土器に後期中葉から後葉頃の甕B類がみられることから、張り出し部をもつものは後期中葉以降の住居の特徴である可能性がある。

以上、今回の調査成果について簡単にまとめたが、遺物の詳細な時期の検討や、遺構の時期など非常に判然としないものとなり課題を残した。近年、同町内において調査された古城遺跡⁽⁹⁾においてもほぼ同時期の集落が検出されており、今後それらの類例の増加をまって、検討したい。

註)

- 1) 牧尾義則・羽田野光洋 1980 「第3章 松木遺跡の調査」『大野原の遺跡』大野町教育委員会 P 122 第80図10の土器。
- 2) 綿貫俊一他 1991 「第Ⅱ章 神原遺跡」『川南原遺跡群』大分県教育委員会 Fig 14 1・3の土器
- 3) 註2) 文献に同じ
- 4) 註2) 文献の「第Ⅳ章 まとめ」第1節 大野川流域を中心とした西平系土器の変遷
- 5) 富田紘一 1986 「Ⅱ. 西山南麓の未紹介遺跡」 8. 千原台遺跡出土縄文土器の位置づけ『戸坂遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会
- 6) 高橋信武 1981 「片粕系土器の細分にむけて」『赤れんが』創刊号 赤れんが出版会
- 7) 堂込秀人 199 「南九州縄文晩期土器の再検討」 入佐式と黒川式の細分 『鹿児島考古』第31号 鹿児島県考古学会 を参考とした。
- 8) ここで言う周辺地域とは大分県の大野川上・中流域を指す。
後藤一重他 1992 b 竪穴群について「第5章 まとめ」『菅生台地と周辺の遺跡』XV 竹田市教育委員会
- 9) 平成10年度に宮崎県教育委員会によって発掘調査

〈参考文献〉

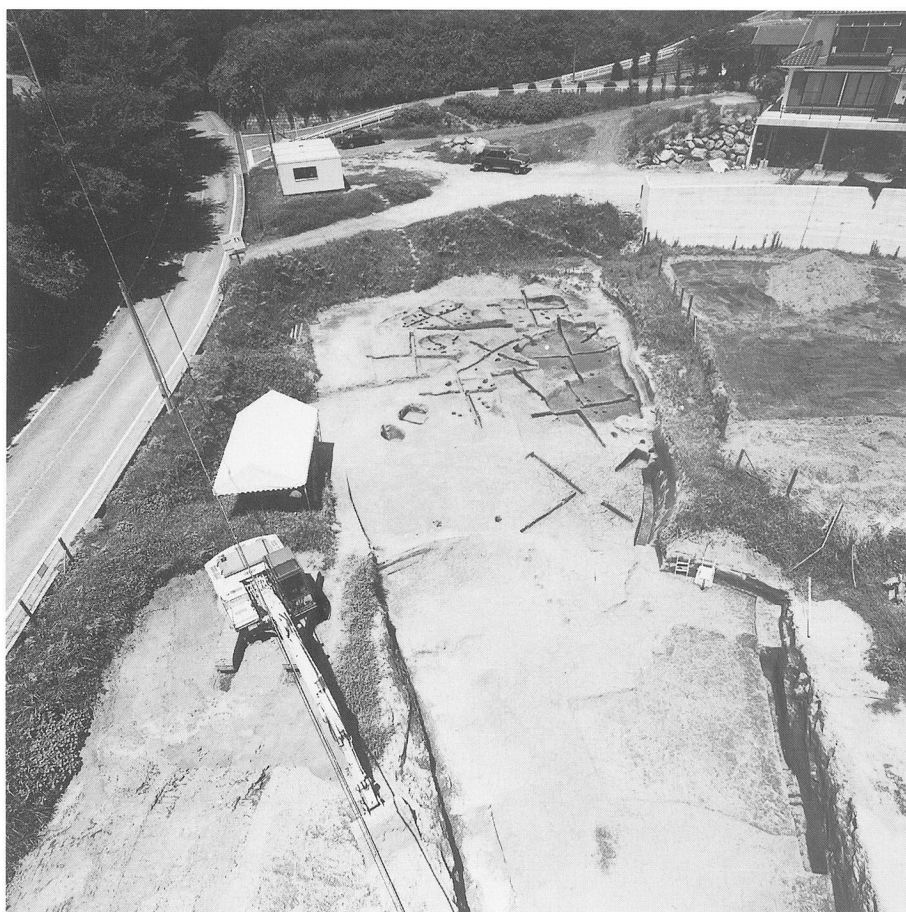
- 岩永哲夫他 1968 『薄糸平遺跡』 日本鉄道建設公団下関支社・高千穂町教育委員会
清水宗昭他 1980 『大野原の遺跡』 大野町教育委員会
西健一郎 1983 「黒髪式土器の基礎的研究」『古文化談叢』 第12集
平岡勝昭他 1983 「梅ノ木遺跡」『熊本県文化財調査報告』第62集
石川悦雄 1983 「新田原遺跡」『新富町文化財調査報告書』 第4集 新富町教育委員会
長津宗重他 1984 「セベツ遺跡」『高千穂町文化財発掘調査報告書』 第3集 高千穂町土地開発公社・高千穂町教育委員会
長津宗重他 1985 「梅ノ木遺跡」『高千穂町文化財発掘調査報告書』第4集 宮崎県西臼杵支庁・高千穂町教育委員会
後藤一重他 1986 『菅生台地と周辺の遺跡』 XI 竹田市教育委員会
小林昭彦他 1987 『菅生台地と周辺の遺跡』 XII 竹田市教育委員会
吉永 明 1989 『下堀切遺跡Ⅱ』 八代市教育委員会
谷口武範 1991 『樋他遺跡』 東郷町教育委員会
長津宗重 1993 「宮ノ前第2遺跡」『国道218号線高千穂バイパス建設関係発掘調査報告書』
木崎康弘他 1993 「狩尾遺跡群」『熊本県文化財調査報告』 第131集 熊本県教育委員会
竹田宏司 1993 『神水遺跡Ⅱ』 熊本市教育委員会
田崎博之 1998 「Ⅳ 九州系の土器からみた凹線文系土器の時間的位置」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』
石川悦雄 1998 「宮崎の弥生土器編年」宮崎考古学会第36回例会資料

第10表 住居址一覧表

住居名	平面形	床面積 (㎡)	主 柱 本 数	棟方向	焼土の有無及び位置	床の状況	備 考
1号	方形	(14.4)	4 ?	不明	未検出		
2号	方形	(12.8)	4 ?	不明	南東主柱穴の東側		
3号	方形	不明	?	不明	中央北寄り		
4号	方形	10.0	4	不明	西側柱穴の東側	一部硬化	
5号	方形	不明	?	不明	未検出		
6号	方形	4.7	2 ?	不明	北主柱穴の北東側	一部硬化	非常に小形
7号	不整形	不明	?	不明	中央南側壁寄り		
8号	方形	(13.7)	2	直交	未検出	一部硬化	
9号	方形	(9.0)	2 ?	直交	未検出		主柱穴間に土坑
10号	方形	(22.2)	2	直交	未検出		南壁寄りに土坑
11号	方形	16.3	2	平行	中央東寄り		
12号	方形	不明	2 ?	直交	未検出		中央北寄りに土坑
13号	方形	不明	?	不明	(11号の南壁寄りのものが伴う可能性)		
14号	方形	(12.0)	2 ?	直交	中央南寄り		
15号	方形	(15.8)	2	平行	未検出		
16号	方形	(18.7)	2 ?	直交	未検出		
17号	方形	19.0	2	直交	未検出	主柱穴間硬化	北西に張り出し部を持つ
18号	方形	(29.6)	4	不明	未検出	一部硬化	南側主柱穴間に土坑
19号	方形	13.4	2	平行	未検出	一部硬化	西側に土坑
20号	方形	15.0	2	平行	中央・北主柱穴周辺	一部硬化	
21号	方形	19.2	2	直交	東主柱穴周辺		中央南寄りに土坑
22号	方形	29.3	4	不明	中心やや北側		南主柱穴間に土坑
23号	方形	14.0	2	直交	未検出		南壁寄りに土坑
24号	方形	不明	2 ?	平行?	未検出		
25号	方形	不明	2 ?	平行?	未検出		
26号	方形	不明	?	不明	未検出		北側に張り出し部を持つ可能性が高い

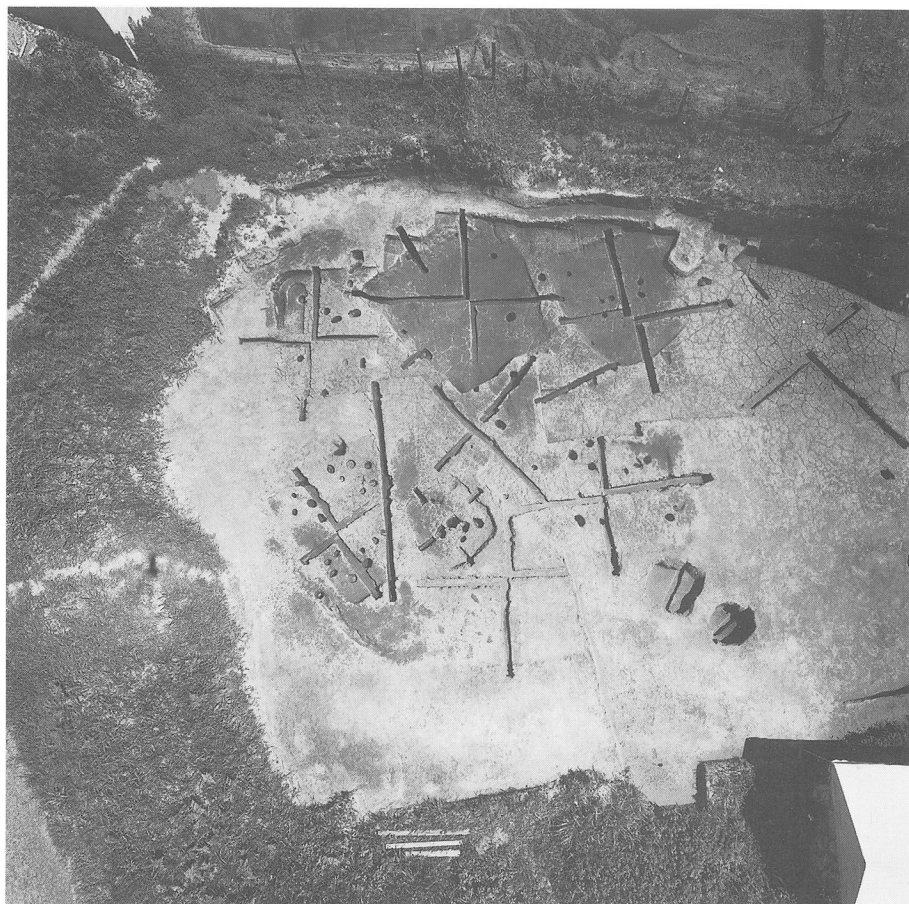


調査区北西側
遺構検出状況
(西より)



調査区北西側
遺構検出状況
(東より)

図版 2



調査区北西側
遺構検出状況



調査区北西側
遺構検出状況